
元一般人の勇者は世界を救う

シェイカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元一般人の勇者は世界を救う

【NZコード】

N9101V

【作者名】

ショイカー

【あらすじ】

普通の高校生だった主人公原 康太はひょんなことから自分がプレイしていたオンラインゲーム、『アザーワールド』に行くことに。特に争いもない平和な世界で彼は気楽な生活を始めるつもりだったんだが・・・
滅びかけの国を救う為に頑張るお話を
タイトル変更しました。

プロローグ（前書き）

読み返したら神様がキモかったので書き直してみた。

プロローグ

オンラインゲームが趣味のごく普通な高校生。

それが俺、原 康太だ。

特別な能力なんて無いしイケメンでもスボーッ万能でも頭脳明晰つてわけでもない。

そんな俺でも言いたい事はある。

「ニヒルヘ..」

目の前には雲の上に神殿が立つていて天国のようだ。

「つてなんで雲にのれてんの！？あとあそこの人輪つかあるし！？まさかホントに天国！？俺いい事してねーぞ！？」

・・・いや落ちつけ俺。冷静にここまでを振り返れ。
一度ほど深呼吸。ふーっ！ふーっ！・・・ほへえ・・・よし。

「回想シーン入りまーす」

そう宣言して俺は記憶を掘り返し始めた。

車にひかれて目が覚めたらニヒルヘいた。

びっくりするほど回想シーンが短い。

。 入れても1~8文字ですよ皆さん。

ぼーっと自分で自分にツッコミ入れてるといかにも神様って感じの人気が近づいてきた。

「お主が原 康太かね？」

「え？ああはいやつですかビ・・・。」「せび」なんですか？天国つてヤツですか？」

「理解が早くて助かるぞい」

いや、ぞいつてなんでそんな笑顔なんすか・・・。

「とこいつ事は俺は死んだけど何か目的があつて神様の元に呼ばれたつてことですか？」

「うむ・・・その件なんじやが・・・」

「くへつ

「間違えて殺してしまつたのじや」

・・・いやいやいやいやー間違えたつてそんな理由で俺死んだの！？

?間違えて命一つ奪うつてひどくね！？

あとそのテヘッ 見て吐きそうなんですが！

「神様にも失敗の一つか一つかあるわい」

間違いのレベルがおかしい

「ドジヤ・・・間違えて殺したからこなお主にまつ一度現世に戻つてもらおうと思つてな」

それはありがたい。

「ただ現世のお主の体はもう火葬されて無いのじや」

・・・え？

「なでお主には新しい体を『えて異世界で生きてもらおうとかつとるんじやが、どうじやるつか？」

異世界・・・いいね異世界・・・エルフとかエルフとかエルフトか。

「その世界エルフとか異種族も住んでるんですか？」

「もちろんじや。魔法もあるぞ。といつよつお主も知つてある世界じや」

「え？」 どゆこと？

「お主がプレイしていたオンラインゲーム『アザーワールド』にそのまま転生じや」

「レベルとかスキルは？」

「お主がプレイしていたキャラをそのまま引き継ぎじやな」

解説・・・アザーワールドとは

20××年開始されたオンラインゲーム。専用の機械を使つ事でフルダイブを可能にした。

ぶっちゃけると○○○みたいな感じ。

結局天国での話をまとめるとこんな感じだ。

- 1、間違えて殺された
- 2、おわびに異世界で第一の人生を
- 3、肉体は俺がプレイしていたキャラを使用

らしい。まあ元の世界に好きな人がいたわけでもないし異世界に行くことへの違和感とか拒否とかは無い。それよりかわいい子がいるとか魔法がつかえるとか男子なら一度は憧れる物へのワクワクが止まらねえ。

「よし・・・転移の準備は整つたぞい。せっそく飛ばすとしよう、

原 康太よ。目をとじるのじ

言われた通り目を閉じると

俺は異世界へと旅立つた。

川のせせらぎや木の揺れる音が心地いい。
地面に倒れて全身で日差しを浴びる。

うーん・・・うん?

「ひでー！」

あ、天国でも同じこと言つたな・・・。

とりあえず体を起こし田を開けてみる。

辺り一面森で近くには川が流れてる。

どうやらちゃんとアザーワールドの世界に来れたようだ。
そこまで考えたところで自分の体を見る。

俺の装備は普通の旅人が着てるようなラフな格好だ。どうやらアイテムの引き継ぎはないらしい。

腰にはいかにも初期装備な剣がついている。

「えーっと、能力はどうやって見るんだっけ?」

とりあえず頭の中でゲームと同じように(ワインディングオープン)と唱えてみると、

俺の目の前に小さな小窓が出た。

「おおつーちゃん俺のキャラの能力になつてるー!」

カイル LV73 剣聖

そして下には能力値がズラリと並んでいる。

剣聖は剣系スキルにボーナスが付き、クリティカル率(発動すると

相手の防御0でダメージが計算される)

が全クラス中最高の剣士系最上位クラスだ。

Lv73は最大Lv200のこのゲームではそこまで高い数字ではないがクラスアップは一定の条件を満たせば行えたのでレベルはあまり関係ない。

「にしてもすげーグラフィックだな。ゲームだとここまで精密にはできてなかつたけど。まあそれはともかく、移動しないとな」

と言つたところで気づく。どっちに行けばいいんだろう？
どっちに街や村があるのか分からぬし、そもそもこんな装備じゃ野宿も無理だ。

「あのじじい、もつとちゃんとしたところ出せよ・・・」

まあ川に沿つて歩いてみるか。

「ああああああああああああああああ！」

女の子の悲鳴が聞こえる。という事は人がいるって助けねえと！

俺は全速力で声のした方へ向かい声の主を発見した。

彼女は村娘なんだろうか、片手に木の実の入ったカゴを持ち怯えていた。

彼女を襲つた相手はベアーウルフ。序盤のザコ敵だ。大体Lv10もあれば楽に勝てる。

「はっ！」

彼女が襲われる前にベアーウルフに切りかかる俺の剣が青色に光る。
スキル「居合切り」を使った為だ。

その一撃で十分だつたようでベアーウルフは動かなくなつた。

「大丈夫ですか？」

彼女は茶色い髪を肩にかかるくらいまで伸ばした美人さんだつた。いきなり美人さんとは異世界ばねえな。

「た、助けてくれてありがとうございます。あの・・・あなたは？」
「カイル。あんたは？」平常心平常心。こいつの第一印象が大事だ。

「私は・・・その」

彼女は何か考え込みながらうなつていたがすぐに口を開いた。

「私はメイメール・フォン・エスペリア。エスペリア王国の第一王女です」

いきなり王族かよ！？

いきなり迷子になつたり王女と出会つたり異世界は思つた以上にツツ「ミニどころが満載だな！」

ところでエスペリアってそんな国あつたつけ？

確かアザーワールドの公式設定は

世界ができるからおよそ二〇〇年でマドラ、シドム、エルビシア、オンペリア、リージアの五大国が霸権を争う戦国時代みたいな設定だつたつけか。

エスペリアなんて無かつたし・・・もしかして

「えーっと、王女様。俺は山奥の村で育つたので詳しくは知らないのですが・・・今は大体何年くらいなんでしょうか?」

王女様(仮)がすこく疑つてゐるのが伝わつてくる。そりやそうだ、いくら山奥とは言え今が何年のかも分からぬなんてことはまずありえない。

しかし助けた恩つてのが効いたのか、深く追及する事もせず王女様(仮)は答えてくれた。

「今は751年、五大国戦国時代と呼ばれています」

「確かに50年ほど前にはエスペリアなんて国は無かつた氣がするんだが?」

「それはそうでしょう。エスペリアは20年ほど前にエルビシアがオンペリアを倒し出来的た国ですから」

「なんで国名を変えたんだ?」

「エルシビアとオンペリアは以前から友好が深く、倒したと言つてもほとんど被害は出さず実質両国が手を結んだような形で、その時にエルベシアの血族がそのまま王族としてエスペリアを名乗るようになつた。

オンペリアの王族は不幸なことに生まれた子がすべて女性で血族が絶える寸前でしたのでお互い合併することに反対はほとんど無かつた。私は母上からそのように教わりました」

ふむう、天国に居たのはほんのわずかなのに50年も経つてゐるとは。そういうや俺の元の体も気づいたら火葬された後だつたからな。時間

の流れが違つたのだらう。

「じゃあ最後に。なんで王女様がこんなところに？」

おかしいだらう。王宮とか期待してゐるんだけど。

「…………」

おかしいだらう！なんで急に泣くんだ！？

「お……おい……大丈夫か？」そんなにヤバイ事情があるのか！？

「……すいません。実はエスペリアはもう滅亡寸前なのです。力を付けたマドラの侵攻が始まつてもう3か月です。エスペリアはあと1年も持たずにマドラに敗れるだらう。そう父上はおっしゃり第一王子であるカーライル・フォン・エスペリアを始め4人の息子娘達を逃がしたのです。その内の一人が私、メイメールなのです」

そう言つたつくり彼女は顔に手をあて泣き続けた。
彼女はしばらく泣き続けた後俺に話しかけてきた。

「ところでカイル様、さつきのスキルを見る限りかなりのレベルとお見受けします。よろしければいかほどか教えてもらえませんか？」

別に居合切りはレベル60を超えたあたりで使えるようになる平凡なスキルだからそこまで高レベルでもないだらう。

そう思い俺は素直に答えることにした。

「俺はレベル73の剣聖です」

そう聞いた途端王女様、いやメイメールは驚愕の顔を浮かべた。

「な・・・フミですか？そんな高レベル聞いたことないですよーー？」

え？ どゆことなの？

メイメールからこの世界の現状を教えてもらつた。まとめるところな感じだらうか。

まず現在戦乱はどうなつていてるか。

俺がプレイしていた時代からはや50年、世界は五大国の戦乱から北にマドリ、南にリージアが位置取りこの二国が勢力争いを繰り広げていて、それに豊富な資源による戦力強化を行い軍事力を高めたシドムが混ざっている。どうやらエスペリアは最初の敗戦国になる寸前の所らしい。

次に俺のレベルについて。

マドリやリージアの一般兵の平均は大体15~20くらいで将軍が30前後らしい。なんでも30年ほど前には俺くらいのレベルの人はたくさん居たそだがあるとき高レベル戦士達が突如姿を消したこと。

俺の予想ではその頃にアザーワールドの配信が終わってしまい、プレイヤーが居なくなつたのではないかと踏んでいる。

最後にメイメールは今後どうするのか？

メイメールはまだエスペリアを諦めておらず、一旦は王宮からの脱出

を余儀なくされたが、つい先日天のお告げっぽい『すぐ強い剣士が森に現れる』という夢を見てこの森の中を探し回り、そのお方に国の存亡をかけて戦つてもらうつもりだつたらしい。

これも俺の予想だがきっと俺がここに飛ばされたのは神様のミスでもなんでもなくメイメールに俺がこの付近に出ると夢で教え俺とメイメールが出会いうように俺をここに飛ばしたんだろう。もちろん俺のレベルがこの世界で化け物クラスという事を知った上でだ。

・・・ふむ。俺は最強の剣士、そして滅亡寸前の国に絶世の美女である王女様か。

すっげーテンションあがつてきた!!

俺がこんなにいいポジションやつていーんですか神様!?普通に元の世界で過ごすより面白いじゃん!

丁度頭の中の整理が終わつた頃にメイメールは俺の手を両手で握り、上田使いで

「カイル様・・・もしよろしければエスペリアにお力を貸しいただけませんか・・・?」

と頼んできた。正直かわい過ぎて思わず口が動いてしまった。

「かわいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!...」

びくっと震えるメイメールを気にせず俺は暴走。

「メイメールなんでそんな可愛いんだよ俺もう我慢できないわ!メイ

「メル！」

「は・・・はい？」

「俺に任せろ！俺がこの国をすべてつかせる！」

「えーーほんとですかーー？」

「その代わりーー回でここからまっぴらごけをーーお願いしますーー。」

そういうや言い忘れたが俺の今の容姿はゲーム時代のままなのでかなりイケメンになっている。

そんなイケメンで命の恩人な俺にメイメールは恥ずかしがりながらも

「や・・・それじゃあ・・・」とつまづけたに柔らかい感触が伝わる。

「アーリー？ リージア？ シドム？ はっ！」

メイメールを悲しませる國なんて俺が倒してやんよー！

第一話 作戦会議

メイメールに恥ずかしい事をさせテンションが上がった俺はメイメールが3日間滞在していると言つて案内された。

ロンバルドと/orその町は、中々の大きさで人がたくさん行き来しているので俺はメイメールを見失わないように気を付けながら彼女の宿へ移動した。

今は宿の酒場で作戦会議をしながら毎飯を食べている。

「今の所マドラはエスペリアの南部4分の1程度の所まで侵攻しているのか」

「ええ、まだ北だから南側に位置するこの街はまだできわっているの」

「マドラの戦力はどれくらいなんだ?」

「マドラは大体1万、エスペリアは40000くらいです。それからダイタリアン階こそしかかると聞いています」

そういうや説明不足だったがエスペリアは大陸左側に位置する国でざつくり書くとこんな感じ

マドラ

敵軍

北

谷谷谷橋谷谷

皆 西 谷 西

シドム

谷谷谷

谷

西

現在地 森森

森森森

森

現在地 森森

森森森

森

は1文字分)で1日

王都 森森森

てる橋は大体横10メートル、

森森

森

メートルくらい

森森森

エスペリア

森森

リージア

森森

ほんとざつくりですまんな。(エスペリア付近だけ地形も付けたから許してほしい)

ケータイ用に文字での説明も入れておく。

北にマドラ、西にエスペリア、東にシドム、南にリージアが位置取りエスペリアは北に大きな谷(橋は一つ)、東側一帯は森で囲まれている。

現在谷側からマドラ軍が侵攻中といった状況だ。

1行分(横

谷に架かつ

長さ100

「「」のままだとコーリーに挟み撃ちされるんじゃないか？」

「それはありません。今リーリーとマドラは小競り合いをしていてマドラも最少戦力で今回の侵攻を行っていますから」

「なるほど、じゃあダイタリアン隊の近くにある谷ってどうなの？」

「「」の谷は深さ「」そこそこありますが大きな木の橋が架かっていて簡単に渡れます。橋は魔法がかけられていて普通の冒険者ではびくともしない強度らしいです」

「ふーん・・・・・・。まあなんにせよまずは隊まで移動してみたいと分からぬいわな」

「ええっ！？ わざわざ敵の居るところまで出向くんですか？」

「ああ、さつちにしゅういちにも来るなら早めに戦った方がいいでしょ」

「でも私の護衛は100人ほどでとてもじゃないけど相手の戦力に適わないんですよ？」

「なんとかなるだろ。相手の将軍様はレベル35くらいなんだし」

「そ・・・そりでしようか？」

「やつだつて。とつあえず装備整えて一日休んだら出発しよう」

メイメリは不安な顔をしているが、いつこいつとは深く考えても無駄だと思つ。

俺はメイメリと護衛を3人連れて街の中を歩き武器屋を訪れた。

「とつあえず剣だな。おつちやん悪いけど一番大きい剣を見せてくれないかな？」

そんな俺の言葉に武器屋のおつちやんはとても驚いていた。そりや大剣振り回せるようには見えないよな。

おつちやんが持ってきた剣はゲーム時代使つてた大剣より少し小さい（といつても1メートル位はあると思うが）

俺はその大剣と動きを阻害しない最低限の防具を買い揃えた。お金はメイメリが王宮を出るときに持つていたお金を使わせてもらつた。

その後俺達は保存のきく食材や水を買い込んで宿に戻つた。

「ところで俺の部屋つてどうなるんだ？もしかしてメイメリと相部屋とか？」

俺のセクハラ発言にメイメリが硬直した。顔もほのかに赤く染まつているようだ。

「あれえ？何想像してるのカナ～？メイメリちゃん」

すかさず追い打ち。「ううのは一気に畳み掛けるのが大事だ。

「べ、ベベ別の部屋を取りましたから、安心を！」

メイメールは真っ赤になりながら自分の部屋に閉じこもってしまった。

俺は仕方なく自分の部屋に移動して剣を手入れすることにした。

宿で一睡した俺とメイメールは街中にちらばつていた護衛を10人ずつ集め、時間をずらして俺達について来るよう頼んだ。（護衛100人もつけて歩いてたら王女が居るってモロばれだしな）

昨日必要な物は買い揃えていたので俺達はすぐに街を出ることになった。

護衛の内特にレベルの高い兵士10人と共に用意してあつた馬車に乗り込み、俺達は街を後にした。

砦へと向かう馬車の中に居る護衛達は皆緊張していて張りつめた空気が流れていった。

砦へと向かう道はきれいに整備されていて馬車があまり揺れず騒音が小さかったのも原因だろう。

気まずかったので何気なく誰かと話すことにした俺はメイメールに近づき話かけた。

「え～っと、確か地図を見る限りここからだと2～3日でダイタリアン砦に着くよな？」

「ええ、私達が砦に着いた頃にはマドリード軍は谷の橋から半日くらいの所でしょうね」

メイメールの顔は緊張で強張っていて手の色も少し悪い感じがしたの

で俺はまたからかってみることにした。

「2、3日か。それだけあればメイメールを襲えるな」

「おい、お前」

突然剣を突きつけられたので少しひっくりしたが、流石に言ひ過ぎたかもしないな。

剣を突きつけてきたヤツは護衛にしては少し小柄な印象だが剣は微動だにしていないところを見ると力はあるのだろう。

とりあえず謝るに限る。

「ああすまんすまん。メイメールの緊張を少しでも解いてやろうとしたんだよ。少し下品だったのは謝るから剣をしまってくれないか？」

内心ヒヤヒヤしながら謝る俺に冷たい視線を浴びせる護衛は全く許してくれなかつた。それどころか逆に火に油を注いだようだ。

「大体あなたいら王女様を助けた高レベル剣士だつて言つても王女様に対する態度が失礼すぎるんじゃないの？王女様は気が弱いから何も言わないけど少しは反省しなさい！」

「あ・・・ああ、すまん。これからは気を付ける。といひでお前つて女なのか？」

声高いし口調も体つきも女っぽいから多分そうだと思つんだけど。女が護衛つて珍しいよな。

「女が護衛していたらおかしいか？」

「いや、めずらじこからつこ」

心を読まれたか。

どんどんヒートアップしていく彼女に困惑しているとそれまで黙つてみていたメイメールが助け舟を出してくれた。

「メイル、確かにあなたの言つ通り彼は言動に少し問題があります。でも彼は私の為を思つて言つてくれたのですから許してやってください。カイル様もメイルは私が最も信頼している護衛の一人ですので安心してください」

メイメールの言葉で毒氣を抜かれたのかメイルは剣を収めそれつきりしゃべらなくなつた。

馬車の中にいる護衛の顔からも緊張の色が少し落ちてゐる。雰囲気も少しばくなつたので良しとしよう。

その後何事もなく夜を迎えた俺達は野営の準備をしていた。

護衛達が手際よく準備を進めるのを見て俺はせつかくだしクマの一匹や一匹狩つて食べたいなと思ったので近くの森へ行くことにした。メイメールに一言言つべきか、と思つたがまあいいだろ。俺は正規兵じゃないしな。

立ち上がり近くに置いてあつた自分の剣を担いだところでメイメールがいきなり怒鳴つてきた。

「ちょっと一どり行く気ー！」

「ん？ ちよつと狩りにな。晩飯にちよつとビールだろ」

「そんな勝手許しません！あなたはメイメール様を見てください！」

「メイメール、私お肉が食べたいわ。それもとても新鮮な物が。メイメール、悪いけどカイルと一緒に狩りに行つてくれない？」

そこへメイメールがいたずらっぽい顔を浮かべお願いしたものだからメイメールは怒るきっかけを失い。

結局俺はメイメールと一緒に狩りに行くことになった。

俺達が野営している場所は森から歩いて10分ほど目の見晴らしのいい場所だったので森へ歩く間メイメールと俺との間にはとても気まずい空気が流れていた。

思えばメイメールには初めて話した時から怒られっぱなしにな。

この狩りで少しでもいいところを見せて評価を上げておかなければこの先も事あるごとに難癖をつけられるかもしねり。
とりあえず差支えない話でもしてみようと思い俺はメイメールに話かけた。

「メイメールって小柄なのに力あるよな。俺に剣突き立てた時剣が全く動いてなかつたし」

素直にほめられたことが以外だったのか。メイメールは俺の方を向き

「当たり前だ。私は誇り高いクトラ族の剣士なのだから

とそつけない返事を返してきた。

クトラ族つてゲーム内でも聞いたことない部族だな。

「クトラ族つてどんな部族なんだ?」

「・・・クトラ族を知らないとは。いつたいど」じう育つたのか
聞いてみたいな」

「すまんな。俺は山奥の出身でほとんど知識がないんだ。気を悪く
したなら謝る」

「メイメール様からかなりの高レベルと聞いていたがこんな常識知ら
ずだとは思わなかつた。まあいい、クトラ族はリージア領内の草原
に住んでいる部族だ。剣と弓の扱いに長けた者が多く馬の扱いもう
まいのが特徴だな。障害物のない草原では無類の強さを誇る部族で
過去に何度もリージアの兵士と戦つて勝つてきた」

「じゃあメイメールも弓の扱いはうまいのか?見たところ弓は持つてな
いけど」

「私は同世代の子供の中で一番剣の扱いに長けていた分弓の練習は
ほとんどしなかつた」

「へえ、じゃあ今度手合せ願おつかな?」

「・・・勝手にしろ」

そんな会話をしていると森に着いた。俺はすかさず凡庸スキル「夜
目」を使い暗い森の中を見渡してみた。

「[RE]から右に100メートルくらいのところにクリズリーがいる

な

グリズリーはレベル20はないと一人で倒すのは難しいモンスターだ。グリズリーの肉は脂身が多いがおいしいのでは非倒しておきたい。

「なんでそんなとこまで見えるんだ?まあいいじゃあ慎重に近づこう」

俺達はできるだけ音を立てないようにかがみながらグリズリーに近づく。幸いグリズリーは食事中なようで気づいていない。

「じゃあ俺が引き付けるから後ろから攻撃してくれ」

「それは騎士としては恥だな。私が引き付ける役を担おう

「女の子をおとつにするのは男として恥だから却下。じゃあいってくむ」

俺のがレベル高いし。

グリズリーは俺に気づいたのか獲物を食べるのを止め低くうなつている。

一度吠えグリズリーが俺にツメで攻撃してくるのを俺はあっさりかわし時間を稼ぐ。

そして後ろからメイルが剣を振り攻撃。

メイルの存在に気づいていないグリズリーは後ろからの奇襲に驚き後ろを向いた。

俺はその隙を見逃さず自分の大剣でグリズリーの首を一発で切り落とした。

「よしあとはこいつを持っていくだけだな。メイルは何人か護衛を呼んできてくれないか？」

とグリズリーから視線をメイルに向けると

メイルの後ろにもう一匹グリズリーがいてメイルに攻撃しようとしている所だった。

最初の一匹に気を取られていて気付かなかつた俺は無我夢中でメイルを突き飛ばしグリズリーの攻撃を喰らい、後ろへ吹き飛ぶ。

「・・・って、やつてくれるじゃねーかよ！」

すぐに立ち上がり大剣を上から振り下ろす。

グリズリーは簡単にそれを避けたが俺の狙いは剣じゃない。

左手に初級風魔法「ウインドカッター」を用意していた俺はグリズリーに間髪入れず魔法を浴びせる。

剣聖は魔法の攻撃力が低いが流石にレベルがこれだけあれば一撃だつた。

俺はそばで茫然としているメイルの方へ歩いて

「大丈夫だったか？ 急に突き飛ばして悪かつたな」

と声をかけてみた。するとメイルの顔がみるみる赤くなつていき

「う・・・うるさいつ！余計なお世話だ！・・・でも、助けてくれたのは事実だし礼は言つておく。助かった」

と言つたつきり急に走り出して行つてしまつた。きっと護衛を何人か呼んでくるんだろう。

顔が赤くなつてたのはさつき言つてた騎士道精神か何の恥だと感じたに違ひない。

その後30分ほどかけて野営にグリズリーを運んだ俺はなぜかメイルがチラチラこちらを見ているのを不思議に思いながらグリズリーの肉を平らげた。

第一話 作戦会議（後書き）

とつあんずやひくじと地図書いてみました。

修正してなんとか書を上げましたがそれでたらすいません。

次回は8月28日予定です

第一話 確信

その後俺達は何度かモンスターの襲われながらも俺が無双したり、メイルが俺を無視するようになつたりしつつ砦に到着した。

ダイタリアン砦は日本の一軒家5つくらいの大きさで周り堀が掘られ通れなくなっていた。

高さは10メートルくらいだろうか、シューターとおぼしき装置がいくつも設置されている所を見るとかなり重要な砦らしい。

俺達は砦側から橋を落としてもらい砦内に馬車を進めた。

中では沢山の兵士達がどのうで砦の橋の前に壁を作ったり武器を整理したりせわしなく動いていた。

しばらくすると砦の指揮をとっているマーズが一ひげへやつて来てメイメールと何か話していた。

俺達はメイメールが後で説明すると言つて馬車の中待機中だ。

「砦の中を見る限り相手もかなり近いところまで進んでるっぽいな

「ええ、ただでさえ戦力に差があるので少しでも働かないといけないのよ。たとえ負けが決まつてるような戦いでもね」

「やつぱり勝てる見込みはないのか?」

「・・・戦力も装備も志氣も相手の方が圧倒的に上よ。ウチが勝つ

てるのは地の利ぐらご

「・・・やうか」

俺はそれ以上何を言えばいいのか分からず黙つてしまつた。

頭の中で現在の状況が流れていく。

相手の方が圧倒的に強い、けど地形だけはいい。

確か皆のすぐ先には谷、橋は一つ・・・。いや・・・待てよ。

俺はこの世界ではかなりのレベル。ならできるんじやないか？

俺は一つの作戦とも呼べない物を考え付いたので確認をしてみる。

「なあメイル、谷にかかるてる橋はどんな橋なんだ？」

「あの橋は横幅が5メートルくらいあって、防御魔法で守られてるから攻撃してもびくともしないのよ」

「おお、メイルが言つとおりの物ならできるんじやないか？」

俺が考え事をしているとメイルがあきれたような口調で話かけてきた。

「・・・何考てるのか知らないけど直接見てきたら?すぐそこなんだし」

「・・・じゃあメイルが話終わる前に戻つてくる

そつ言つて俺は橋へと向かつた。

俺は兵士達のジャマにならないように橋まで走った俺はその橋を見て確信を持った。

俺の作戦は成功する。絶対。

俺が馬車に戻るとメイメールはすでにマーズとの話を終え戻つてきていた。

「カイル様橋に行って何をしていらしたんですか？」

「ああ俺の作戦が通用するかどうかの確認だよ」

「この状況を引っくり返せるような作戦があるのですか？」

「ああ、俺のレベルだからこゝでできる作戦だ。さつき橋を見てできること確信した」

そして俺はメイメール達に俺が考えた作戦を教えた。

全員半信半疑といった様子だったが。

見てるよ・・・

この勝負・・・

俺達が勝つてやる。

俺の考えた作戦を隊長であるマーズは当初反対したがメイメリをお願いされしぶしぶ納得してくれた。

どちらにしてもこちら側は9割9分負ける戦いだ。俺の作戦に賭けてもいいと彼は言っていた。

その夜、俺は田がたえて眠れなかつた。遠足などイベント前にはいつもこうなる。

せっかくだからと窓の外に出て空を見上げるとずっと都会暮らしだつた俺は初めて本当の星空を知つた。

「…」を見ても星が輝いていた。俺はしばらく空を眺めて呟いた。

「…あれはなんて星なんだ？…。星座はあるのかな…」

「あれは英雄座です」

振り向くとメイメリが立つていた。こきなり話しかけられて俺は一瞬構えたが、メイメリは気にせず俺の隣に座つてきた。

馬車に乗つていた時には意識していなかつた彼女の髪の匂いや寝間着なのだろうか、かなりの薄着で肌がチラチラ見える。

ち、ちけぇよ！ただでさえ女子には慣れてないのにちけぇよ！

俺はまだキドキしつぱなしだつたがメイメリはずつと星を眺めていた。

どれくらいの時間が流れたか。落ち着きを取り戻した俺はメイメリに話しかけた。

「さつき言ってた英雄座ってどれだつたつけ？」

俺が話しかけるとメイメリはこっちを向いて微笑みながら説明を始めた。

またドキッとしてしまったが今回はすぐに落ち着く事ができた。

「あそこには赤い星が3つ並んで二角形になってるでしょう？あれが英雄座です。一番上から順に勇気、武力、知力の象徴とされていて、大一番の前日に英雄座に祈ると星から力をもらえると言われています」

「へへ。じゃあ明日の戦いの為に祈つてみようかな？」

メイメリの星に関する知識に驚きながら俺は本氣で祈り始めた。俺は隣でメイメリがふふつと笑う声がして彼女の方を見た。

「カイル様、あなたがあの星を見つけたのはきっと神様が勝て、と言っているからですよ。そんなに祈らなくてもきっと勝てます」

「そりかな？じゃあそういう事にしつづか。なんか眠くなつてきたし俺は明日に備えてもう寝るよ。メイメリはどうする？」

と俺が聞くとメイメリは少し間を開けて答えた。

「私はもう少し星を見ます。…カイル様、せっかくですから私がおまじないをかけてあげます。

そ、そのまま田を閉じて下れー」

メイメールの言つとおり田を閉じる。

メイメールが俺の前に移動する音がしたと思つたら俺の口に柔らかい感触が伝わつて來た。

目を開くとメイメールの顔がすぐそばにあつて髪からいゝ匂いがして頭が真っ白になる。

メイメールは俺から離れると顔を真っ赤にしてうつむいた。

「や、それじゃあお休みなさいー。わ、私の勇者様…」

最後の方は声が小さくて聞き取れなかつたがメイメールは皆に走つて行つてしまつた。

俺はまた目が冴えてしまつたな、と他人事のように思つしかなかつた。

結局、俺はほとんど眠れなかつたが不思議と体は元気一杯でメイメールのおまじないのおかげかなと思つたびに顔が赤くなるので取り繕つのが一苦労だった。

昼頃になつた頃、マドラ軍が橋の向こう側に到着。

俺は橋の前に立ち皆の兵士達はアーチを構える（アーチは射程が長

いので橋の向こうまで届く

向こうに向かつて俺は大声を出す。

「この先には行かせねえぞ！かかるといい！俺は73レベルの最強剣士だ！」

すると相手側の将軍さんが返事を返してきた。

「73レベルであったとしてもたつた一人で何とかなると思ったか！その考え、根元からへし折ってくれる！全員、ワシに続け！」

俺の言葉を虚言と取つたらしい相手側が橋を一気に渡つてきた。

俺は大剣を構え剣に炎をまとわせる。

フレイムソードはMPを消費して溜めれば溜めるほど威力が上がる。橋は長さ100メートルほどだが馬に乗つているのであつてないような距離だ。

敵が残り50メートルに差し掛かった所で俺は大剣を振るう。

地面に

土の地面は簡単に崩れ橋は土台から崩れる。

「な、なんだよおおおおおおー！？」

いくら頑丈な橋でも支えがなくなりやただ落ちるのみ！

さうば、名前も知らぬ将軍さん。
少しは疑おうね！

橋が崩れ相手側は100人ほど谷に落ちたかな？

このままだと逃げられて体勢を整えられて終わりなんだけど、まだ攻撃は続く。

「アーチ、撃て！」

マーズの合図で一斉にアーチの矢が相手を襲う。

アーチもあれだけ遠いと狙いが難しいが相手は1万くらい居るので当たる当たる。

しばらくすると敵兵は將軍さんを失いさらにアーチの攻撃も受けパニックになりながら森の中に消えていった。

1000人位は削れたかな？

ひとまず終わったと思い腰を下ろしありすると背からメイメールとメイルが走ってきた。

「カイル様！やりましたね！」

メイメールが俺に抱きつのを見てメイルが驚きながら俺に話しかけてきた。

「むちやくちやね。こんな簡単に成功するとは思つてなかつたわ。
相手の將軍がバカで助かつたわね！」

と黙つて俺の足を蹴つてきた。
何でだよ……。

ピ
シ
ツ

「ん? 何のお...と

地面にヒビが入っていた。やべえーこのままじや落ちるー。

逃げようとしようにもメイメールが気付かず抱きついたままで動けねえ！

ガラガラガツシャーン

「えつー？ さやああああああああああああああー！」

メイメール気付くの遅すぎだよ！

でなんでもメイルも一緒に落ちてんの！

逃げれただろおまえ！

俺達は3人合わせて谷へ落ちましたとさ…。

第一
章

おしまい

第一話 確信（後書き）

学校が始まるのではこれからは毎週日曜日更新目標で書き上げたいと思います。

次回で第一章が終わると思います。まだ書いてないので終わらないかもしませんが。

週一更新なので一回の量ができるだけ増やしていくたいと思います。

あとお気に入り登録して下さっている方ありがとうございます！

第一話　じじいの命令

落ち始めてはや3秒。

俺達は死を覚悟した。

まさか「こんな死に方するとはなあ……美女に抱きつかれて転落死つて

…。

そんなことを考へてる内に地面が見えてきた。

その時、時間が止まつた。

周りの景色が色あせてメイメールとメイルも宙に浮いたまま硬直して
いる。

なにが起きてるのか全く分からなかつた。

目の前に見覚えのあるじじいが現れるまでは。

「よひ、見事敵を退けたのひ。上からみてたぞい」

「もうすぐ死ぬけどな。こんなに早く二回目の死を味わうとは思わ
なかつたよ。で、あんた死ぬ間際の俺を笑いに来たのか？悪趣味な
じーわんだな」

「いやいや、そんな事でわざわざ降りてきたりはせんよ。お主の意
志確認じや

「意志確認？」

「お主、Hスペリアを救う勇気を持つておるか？」

「…当たり前だろ。メイメールの為でもあるし俺自身この国を救つてやる気満々だぜ」

「聞く必要はなかったか。ならばお主に一つの試練を与えよ。この谷の中に洞窟がある。そこに封印されてるモノを解放するのじゃ。そうすればこの谷から出られるじやろ?」

「じうせならタダで出してくれよ意地悪だな。まあ助かるならその洞窟とやらに何が封印されてるかは知らないがやつてやるよ」

「意地悪とは何じや。神は無償で人を助けてはいかんのじや。それに封印されてるモノはお前にとってもプラスになるじやろ? 頑張つて封印を解いて見せるんじやな。ではさあばじや」

じじいが消えた途端俺達は再び落下を始めた。

地面にぶつかる直前、俺達は体から重量がなくなつたかのような錯覚に襲われ、地面上に無傷で降り立つた。

何が起きたのか分からぬ様子のメイメールとメイルが辺りをキョロしている。

「…カイル様、いったいなにが?」

「悪趣味な神様がこの谷にある洞窟の封印を解けるならつて助けてくれたんだよ」

メイメールは一度夢の中でじじいと会つてゐからすんなり信じてくれたが

「そんな嘘誰が信じるのよ。あんたが何かしたんでしょ?」
メイルは田を細くして俺を見た。

信じてくれなきゃうるので説得は諦める事にした俺はメールに

「じゃあ洞窟を探そう。洞窟があつたら俺の言つてゐる事も信じるだ
ろ」

と言いメイルも本当に洞窟があるなら信じると言つてくれた。

早速俺達は辺りを探し始めた。

マドラ軍の兵士達はみんな転落死したらしく死体だけが転がつてい
て動く者は居なかつた。

メイメールには出来るだけ見せないよう歩いていくと体感時間的に
2時間位で洞窟を見つけられた。

洞窟は高さ3メートル、横には5人が並んで立てるくらいの大きさ
で壁には色々な模様が描かれている。

「いかにもつて感じですね。何が封印されてるのですか？」
「それは分からん。じじいは俺達の助けになるとしか言つてなかつ
たからな。

まあ書にはならないってだけでも分かつてりやいいだろ

「で、封印つてどうやって解くのよ？」

「それも分からん。とりあえず洞窟の中を見てみないとな

じじいがなぜあんな事を頼んだのかは分からないが助かるには封印
を解くしかない。

俺達は俺 メイメール メイルの順で洞窟へと入つて行つた。

中はほぼ一本道で何回は敵と出会つたが問題なく倒せた。

しばらく進むと行き止まりで俺は戻ろうとしたがメイルが何かに気づき壁に駆け寄つていつた。

「どうしたんだ？」

「ここに何か書いてあるんだけど汚れてて読めないの

見ると確かに何か文字らしい何かが書いてあるようだ。

俺達は壁が崩れないよう慎重にホコリを払い、何とかそれを読み取つた。

この先に進まんとする者

—昔前の対となり、畠えよ。

といつ文字の下にアルファベットが並んでいた。

「なんだこれ。アルファベットが並んでるけど意味が分からんな」

俺がそう呟くとメイメールとメイルが何故か驚いていた。

「カイル様、古代語が読めるのですか！？」

「古代語？ってことはもう使われてないのか？」

俺がそう聞き返すとメイメールは畳然とした様子で聞き返してきた。

「使われていいいない以前に古代語は遺跡でしか見られませんしま
だ謎が多いんですよ？」

なんでカイル様は古代語が分かるのですか？」

「なんだと言われてもな…うーん…」

「はつきりしなさいよ…なんで古代語が分かるのよ…？」

困った俺がなかなか返事をしないもんだからメイルが憐れを切らしてしまった。
こうなつたら仕方ない。

「まあ人には知られたくない事の一つや二つあるだろ?
どうしてもってんならそれなりの見返りがほしいな」

「見返りって何よ？」

「キスか胸触らじてくれ」

平然ととんでもない事を言う俺にメイルとメイメールがドン引きして

いた。

その後古代語の事については何も追求されなかつたが、二人はしばらく口を聞いてくれなかつた。

第一話 じじこの命令（後書き）

なぞなぞ問題です。ヒントはアルファベット。一応下に書いておきます。

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

暗号の内容間違ついたらあひやー ですけどねw

多分あつてる・・・はず（確認したし）。

答えが分かった人は感想にでも書いてください。・・・嫌ならしい
ですよ。分かつてます。

神様・・・もといじじいはこれからもうよつかいを出し続けるのか。
・・いるよね。知ってる事わざわざ説明するウザイキャラ（しかも
スキップできない）。

次は11日

第一話 ライカンの王（前書き）

前書きつて何書けばいいか分からぬよ！

第一話 ライカンの王

「 「 「うーん……」 」 」

俺達が扉の前で唸り始めてしばらぐ。
全く分からぬ。

特にメイメールとメイルに英語の知識が無いのが辛い所だ。

しごれを切らしたのかメイルが急に地面に倒れこんだ。

「 も～なんなのよこれ！ 大体考古学者でもない私が分かる訳ないじ
やないのよ～」

「 そう言つなつて。この先に行けないと谷から出られないんだから
頑張れ」

「 ヤダ～も～ヤダなの～」

メイルはそう言つたきり動かなくなつた。

俺は手を合わせて両無 とだけ言つて再び暗号と向き合つ。

この先に進まんとする者

一昔前の対となり、悶えよ。

OSNU EMPV

「 一昔前のこと」とはひとつ前の分かれ道に何かあるのでしょうか…

それまで静かに俺とメールのやり取りを見ていたメイメールが呟く。

「でも何もなかつたし、唱えよつて書いてあるんだから鍵があると思えないぞ」

今から少し前俺達は考える前に行つていない所も探して見たが全部行き止まりだつた。

一つ前の通路に何かある可能性は低いだらう。

「いや……待てよ。もしかして……」

俺はメイメールの言葉で閃き地面に暗号を書いた。

Q S N U E M P V

これを一つ前の文字にすると

P R M T D L O U

「それは何か意味のある言葉なのでですか？」

「いや、まだ対になつてないだろ?」

そつと俺はアルファベット26文字を地面に書いた。

「いいか? Pは左から1-6番田だろ? 対つてJとは右から1-6番田の文字つて事だ」

「右から1-6番田とこうじとはKですか?」

「そり。同じように全ての文字を入れ替えると…

Q S N U E M P V

P R M T D L O U

K I N G W O L F

訛すと狼の王、これが答えた

俺がそう言つと扉がゴゴゴゴといづ音と共に開き、それまでのびてたメイルが何事かと飛び起きた。

その後、俺達が扉の奥に入ると扉がまた閉じた。

「まあ気にせず進もう」

二人が不安げだつたので俺は極力明るい口調でそう言つた。
真つ直ぐ伸びた通路を警戒しながら進んでもメイルが話しかけてきた。

「にしても狼の王って何の事なのかしらね？」

「うーん、多分ここに封印されてるモノが狼の王の魂とかなんだろうな。

俺達で倒せる相手だとは思えないよ。

まあ話の通じる奴だと信じるしかないさ

「そんなものなんで封印したのかしら？

それにこんな所に封印されてたり今更封印を解いて欲しいなんて。

怪しいわね」

「でも神様は私達の助けになるって言つてらしたんでしょう？」

私はきっと仲間になつてくれると思います」

「そうだな。おっと、そんな事言つてゐ間に何か大きな部屋が見えてきたぞ」

扉の先の真つ直ぐに伸びた通路にはさつきのような分かれ道は無かつた。

その部屋はかなり広く、

中心に宝玉がはめ込まれた台座があり、

宝玉の中は目まぐるしく色が移り変わり時々光を放つてゐる。

その台座のまわりには巨大な魔法陣が描かれ、空気が重い。息をするのも忘れそうだ。

俺達が入り口で立ち尽くしていると宝玉がいきなり光を放ち、目の前に一匹の光の狼が現れた。

体長3メートルはあるだろう。体は綺麗な空のような水色の毛に覆われ、狼の王にふさわしい雰囲気をまとっている。

「…誰じゃ？ワシをライカンの王、スイと知つてこに来た愚か者か？」

直接頭に響くような声に萎縮しながらも、女性一人に任せられた訳にはいけないと想い俺は口を開いた。

「お、俺達は神様に封印を解けと言われここに来た。お前…いや、スイに危害を加える気はない」

俺はそう言つて背中の大剣を前に投げた。

「どうしてじる戦いになれば一瞬で負けるだろ？
ならせめて相手に信用してもらえる行動をすべきだ。

スイは俺の行動を見てくつくつと笑つた。

「ワシに勝てぬと断じたか。なかなかいさぎよいではないか。
おぬしは神の使いと言つたな。何故ワシの封印を解こうとする？」

その声から警戒の色が消え、スイは興味深いといった様子で俺の返事を待つている。

俺は頭の中で言葉を整えスイの質問に答えた。

「一つはこの谷から脱出出来ると神様が言つたから。
もう一つはお前に俺達の國の力になつて欲しいからだ。
もちろん嫌ならこの谷から出してもらうだけでいい。
封印を解くのと引き換えにな」

俺の答えに満足したのか、スイはなる程のうと嬉しそうにうんうん言い、メイメールとメールに近づいていく。

スイはメイメールの前まで歩くとメイメールに語りかけた。

「おぬし、王家の者か？」

「え？ あ、その…」

「やうがえるでない。素直に答えるのじや」

「は、はい…。私はエスペリア第一王女メイメール・フォン・エスペリアですか…」

「ふむ。なる程、体から溢れる魔力は王家の血を色濃く受け継ぐ証と云うわけじゃな。

ワシの主になるにふさわしい魔力じや。おぬし、ワシの封印を解いてみせよ。つこしてくるのじや」

再び宝玉に向かうスイにビクビクしながらメイメールはついていった。

宝玉は先と変わらぬ光を放つてゐる。

「ああ、宝玉に手を当て魔力を注ぐのじや」

スイに促され宝玉に手を当てたメイメールは困惑した様子でスイに恐る恐る聞いた。

「あの…魔力つてどうやって流し込むのですか?」

その質問を聞いた途端スイは再びくつくつと笑みを浮かべ、メイメールに歩み寄つた。

「そりが、おぬし魔力を扱う練習をしておらぬのか。勿体無いのう。いいか、手に集中して水を注ぐイメージを頭に浮かべるのじや。魔力はしつかりとしたイメージを持てば応えてくれよ!」

「水を注ぐイメージ…」ひづですか?」

すると宝玉の中の色が段々白に染まつていいく。

しばりくすると宝玉は大きな音をたて割れてしまった。

「宝玉が割れると共にそれまで光でできていたスイの体が実体化した。どうやら肉体自体が封印されていたらしい。」

「感謝するわ。おぬしのおかげでワシは自由になった。これからはおぬしの国になる約束しよう」

「あ…はい…」

メイメールが疲れた様子で急に倒れかけたので急いで体を支える。

「魔力を使い過ぎただけじゃな。しばりくすれば元気になるであろう」

メイメールを見ると静かな寝息をたて眠っている。

その様子を見ていたスイがニヤニヤしながらこちらを見ていた。

「なんだよ?」

「おぬし、魔力が一番大きくなるのはどんな時かしつてあるか?」

「いや、知らないな」

「知らぬならよい。しばりくそのままにしておくんだじゃな。」

なんでそんなに嬉しそうなんだよ…。

俺の腕の中で眠るメイメールは規則的な寝息を立てていた。

第一話 ライカンの王（後書き）

軽いなぞなぞ問題でしたが解答にたどり着けた人は居たでしょうか？

こういう問題は今後もちょくちょく出す予定なので頑張って解いてみてくださいw

簡単すぎでつまんね と思つた人は俺になぞなぞのアドバイスぶりーす。

書き溜めが増えてきたら週3～4回更新になるかもしません。

次は1-4日

第三話 脱出（前書き）

友人に特定されました。恥ずかしかったです。学校で小説のネタ言
うのやめてほしい。

第三話 脱出

メイメールが回復するまでの間俺とメイルはスイと話をしていた。

「カイルと言つたかの？」

おぬしなかなかの力を持つておるよひじやが、レベルはどれ位なのじや？」

「ん？ 73だよ。スイはどれ位なんだ？」

スイは話してみればかなり気さくな性格だったのので普通に会話が出来る程度には仲良くなれた。

「73？ 100レベルはあると思つておったのじやが… ワシの目も衰えたかのう…」

ワシは120レベルじゃが種族的な補正も入れると人の150レベル位の力かの。まあすっかり年を取つて今は90レベル位の力しかないがの」

「カイルもスイも化け物みたいな能力ね。私みたいな一般人なんて役立たずじゃないの」

話を聞いてメイルがすねていた。

確かにメイルは俺とスイと比べたら弱いかもしけないがこの世界では十分強いと思う。

ここはフォローを入れておくか。

「そう氣にするなよ。

胸の薄さよりは自信持つていいぞ！」

「黙れっ！」

メイルの蹴りが俺の顔を直撃した。

ただの冗談だったのに…

「…メイメールもとんでもないヤツを好きになつたもんじゃな…」

「いてて…何か言つたか？」

「いや、おぬしはもつと紳士らしい振る舞いを学ぶべきじやうと言つただけじや」

スイが残念なものを見るような目で俺を見ていた。

「まあこれが俺だからな。今更紳士らしく振る舞えつてのは無理だな。

話戻るけど俺は73レベルだけど剣聖だしパラメーターもいくつかは90レベル台の能力位はあるだ」

せつかくだしここでパラメーターについて軽く説明をしよう。

パラメーターはHP MP アタック インテリジェンス テクニック スピード 物理防御 魔法防御 ラックで構成されていて俺が使つた居合い切りやフレイムソードはスキルに分類される。スキルには種族固有の物もあり、鳥翼族の飛行なんかがそれに当たる。

そのほかにも職業スキルもあり、剣聖には剣技スキルの消費MPを抑え、発動までの時間短縮、命中や威力の上昇ボーナスが付く「達

人剣」がある。

ただ達人剣は剣技スキル以外のスキルダメージの30%減少というデメリットがあるので俺の魔法は相手が強いとひるませる位にしか使えない。

大体200レベルになると各パラメーター平均が600~700で職業毎に特化したパラメーターは900位になる。

100レベルだと平均300~400になり、特化したパラメーターは600位だ。

ちなみに俺のパラメーターはこんな感じ

HP	247
MP	121
アタック	217
インテリジェンス	130
テクニック	382
スピード	420
物理防御	186
魔法防御	103
ラック	62

スイが100位だと思ったのはテクニックやスピードが100レベル並の数字だからだろう。

スイとメイル、メイメールの能力も後で機会があれば聞いておこうと思う。

「なる程のう。ワシの皿もあながち間違つといふか」

満足気に入イが笑う。感情の分かりやすいヤツだな。

「ん」

「おっ、起きたか。体調はどうだ?」

「……カイル様、私は？」

「魔力の使い過ぎだつてさ。辛いならもう少し寝てもいいぞ」

俺がそう言つとメイメールは自分がどこで寝ていたのか気づいて飛び起きた。

俺はスイの言う通りにメイメールを膝の上で寝かしていたからだ。

「あああのカイル様私っ！」

顔を真っ赤にしてパニックになつてているメイメールにスイガイタズラめいた口調で追い討ちをかける。

「じゅうじゅう、なんじゅうせいかくんなのじゅうじゅうせいかくんなやつ

「ス、スイさん！何言つてるんですか！」

「我が主の幸せを願うのは当然じゃ。時間も時間じゃ、そろそろ洞窟の外へ行こうぞ」

スイはメイメールの反応を見て十分回復したと判断したようだ。

メイメールを上に乗せ洞窟の外へ向かう。
俺達もそれに続いて外へ向かった。

外に出るとすっかり日が沈みきついていた。

「うむ？ なんじやこの死体の山は？ おぬしらがやつたのか？」

「ああ・・・まあな」

「氣まずい。一緒に落ちたとかマジ氣まズい。」

スイは俺の顔みてなんで自分のところに来たのか察したらしい。特に何も言わなかつた。

「ん？ なんかあそこ光つてないか？」

「ああ、ここは昔石の原石の採掘場だつたらしこの。おぬしらが岩盤を壊したおかげで石が表にでてきたのじやろ？」

「へえ、じゃあ取れるだけとつておいつか」

俺達はいそいと口の採掘を始めた。結構な金になりそうだ。

「で、どうせひとつかり忘れていたがここは谷の底。どうやって出るのか聞いてない。」

そうこねばすつかり忘れていたが、「メイメールがあきれたよつて尋ねる。どうやって出るのか聞いてない。」

スイに訪ねてみると自信満々な様子で背中に乗れと言つて乗せて貰つた。

「で、どうするんだ?」

「見ておれ。」の程度の崖など軽く登つてみせよ。」

スイは体制を低くして徐々にスピードをあげてこき崖を登つていつた。

ジェットコースターの安全バーのありがたみがよく分かつたよ。

谷に居たのは半日位だったが感覚的にはもつと長く居たように思える。

辺りは真っ暗で森の中からコオロギのよつよ鳴き声だけがかすかに伝わってくる。

「久々の外は気持ちがよいのう。してカイルよ。今日はどこで休みのじゃ?こここの辺りは森だけじゃったんじゃが近くに町か何かできたのかのう?」

「ああ、それなら心配ない。近くに仲間の階があるからそこで休もう。メイメール、メイル立てる?」

二人に確認すると先程の崖登りで腰が抜けて動けないらしい。

じゃあ俺とスイで分担して担ごうと提案したのだが「一人がスイの背中に軽いトラウマを覚えているらしく、俺が往復して運ぶ事になった。

スイがニヤニヤしてたのが気がかりだったが気にしなくてもいいだろ。」

俺は先にメールを運ぶ事になった。

スイがメイメールと話したいことがあると言つたためだ。

暗い森の中、俺の足音だけが鳴り響く。

「ねえ、カイル」

「ん? 何だ?」

「あんた何でそんなに強いの? まだ20歳にもなっていないんでしょ」

そう聞いてきたメイメールはとてもいい笑顔をしていた。

皆はまだ遠い。

「…俺には師匠が居てな。」

そりやバカみたいに強い人だった。」

俺はまだゲームとしてこの世界を生きていた頃の事を思い出しながら

ら話を続ける。

「師匠は厳しい人でな。

よくライオンは息子に試練を『えると』言つがあれば完全に殺す氣満々だつたな。

何回死にかけたか数え切れないと

「ふふつ。その人は今どうしてるの?」

「…死んだよ。若くして病気でな。

死ぬ間際まで病氣を隠していくなりもうダメって言つ辺りが師匠らしかつたよ」

俺の師匠はリアルではガンを患つて寝たきりだった。

余命一ヶ月になつた所で俺に全てを打ち明けこの世界から消えた。

後ろを向くとメイイルが気まずそうにしているのが見えた。

前方に皆の明かりが見える。

俺達は無言のまま皆に着き、皆の兵士に何があつたのか説明した。

同時刻、森の中

「ふむ。ようやく一人になれたの。

おぬしと話したい事とは契約についてじや」

空色のライカンにもたれながらメイイルは耳を傾ける。

「おぬじがあの谷に落ちたのは実は偶然では無い。ワシが神に頼んだ事なのじや」

「じゃあ神様にどんなお願ひをしたんですか?」

「ワシはライカンの王になつた後ワシの主にならにふさわしい者を探しておったんじやがな、こつまでたつても見つからんからその者が現れるのを待つことにしたんじや」

「それでは何故あんな所に封印されたのですか?」

「ワシがそう決めた時、神と名乗る者が上から降りてきてな。肉体を維持するためにも封印すべきと言われ、なら主になる者が現れたらワシの所に導いてくれと頼んだのじや」

「それじゃあ私たちが谷に落ちたのは神様のお導きなんですね」

「話が早くて助かるの。

おぬしはワシの主に相応しい魔力を秘めておる。

ワシの封印を解いた事で契約はすでに結ばれたのじや」

「契約つてなんなんですか?」

「簡単な事じや。

ワシに魔力を分けてもらつ代わりにおぬしを守るとこつものじや。

魔力はおぬしから自然に放たれるものを貰うから心配はせんぞ

「はー。よろしくお願いします。スイさん」

「うむ。ワシの力、おぬしの思うよつて使うがよい。あとワシの事はスイでよいぞ。

これで話したい事は終わりじゃが、ワシがこの姿で人の前に出る訳にはいかんな。

良ければそなたの服を貸してくれぬか？」

「え？ でも私は女ですよ？」

「ふつふつふ。ワシもれっきとしたメスなのじゃ。人の姿になるのはいつぶりかのう

メイメールが一番驚いた瞬間であった。

第三話 脱出（後書き）

次は1・8日

第四話 王都ルイン

皆の中では兵士達が勝利の宴を開いていた。

俺達が谷にいた間も飲んでいたらしく何人か地面に倒れ寝ている人がいる。

こんな酒どこから持つてきたのか と聞くと近くの町の酒を買い占めたらしい。

それでも人数が多いので一人酒一ビンほどの料金で済むそうだ。

「それじゃ・・・乾杯！」

俺達もすぐ宴会に参加して一時間がたった。

そして問題発生。

俺とスイはあまり酔つてないんだが

「まさかこんなに酒癖が悪いとはのう...」

そう呟いたスイは人の姿になりメイメールの隣に座っている。

本人はもう年と言つていたがどう見ても20台前半の美人さんだ。

だがスイはぐつたりした様子でこちらを見ている。

俺にはどうしようもない。

なぜなら

「すへへいへへ。あんたももつと飲みなきこみへー」

「いや、「ワシはまじやな…」

「何よー。」#人をまに刃向かうつもりー?良い度胸ねーあんたなんかひつよー」

そう言つてスイの空色ロングヘアを楽しそうに引つ張つてるのが何を隠そう、メイメールだ。

「メイールは一瞬で氣を失つたからまだ良かつたんだが…」

「せう言つながら助けてくれい…」

「ムリつす

「何樂しそう話してんの~?

カイルも飲みなはい飲みなはいー」

「あれつが回つてないぞ。そろそろ止めとけ」

「やだー!まだ飲めるもん!」

顔真っ赤でベロンベロンなメイメールの暴走がさりげなくなつて来て
いる。

「ところでカイル?」

「な、何でしょ、…？」

やな予感。

「あんたさー、好きな人は、居ないの？」

は、はあ？

急に何なんだ。

確かにメイメールとキスした時はドキッとしたがあれはただのおまじないのはず。

といふことはメイメールは俺を異性としては見ていない…はず。

」は無難に行くべきだらう。

「居ないよ。モテないし」

「なあんですってえ！」

正直に答えたのにメイメールの逆鱗に触れてしまつた。解せぬ。

「あんた私のファーストキス貰つといて随分な言い草ねえー！」

「でもあれはおまじないじゃあ……」

「…………」

その後の事は思い出したくない。

悪夢の一夜が明け、俺達は王都へ戻るため馬車に揺られていた。

メイメールは寝たきりでメイルも辺りを警戒するのに忙しく、スイと俺は密かにメイメールに一度と飲ませない同盟を結んだりしていた。

馬車の移動の間特にこれといった出来事はなかつた。

王都ルインは人口100万程の大都市だつた。（ちなみに世界人口は5憶人居ないらしい）

商業が盛んで ルインに居れば手に入らない物は無い なんて言葉もあつたらしい。

何で全部過去形？と思つた人も居ると思うが、今のルインはマドリード攻めてきて商人がほとんど居ない。

それでも根性の入つた商人さんがちらほら見える。ぶつちやけ俺達がマドラを撃退したので彼らは勝ち組だらう。

近くに装飾品を売つてる商人を見かけたので先に行つてと伝え覗いてみた。

「売りますか？」

「ああ装飾品はあんまりだな。その代わり持つてきた食料類は完売しちゃつたよ」

そういう商人さんは儲けが多くてうれしそうだ。

ふーむ、ネックレスに、指輪に、お、これは魔力石かな？

魔力石は近くにMPを多く持つ人が近づくと淡く光るのが特徴で、長い間持ち歩くとMPを溜め込んでくれる。戦闘中MPが切れかけた時石を割れば溜め込んだ分を回復できる。

ポーションと違い回復量が段違いのがいい点、一回しか使えないのがダメな点だ。

一通りみたが中々いいものもいくつかあるな。こんど何か買っておこう。

商人に集めた宝石類を鑑定してもらひると結構な額になつた。（詳細な値段は今度通貨の説明のときに）

俺は商人にまた来ますと言つて王宮に行くことにした。

走つて馬車を追いかけると王宮の門まであと少しこうじて追いついた。

王宮に着くと門番達が姫のお帰りだ！
とやたら騒がしい。

普段タメで話してるけど聞かれたらどうなるやん。

しばらくすると近衛の人気が3人ほど出てきた。

ヒゲ面の男がリーダーらしい。体つきとか雰囲気が他のヤツと違うし。

「メイメール様よくお戻りになられました！」

王と妃がお待ちかねですの」「ひひへ。

隣の方々は?「

「俺はカイルです」

「ワシはスイじや」

名前だけ簡潔に言ったのだがヒグリーダーが驚きの表情を浮かべた。

「カイルと聞こますともしかしてマドラ軍を退けたのはあなたですか?」「

「ええ。 そうです」

「話は皆の兵士から聞いてますよ。」

ゼひ王に謁見願こめく

「なあ、ワシはどうなるんじや?」

「スイ殿は別室待機になるかと」

「ロイド。彼女は私の専属護衛よ。

お父様とお母様にも顔を覚えてもらいつわ

「専属護衛ですか。それは失礼しました。では私について来て下さい」

そこの狼、どう顔止めろ。

第四話 王都ルイン（後書き）

次は21日です

何気に文字数
1818

第五話 一休み（前書き）

ケータイの右上に表示される文字数よく見たら1文字で2減つてることになりました。OTN

あとハーレムタグ消去、俺には無理でした

第五話 一休み

俺達はヒゲリーダーに案内され王の間に案内された。

エスペリアは滅びかけの国といえどもやはり王宮は豪華だ。兵士も沢山いるし廊下には色んな絵や銅像がある。

ルインの内10%はこの王宮で埋まってるんじゃないかと思つ。メイメリの話によると王様と王妃様は中々クセのある人らしい。悪い印象をもたれないよう気をつけねば。
ヒゲリーダーが扉を開け、メイメリが王の間にに入る。俺達もそれに続く。

王の間には護衛が両脇にズラリと並んでいる。どいつも屈強そうな体つきをしていて武器を取られなかつたのもつなづける。

立派なヒゲをはやした人が玉座に座つてゐる。あれが王様なんだろう。

「おお！メイメリよくぞ無事で一
心配しどつたぞ！」

王様がメイメリの帰還を喜んだ。

メイメリも一ココと笑つておじぎをした。

「お父様とお母様も」無事で何よりです。
こちちは私を助けて下さつたカイルと専属護衛のスイです」

次いでメイメールが俺達を紹介する。王様は俺の名前を聞いて少し驚いているようだ。

興奮気味に王様が俺の方を向いた。

「おお！そなたがわが国を救つた英雄か！
よくぞ参つたな」

テンション上がりすぎて睡飛んどるがな。

てかなんで俺達より早く情報が飛んでるのか気になるところだ。

「じヒカイルとスイと言つたな。レベルはいかほどのだ？」

「73です」

「90じゃ」

スイは年齢補正入れたレベルを言つた。

王の間にいた近衛達からどよめきが起ころ。

まあ成人すらしてないヤツと見た目二十歳くらいの女性がこんなレベルって普通ありえねえしな。

案の定王様はさうに興奮した様子だ。

「若くしてそれ程の高レベルとは…ぜひ我が軍にほしことこうだな！」

「怒らせたら私達ひとたまりもありませんね、あなた！」

いや王妃様着眼点おかしいだろ。

クセの強い人つていうのもなんとなく分かる気がしてきた。

「ええ。私の自慢の護衛です。お父様」

メイメールもスルーッてことはいつもこんな感じなんだらうか。

でも仲よさそうな家族だな。

もう俺は家族に会えないから少ししつらやましい。

そんな感じで謁見は終了。

王様は気さくな人で知られていてお祭りとか色々な催しをするので人望があるのだとか。

王妃様は一度お城を抜け出したことがあるらしい。天然っぽかつたけどおてんばなのかな？

なんでも依然エスペリアは侵略の危機にあり、義勇兵を募り、体制

を立て直すとかで人手が足りず、後日任務を頼みたいそーな。

やな予感しかしないけど断る訳にはいかないのが辛い。

まあよくゲームとかで見るふんぞり返った王様だつたら逃げてるけどな。

「にしても広い部屋だな。落ち着かねえ」

「ワシもじゃ」

スイもそれに同意する。

俺達が案内された部屋は普通の家くらいはあるかという大きさで高

そうなベットが2つおいてある。

おそらくメイメールは自分の部屋があるんだろう。

銭湯位の広さに高そうな絨毯や枕が気になつて仕方がない。

少し狭い方が落ち着くタイプなんだけだ。

この王宮に狭い部屋なんてなさそうだから諦めてるけど。

「やういやメイメールは？護衛しなくていいのか？」

メイメールの専属護衛がこうやつてくつろいでるし大丈夫だとは思うが、気になつたので聞いてみた。

「メイメールなら用事があると言つておつたぞ。

まあワシは契約を結んであるからメイメールに何かあつたらすぐ分かるし大丈夫じやろ」

スイはシッポをパタパタ振りながら返事を返した。

スイはメイメールが何をしているのか知ってるみたいだ。

王宮内だつたら危険もないだろ? しスイも安心しているのだらつ。

「ふうん。じゃあ暇だし探検してくるか」

広い部屋で落ち着かないし、今日はもう予定が無い。

王宮の探検も面白ねうだが町探検もしてみたいし今日を逃すとしばらく機会がなさそうだ。

「氣をつけてな。ワシは寝るとしよつ。年を取るとつらいのつ

さして興味が無いのか、あぐびをするスイに手を振り俺は部屋を出た。

城下町は中央通り、東通り、西通りがあつて俺達が通つたのは中央通りだ。

東通りは日本で言つ商店街、西通りは住宅街となつてゐる。王宮の裏側には森が広がつていて山菜をとりにいったり狩りに行く人も多いらしい。

まずは日の商人のところに行ひつと。

昨日確認した値段分のお金を持つて俺は城下町に出た。

町は次第に活氣を取り戻しつつあるのか、それとも情報が伝達されたのか、昨日いなかつた商人や町に住む人達が結構往来している。

俺はまず昨日の商人の所へ向かつた。

「おっす！もうかつてますか～？」

「まちぼちだね。何か買いにきたのかい？少しならおまけするよ

「お。おっちゃん話わかるね～。これほしいんだけビレベリーナ
らまけてくれる？」

「そうだね～、これは銀貨20枚だから銀貨3枚まけるよ

「もう一聲ー」

「むう～……、しょうがないなー銀貨5枚まけりやうー」

売り上げ好調なおっちゃんはかなり乗せやすいな。

これからもかまへぬけでほりつか。

～～～～～～～～ちなみに簡単な通貨説明～～～～～

小銅貨・・・日本円で10円くらい

銅貨・・・日本円で100円くらい

小銀貨・・・日本円で1000円くらい

銀貨・・・日本円で1万円くらい

金貨・・・日本円で50万くらい

お金はこの世界ではすべて共通通貨なので日本円 ドルといった感じの換金などは存在しない。

昨日俺が換金した石のお金は金貨一枚と銀貨20枚になった。残りは金貨一枚と銀貨5枚。

その後しばらく町を歩き俺は街らしきところに来た。

「しまったな...迷ったか?」

周りは家が立ち並び王宮があるのかがここからじやあ見えない。

俺が困つていると三人組の小さい子共達が俺に話かけてきた。

「お兄さん、もしかして迷子?」一番背の小さい女のお子がおどおど

しながら聞いてきた。

着ている服は地味だがほつれや汚れもなくきれいだ。

「ああ、そうなんだ。よかつたら王宮が見える場所まで案内してくれないかな？」

俺は子供達に

銅貨を2枚ずつ渡して案内を頼んだ。

狭い入り組んだ道を迷いなく進む子供達は俺に興味津々のようだ。

「ねえ、お兄さんはどこから来たの？」

三人の中では一番大きい男の子が目をキラキラさせている。

「山奥の村から來たんだ。俺はめっちゃ強いんだぞ」

そういうて背中の大剣をポンポンと叩く。子供達はスッゲーと言つてくれた。

「じゃあお兄さんは皆の勇者より強いの？」

「ん？ああ…まあ互角かな？」

同一人物だし。

「ところでなんでそんなに情報が伝わるの早いんだ？まだ1週間経つてないだろ」

「お兄さんホントに山奥で住んでたんだね。伝書バトが王都に来て翌日には新聞に載るんだよ？」

「無知で悪かつたな。
俺がへーと言つと子供達が笑つていた。

子供達に案内してもらつて王宮に戻つてきた。

まだ時間があるので今度は王宮内を探検してみよう。

しばらく庭に沿つて歩いてみると図書室らしき所を見つけた。

取りあえずこの世界について詳しい情報があつた方がいいかな。

「…お邪魔しまーす…」

そーっと扉を開けて中を確認する。

よし、誰も居ないな。

それからしばらく歴史について書かれた本を漁つて大体のことは把握した。

特に地形図は今後役にたつと思ひぬす…借りておいた。

ほかにもこの国のおとぎ話や伝記もあつてなかなか面白かった。

夢中になつて読んでる内に日も暮れ始めた。そろそろ戻らうとした所で入り口に本が落ちてるのに気づいた。

「こんな落ちてたっけ?」

きっと近くの本棚から落ちたに違いない。

気になつたので中身を確認してみよつとしたんだが……。

「何だ中身真っ白じゃん」

何も書いてなかつたので適当な場所に閉まつておひら。

「じや、失礼しました~」

部屋に戻るとメイメールが戻つてきていた。

「よへ、どけ行つてたんだ?」

「少し用事があつたんです。
スイは散歩に行きました」

「ふ~ん。ヒルアビそのケーキどうしたんだ?」

机の上には野イチゴの乗つたショートケーキが置いてあつた。

「あ……これは……」

「どれ早速一口」

「……どうですか?」

ふむ、クリームは甘め控えめで野イチゴも程よい酸味。スポンジの
焼き加減もいいな。

「つめえじやん。誰が作ったの？」

「あ、私…です」

「マジ? ジゃあまた今度作ってくれ」

あつとこう間に平らげてメイメールに頼んでみた。

「わちろん良いですよ」

メイメールは嬉しそうに笑っていた。

「じゃあメイメール、お礼にこれ、魔力石が埋め込まれてるから肌身離さずつけといて」

そうこうで俺はメイメールの手に指輪をはめた。

メイメールは何度も自分の手を見ていはつゝとりしているので『僕』に入つてくれたようだ。

俺はその日、久々にゆつたりとした時間を過ごした。

第五話 一休み（後書き）

次は25日です

ねむけー メイメール奮闘記（前編）

「ないだ電車の中でおなかを壊して死にそうになりました。
もし危ないうかって所でトイレに行くのをオススメします。

おまけ1 メイメール奮闘記

私は馬車の中で揺られていた。道は「テコボコ」で揺れるたびに頭が痛い。

これが一日酔いといつものなんだらうか。

お酒を飲んでる間のことはほとんど覚えていないが、カイル様の事をカイルと呼び捨てにしていたのは覚えてる。

……せっかくだからこれからはカイルと呼び捨てにしよう。うん。

思えばベアーウルフに襲われそうになつた所に現れた彼、カイルはとてもカッコ良くて（実際イケメン）、私は初めて恋をした。

いわゆる一目惚れといつやつだ。

それ以来おまじないと称して口づけをしたりしたのに、彼はなかなか振り向いてくれない。

あ、普段のしゃべり方は意識してしゃべつてます。一応「」が素のしゃべり方。

王女らしく振る舞えといわれてね。

数日間の馬車移動の中に何とか一日酔いも治つた。

久しぶりの王都は信じられないくらい静かで依然のルインと同じ場

所だとは信じられない。

それでもお父様とお母様に再会出来るのは嬉しいし、将来私の隣に居るかも知れない人も居るから、紹介…いるよね。

王宮に着くと懐かしい人がたくさん出迎えてくれて、再会したお父様とお母様はとても元気で安心した。

カイルとスイは先に部屋へ戻つたが、私は会いたい人が居るので別行動。

小さい頃、よく話相手になつて色々な話をしてくれたメイドさんのシャーリーや私の遊び相手になつてくれた護衛騎士のロイドとリー。

みんな元気で何より。

部屋に戻るとカイルは居なかつた。

自由奔放な人ね。

まあスイと二人なら恋愛相談もできる。見た目は若くても長い人生を生きてきた人、もとい狼だし。

頼りになるとと思つ。

「ねえスイ、カイルを喜ばせるにはどうしたらいいでしょ？

スイは私の恋について知つてる。ていうかバレました。

「なんじゃ。そんなの寝ている所に薄着で襲いかかれば良から」

アテにした私が間違つてるのかしら…

「ところ[冗談はさて置き、]何は好きな食べ物を作る、ところのはじめに？」

馬車の中では肉ばかりじゃったしの」

なる程、美味しい物に飢えてる時を狙うのね。

「それを早く言つて下さー。でもカイルは何が好きなんでしょうか？」

「それについても抜かりはない。ちゃんと馬車で聞いておいたから

の。カイルはイチゴの乗つたショートケーキが好物らしい」

やはり頼りになる。

「それじゃあ早速調理場に行つて来ます」

「うむ。頑張るのじゃ。ワシの分も頼むぞ（我ながら完璧じゃな。久々のケーキが楽しみじゃ）」

所変わつて台所

私はショフの方々に作り方を教えてもらい、材料の確認をした所で問題を発見した。

「…イチゴが無いですね。どうしましょうか?」

イチゴは王都では商人さんが持ってくるのを買う以外方法はない。といつあえずロイドを護衛として連れて商人を当たつてみよう。

「ないですね・・・」

考えてみれば当たり前ね。商人が減つて食料も足りなくなってるんだからイチゴが売れ残つてる訳ないわ。

私がため息をつくとロイドが何かをひらめいたようで話かけてきた。
「メイメール様、小さい頃野イチゴ狩りをした森へ行ってみるのはどうでしょうか?」

ああ、あそこは確かに野イチゴがなっているわ。

小さいころまだ育ちきってない野イチゴをお父様に食べさせてしまったことがあつたし。

ダメもとでいいから行ってみよつか。

「そうですね。確か近くの森に野イチゴがあるはずですし、それを代わりにしましょう」

こうこうのは味よりも気持ちが大事だと小さい頃シャーリーも言つ

てたからね。

昔の事を思い出しながら私は王宮へ戻った。

その後ロイドと別れてスイを連れて私は外れにある森へ行った。

ロイドは専属護衛のスイが居るなら自分はいらな」と言って軍務に戻ってしまった。

彼は面倒見が良すぎて部下が悲鳴をあげることで有名なのよね。少しだけ部下の兵士さんがかわいそうだわ。

森は昔と変わらない風景でした。最近は行つてなかつたのでかなり懐かしさを覚える。

この森は木と木の間隔が広く、見通しがいいのが特徴だ。

早速スイと手分けして野イチゴがありそうな所を探してみた。

「うーん、ないわね……」

誰かが野イチゴを大量に取つて行つてしまつたらしく、野イチゴが全く無い。

まあ食糧不足だつたら皆取りにくるわよね。

「どうしましょうか……？」

イチゴのないケーキなんてケーキじゃないわ。丸腰の剣の達人みたいなものじゃない。

「メイメールよ！あれを見るのじゃ！」

あきらめかけていた私はスイの指差す方を向いた。

よく見るとガケに野イチゴがなつているのが見える。
あれだけは取れなかつたんだわ。

「よく見つけましたね。…でも、どうやって取りましょー?」
根本的に不可能じゃない…

「ふむ。魔法を使えば何とかなるかも知らぬな。
良い機会じやし試して見る価値はあるじやろう。前にも言ったが魔
法はイメージじや」

私はスイの言つとおり野イチゴを取るイメージを頭に浮かべ魔力の
流れを意識した。

体から魔力が流れ出るのがわかる。私からあふれ出した魔力は野イ
チゴに向かつて伸びていく。

するとガケになつていた野イチゴが浮いてこちらに向かつてくる。
私は魔力を使う感覚を全身で感じながらイメージをしつかり維持し
た。

「これだけあれば十分ですね!スイ、早く帰りましょー!」

私は魔法を使いかなり興奮していたと思う。
もつと練習すれば戦闘に使えるかも知れない。
いつまでもカイルとスイに頼りつきりじやあ王女としての面目がな
いものね。

「うむ。上出来じゃな」

スイが満足気に頷いている。とまあえずは合格点つてことかな。

「ワシはもう少し森を散歩してから帰るから先に帰つてくれぬか」

狼も散歩するのかしりつ。

そう思うと少し面白い。スイがお散歩つて想像できないもの。なんとか笑いをこらえながらスイに向きなおる。

「そり、遅くならなによつにね。じゃあ私はもどるわー」

私は野イチゴを持つて急いで戻りました。

早く作らないとカイルにばれちゃうからね。

「最後しゃべり方が違つたがあれが素なのかのう?」

後ろからスイのそんなつぶやきが聞こえた。

しまつた。素が出ちゃつた。

その後カイルに指輪をもらつた。私の努力を神様が見てくれていたんだと思つ。

こんなご褒美が待つてゐるとは思つていなかつたのでとてもうれしい。

私が指輪に触ると、指輪は淡い黄色の光を発した。

ねむけー メイメール奮闘記（後書き）

メイメール実はおでんば係

次は28日

ねむかく 鳥かい (福井県)

いじから物語が進みます。

ねめけ2 鳥かげ

今日もまた、同じじーとの繰り返し。

起きて、学びたくないものを学ぶ。

そしてまた眠り、明日を迎える。

私は少々こゝ頃から感情のバレーション供だった。

けれど、それでも毎日が充実していた。

色々な話を聞いたり、図書室に行って本を読んだりするのが楽しかった。

いつからだらうか。両親が私に家庭教師をつけて以来、ほとんび図書室には行っていない。

あそこには昔の私が居るはずなのに。

本を読みあさり毎日に彩りがあったあの頃の私が。

いつも夢で昔の私が私に言つ。

こんな鳥かげの鳥のような生活、楽しいの？

私は答える。

だつてしょうがないもの。
私にはどうにも出来ないの。

すると昔の私は私を冷ややかな目で見る。

あなたは諦めてるだけ。

逃げようとしたい哀れな鳥よ。と

そう言い残し昔の私はどこかに消えた。

両親の友人はいつも私を見て誉めてくれる。

でも私にはわかる。小さい頃から色んな人を見てきたから。

の人も、あっちの人も、みんな両親に取り入る事しか考えていない。

本当に私を見てくれる人なんてここには居ない。

ある日の夜だった。

私が部屋で空を見ていると、彼はやってきた。

何で泣いてるんだ。

せっかくの顔が台無しだぞ。

そう言つておどける彼はどこから入ってきたのか、誰なのか。

それは分からぬ。でも。

私のつまらない毎日に彩りを加えてくれるには十分だつた。

それから私には楽しみができた。

彼が話してくれる話はいつも面白い。

どうやつて入つてきたのかとか、あなたは誰なのか。

聞いてみたけど彼は名前以外は何も教えてくれない。

私はもうと知りたい事があるのに。

ある日、私は彼に全てを話した。

全てを静かに聞いてくれた彼は泣いていた。

何で泣いてるの？

何で泣いてくれるの？

すると彼は私と約束してくれた。

あなたを必ずここから出してみせる。

それまでお別れだ。

それ以来彼は来なくなつた。

私はまたつまらない毎日に戻つたけれど、いつか彼が私の鳥かごの扉を開いてくれる。

そう思つだけで毎日を生きていられる。

いつの間にかなりの時間が経つたみたいだ。

そろそろ昼の勉強が始まる。

早く用意しておかないと。

パンパン

家庭教師がきたようだ。

私はいつも通りの声で返事をして扉を開けた。

いつの日か彼がこの扉を開けてくれると信じて。

おまけ2 鳥かい（後書き）

今回は2話掲載

第六話 飛竜の棲む国（前書き）

休みの日、起きたら「寝だとすぐ」くづいた気分になるよね。

第六話 飛竜の棲む国

夜、俺はスイと今後について話し合っていた。
メイメールはケーキを作るのに体力を使つたらしく、もう自分の部屋
にもどつている。

まだ時間的には夜の10時くらいなのであんまり眠くない。

「指輪のプレゼントとはなかなかやるではないか。見直したぞい」

そう言つてスイはくつくつと笑う。

人の色恋沙汰を笑うとはおしゃべり好きなオバサンみたいだな。
俺は若干恥ずかしさを感じながらイスの背もたれに体を預ける。

「まあ酔つてたとはいえ怒らせちゃつたからな。

へたしたら敵国に行くかもしれないし、魔力石の指輪は一石二鳥で
いいかなって。」

スイ曰くメイメールはかなりの魔力をもつてゐらしい。

きっと効果も大きいだろう。

メイメールはレベル8らしいがなんでも魔力がそんなにあるのか不思議
だ。

「ほう、魔力石か。護身も兼ねとるんじやな。

とこりでカイルよ、他の国に行くかもしけぬとはどうこうじや
?」

聞き返してきたスイは狼の姿に戻つている。

理由を聞くと人の姿じゃと襲われるからのつ。
とからかつて来た。

俺はベッドに腰掛けスイは地面につつ伏せだ。

「ああ、王様の態度や今のエスペリアの現状からすると多分敵国に
送り込まれる可能性が高い。
それもどびつきりの命令付きでな」

俺はひとつため息をついた。

あれだけ評価されてるんだから無茶言われるに決まってる。

「ふむ、ひと暴れしてこいといつ」とかの?」

「それは分からぬ。けど楽しみだな」

「さうじやな、化け物みたいなレベルが一人じやからな」

ふつふつふと不敵な笑みを浮かべるスイと俺。

あ、そういや

「ところで俺の好物はいつからケーキになつたんだ?」

「…何のことやら」

しらを切つても無駄だ。

「スイに教えてもらつたつてメイメールは言つてたぞ?」

「……」

「…………」

「…………」

狼のような鳴き声を出してスイは部屋の外に出て行った。

……都合の良いときだけ狼になるのは止めろ。

翌日、俺、メイメール、スイの三人は王の間に呼ばれた。

昨晚スイと話した事とほほ同じだった。無茶な内容も含まれていたが。

大切な部分の会話だけを抜粋してみた（そのほかはウチの騎士団にとかウチは何が有名だとかどうでもいい内容だった）

「マドラとリージアで戦争を？」

メイメールが驚いた様子で声をあげた。

王の間に呼び出され俺、メイメール、スイの三人は王様の前に立つている。

「つむ、現在マドラとリージアは一触即発の状態にある。そこで起爆剤を投下してほしいのだ」

確か国境線で小競り合いでいるんだっけか。

「なる程のう、大国で戦力が拮抗してゐる二国同士がつぶし合ひをしつてゐるときに体制を整えるんじやな」

「戦争してゐる間に構つてゐる暇や余裕はないよな。攻められる心配もほとんどなくなるつて訳だ」

王様の言葉に俺とスイは頷く。

まあどうせ敵國の奇襲か何かだと思わせればいいだらうし、俺達のレベルを考えれば楽と言える。

「で、他には何もしなくていいんですか?」

「つむ、余裕があるならモリージアの王と会つて同盟を結ぶか国家機密の一いつや一つ持つて帰つて欲しいぞ」

まあこんな感じだ。

マドリはこないだウチに攻めてきたから同盟を結ぶならモリージアだ

うひ。

しかも同盟を結んだりモリージアにひょつかいかける必要が無くなる。

もし断られたうひアーヴを襲撃としよう。

国家機密は論外。無理です。

毎過ぎには身支度がすみ、俺達はリージアヘスイに乗つて向かうことに。

メイメールは来ないとthoughtていたがスイと俺が居ること、もし同盟の交渉になつた時王族がいれば印象が良くなること、そして一度言ひ出したら絶対諦めないことが考慮されたりしつゝて來ることに。

馬車を使わないので目立たないよつてするためと山道なので馬車は使いにくいためだ。

リージアは飛竜が沢山生息する山の多い国だ。

500年ほど前から長い間続いてきた歴史のある国で、森の中には遺跡や人が掘つたとみられる洞窟が多く発見されている。

エスペリア側には森、シドム側には川が流れていて守りに関しては圧倒的に優れているが、人の住める場所が少ないせいで兵力が乏しいのが弱点。

それでも飛竜部隊は戦いで一騎当千の働きをみせる。

空からの攻撃はひとたまりもない威力らしい。

宝石の出る鉱山もあるらしくチャンスがあれば宝石の一ついを持ち帰りたいものだ。

スイに乗った俺達はリージアの王都、ゴートへ続く山道で野宿することになった。（スイは馬車だと2日はかかる距離を半日で進んでしまった）

天気は快晴、人と会うこともモンスターと会つことも無かつたため俺達は旅行気分で移動していた。

野宿の準備をしていると俺達の居る所の上を飛竜が飛んで行つた。俺達の周りに影がかかる。

飛竜はあつという間に遠くにいつてしまつた。

おそらく巣穴に戻るところなんだろう。リージアの所有している飛竜は鎧を着ているらしいからな。

「あれが飛竜ですか！？あんなに大きいんですね」

メイメールが驚くのも無理はない。

飛竜は小さくても体長が5メートルはあるし、大人になると火も吹けるようになるらしい。

日本に居た頃は一度見てみたいと思つていたが実際に見るとかなり怖い。

「まあ数が少ないので救いつてここだな。リージアが大切にするのもわかるよ」

強いヤツほど数が少ないのは自然界の掟だから当然飛竜以外の竜族も少ない。

「でもなんでリージアに多く生息してるんでしょうか？」

「それは飛竜が高い所に巣穴を作る習性を持つてあるから」という

説が有力じゃな。リージアは山ばっかりじゃからの「

スイがおばあちゃんの知恵袋的な知識を披露した。

口に出したら一瞬で天国のジジイと再会決定だな。

余計なことは言わずに俺はせっせと野宿の準備を再開した。

野宿の準備が終わった。

周りはすでに暗くなつていて俺達はランタンを3つ使つている。

周りは森で虫がうつとうつ。

もう少し進めば村があるのだがスイも疲れていて、暗くて危ないしお仕方ない。

適当にモンスターを狩つて晩飯を済ませ俺達はすぐに眠りについた。

「……れ……じや」

「……？誰だ？」

「起きるといひひとおひつー。」

いきなり殴られた。ぐふつ……。

目を開けると俺の上にスイが乗つてゐるのが見えた。

狼の姿なのが残念だ。

顔に出ていたのか、スイがジト目で見てゐる。

「…何を考えてるかは聞かぬが、緊急事態じや。敵がおる」

「なにひー。」

俺は剣を握り辺りを見回したが、敵らしい姿はない。

森の中に居るのか？

「すでに囮まれておるが、ビツするへ。」

よく見るとスイの上にメイメールがヒモでくくつけてある。

ああ…起きないんだね…

こんなに寝起き悪いヤツだつたかな？
なんか調子狂うな。

森の中からガサツという音がした。
敵はすぐそこまで来ているようだ。

俺は剣を構え腰を落とす。

「俺が敵の相手をするからスイはメイメールを守ってくれ」

そう言つた瞬間辺りが煙に包まれた。

煙幕か！

俺はすぐに剣技スキル『烈風斬』を放つた。
烈風斬は風を起こす技だ。

発生した風は煙を一気に吹き飛ばし、見晴らしの良くなつたところ
に敵がわんさかいる。

どうやら煙で視界を奪つてゐる間に袋叩きにするつもりだつたらしい。

一番近い敵に接近し攻撃しようとするとき遠くから『』が飛んできた。

とつさに剣ではじく。

しかし、わずかな隙だつたが注意のそれた俺に敵が切りかかってきた。

「しまつ……！」

避けきれなかつた俺の左腕に痛みが走る。

「つ……！何が目的だ！」

「黙れ！国王の犬が！」

敵が剣を大きく振りかぶり振り下ろす。

俺は右手一本でそれを受けた。

俺と敵の剣がぶつかり火花を散らす。

押し返せない！

片腕とはいえ力勝負でこの世界の俺に適うヤツがスイ以外に居るのか！？

「国王の犬？何のことだ！」

敵から距離をとつた俺は息を整える。

「お前……何者だ？」

「…お前にそ俺の剣を止めるなんて犬の癖にやるじゃないか
悲鳴が聞こえ、横を見やるとスイが周りの雑魚を大分片付けていた。

「ちへ、逃げるわお前らー！」

相手もそれに気づいたようで、もう一度煙幕を放ち逃げて行った。

俺は烈風斬をもう一度放つたが、敵はみんな逃げてしまつたようだ。

「…………あいつら、何者だ？」

地面上に座り込んだつぶやく。

「さあ。といあえずこいは危険じや。移動するから早く乗るのじ

や

「…………す～す～」

「てかメイメールまだ寝てるのかよー！」

第六話 飛竜の棲む国（後書き）

次は10月2日

第七話 王都パート

謎の敵襲の翌日、俺達は王都の途中にある小さな村に立ち寄り休んでいた。

村は静かでほとんど人が見当たらない。時折村人が俺の腕の傷を見て驚いていた。それほど出血量が多いってことだ。

宿屋の主人も俺を見てすぐに部屋に案内してくれた。ついでに救急セットも持つてくれた。

宿の部屋は昔の俺の部屋位の大きさで妙な懐かしさを覚えた。窓の光がまぶしい。

俺は剣をおろしてベットに座る。メイメールは包帯と消毒液をとりだしている。

「すみません…全く気づきませんでした」

俺の左腕に包帯を巻きながら謝るメイメールに俺は苦笑を返す。

あの状況でスイの上に乗つて寝れるヤツは多分二つだけだらう。怒る氣にもならない。

「まあ気にするなよ。スイで移動すると疲れるもんな

「一番疲れるのはワシなんじゃがな」

ジト目で見てくるスイにメイメールが笑った。

少しだけ場の空気が和む。

「それにしてもその敵って何が目的だったんでしょうか？」

「そこだよな。なんか国王の犬とか言ってたけど、
国王いったい何をしたんだろうか。

「カイルは敵の親玉に随分苦労しておったな。そんなに強かつたの
かのう？」

「ああ、剣のぶつかり合いで押し切れ無かつた。かなりのレベルだ
な」

「おぬしが力勝負で負けるとは……」

スイとメイメールが驚きの表情を浮かべる。

「まあ何にせよまずは王都に行って王様に会つてみないとな。止血
が終わつたら少し休んで出発しよう」

その日の晩、俺達は村を出た。

昨日あつたことの答えはきっと国王が握っている、と信じて。

俺は傷が開かないように気をつけながらスイにまたがつた。

スイは俺の傷をしてるのか、割とゆっくり走っていた。

氣を使わなくてもいいのだが、俺は何も言わずスイの気遣いに感謝した。

その結果また野宿することになり、見張りはスイに任せて俺達地面に転がって、目を閉じた。

その夜、俺は昔の夢を見た。

「ちょ！ 師匠あれは無理つすよ！」

見晴らしのいい高原地帯。

俺の目の前にはリザードナイトが立ちはだかる。

あれはレベル100位が標準なハズなんだが。

師匠の目が笑っていない。

「大丈夫多多分いける！」

「多分つて殺す氣か！？ 畜生遅刻した腹いせか！ 新しい狩り場って言われてホイホイついて行くんじゃなかつた！」

「ほら前來てるぞ」

「んなつ！？」

振り向くとリザードナイトが剣を振りかぶり俺に攻撃してきた。

なんとか回避した俺は師匠の居る方へ逃げたんだが

「甘つたれるな！」

今度は師匠に殴られた。何で！？

目を覚ますと辺りはまだ暗い。

師匠のパンチは眠気覚ましになつたようだ。

夢の中でこの威力。師匠は相変わらずパネエな。

仕方なく起きるとスイが「こちらに氣づき顔を上げる。
メイメールはスイのお腹を枕にして寝てるようだ。

「ずいぶん早く起きてきたもんじゃな。何かあつたのかの？」

「いやちよつと昔の夢を見て眠気が吹っ飛んだ。スイこそ大分早い
じゃん」

「ワシは常に気を張つて寝とるだけじゃ。おぬしらみたいに爆睡し
とつたら自然界では生きていけんからの」

そもそも当然と言わんばかりにスイが答える。

「なる程、スイがいたら見張りが必要ないな」

「ワシをひき使つとは良い身分じゃの。

メイメールも寝てて一度良いし、おぬしに聞きたいことがある」

「ん？ またメイメール関連か？」

「違ひつい。怒りずに聞くのじゃ」

何だろうか？

「…おぬし、この世界の人間じゃないのではないかの？」

「……何でそう思つ？」

「年に釣り合わないレベルに魔力石やモンスターの知識、そしてメイメールが言うとおり山奥で育つたと言つならば、なぜケーキを知つておる？ あれは貴族しか食べられぬ物じやろつ？」

「……」

「うこうう所を見るとスイは長い年月を生きてきたんだなとつくづく思つ。

もつ隠しても無駄だらつ。

「ああ、俺は別の世界からやつてきたんだよ。山奥で育つたつてのは嘘だ」

俺が正直にそう言つてもスイは微動だにしない。

スイは少し間を開けて口を開いた。

「ならよい。何者であろうともおぬしは大事な仲間じゃからの

何を言われるのかビクビクしていたがあつさりし過ぎて拍子抜けしてしまつ。

「何でそんなにサバサバしてんだよ」

「…元々予想はしどつたから」

それつきリスイは目を閉じ、また眠り始めた。

俺はモヤモヤとした気持ちでなかなか寝付けなかつた。

そんなこんなで翌日、早くも王都ゴートに到着。

リージアは山国だからゴートも木々が生い茂つてゐると思つたんだが
…。

「すげ…」

大規模な開拓をしたのか。

城下町は山の斜面に沿つて傾いてゐるとはいえかなりの広さで東京ドーム3個分はありそうだ。

一番驚いたのは大木と大木の間に橋をかけ人々が移動していること。

ツリーハウスマのものもちらほら見える。

地上と木上、一階建ての文化遺産つて所だな。

「こんな場所があるんですね…」

メイメールが俺の言葉に続く。

「とりあえず宿をとつて城下町見物しましょう！カイル、スイ。早く行きますよ！」

興奮したメイメールは急ぎ足で宿へと向かった。

そして宿。

ツリー・ハウスは地上の宿より2割くらい高かつたがメイメールが絶対
こりゃ！

と主張したためツリー・ハウスに泊まることにになった。

宿の番台で新聞らしきものがあったので買つてみた。

値段もお手頃で日本語だし。

「…なになに？』マドリア軍工スペリアの秘密兵器に敗れる！一騎当
千の剣豪か！？』。情報が遅いな

「しかたあるまい。山国でリージアと間違の場所での戦いじゃった
のじやし

「ええ、かなり速い方だと思いますよ。新聞は刷るのに時間がかかりますし」

「そういうものかな?」

日本では情報伝達はネットとかテレビで一瞬だつただけにいまいち納得がいかない。

新聞のページをめぐると今度は『レジスタンスがさらに過激に。商人都数襲われる』という記事が目に入った。

「レジスタンスねえ…昨日の山賊といい、この国も何か問題抱えてそうだな…」

伝統があるだけにそういうこともあるのだろう。

俺が記事に目を落としているとスイが覗いてきて急に目を見開いた。

何事かとスイが見ている部分に目を向けると…

昨日俺と戦った男の姿が写真に写っている。
(写真はあるのか。以外だ)

白黒だから細部は分からぬが間違いない。

「こいつか!」

「こんな簡単に情報が手には入るとは思わぬ誤算じゃな」

「なになに？』俺達は現国王が辞めるまで戦い続ける！』『国王何やつたんだ？』

「たしかリージアは税金の高い国で人口も少ないのでから、15歳には軍に徴兵されるはずです。

そこがあたりに何があるんでしょうね」

「まあこんな時代だししょうがないんじゃないかな？やるかやられるかの戦いになりふり構ってられないだろ。にしてもこれはチャンスかも知れないぞ」

「チャンス？」

「こいつらを倒せばリージアの信用を勝ち取れる可能性大だ。一気に同盟まで持つて行きたいな」

「…ワシは別に構わんが何か引っかかるの？」

スイは乗り気じゃ無かつたが渋々納得してくれた。

「私はカイルの提案、良いと思います。私達に手段を選んでる余裕なんて無いですから」

メイメールはそう言って顔を引き締めた。

第七話 H都ムート（後書き）

次は5日

第八話 城下町

宿を取り、俺達は城下町へと繰り出した。

町は広くて今日中には回り切れそうにない。

とりあえず地上のお店を回ることにしてまずは人の多い所に行つてみた。

王都だけあってどこを見ても人ばかりだが、それでも人が特に集まつてる場所は一目瞭然だ。

「すごい人ですね！ あれは髪飾りでしょうか？」

メイメールが見ているのは雑貨屋らしき店に並んでる髪飾りやピアス。

やはりこっちの女の子もこういうのを見るのが好きらしい。

メイメールはしばらく品定めしていたが、結局何も買わなかつたようだ。

一通り歩いてみたが、人通りが多い所は食料品や衣類がたくさん売られているようで、冒険者の為の物は少なかつた。

「おっちゃん、武器とか売ってる場所ないかな？」

近くにいた商人に聞いてみると、商人は少し難しい顔を浮かべた。

商人に教えられた通り俺達は人通りの少ない、城下町でも端の方にあたる場所へ行つた。

さつきの場所とは打つて変わり、少し小汚い感じの人々がちらほら見える。

「…まあこれだけ広かつたりひとつこの場所もあるよな。武器屋つてどいいだろ?」

「あそここの剣が並んでる店じゃないでですか?」

とこりこりと彼女の視線の先にあつた武器屋に行つてみると。

武器屋には一通り揃つてゐるが店内は若干ホコリっぽい。

店主は50歳くらいのいかついおっちゃんだ。

俺は近くにあつた剣を見て、少し違和感を感じた。

手にとつて見ると、やはり間違いない。

ゲーム時代から武器にはかなりこだわってきたからすぐに分かった。

「売りモノにあまり触らないでくれ」

おっちゃんが口を開いたので間髪入れず聞き返す。

「おっちゃん、これわざと手抜いて作つてるだろ? わざと刀身曲げたり、重さのバランスを変えない限りこんな出来る訳ない。若い

鍛冶屋が作った失敗作はもつと自然な物になるし、おつかやん腕良そそつだもんな

おつかやんは眉をぴくっと動かし「おひを睨んでいる。

メイメールとスイと俺は内心ビクビクしながらおつかやんの返事を待つ。

「…何のことだ？人の売りモノにケチつけるたあ、失礼なガキだな
れよって言つてゐただけ。あるんだろ？」

場の空気が張り詰める。

おつかやんが立ち上がり俺を睨みながら近づいて来た。

立ち上ると身長は190をゆうに超え、体格も相まってかなりの威圧感を持つている。

俺達は息を呑んでおつかやんを見る。

すると

「がつはつは！なかなか良い目をしてるじゃないか坊主！」

いきなり笑い出して背中を叩いてきた。

俺達はあまりの豹変つぶりに空いた口がふさがらなかつた。

「……でな。俺はホントに田利きが出来るヤツにしか白爛の武器は売らない主義なんだよ」

話してみるとおっちゃん」とバーネットはかなりの饒舌だった。

最初のあれは何だったのかと抗議したい所だ。

「確かに何にせよ物は相応しい人に使って貰つてこそですかね」

メイメールが頷く。

「でだ！坊主はかなりできると見たがレベルはどれくらいなんだ？」

バーネットさんが興味津々といった感じで身を乗り出す。

「73の剣聖だよ。武器にはこだわりがあるから今の剣にいまいち納得してないんだ。

バーネットさんはオススメできる大剣ある?」

バーネットさんは俺のレベルを聞いて驚いたが、鍛冶屋としての血が騒いだんだろう。

いそいそと店の奥に消えていった。

少し待つとバーネットさんは三本の大剣を文字通り担いできた。

「さあ好きなの持つていきな。代金はまけてやる」

「え？ いいのか？」

タダでくれるのはありがたいんだが気が引ける。

「構わん。元々坊主みたいなヤツの為に作った俺の自慢の剣だから
な。使って貰えるだけで充分だ」

バーネットさんはそう言ってにこやかに笑った。

「カイルよ。今日はついておつたな、あの男も自慢の剣をあれだけ
氣前がよくれるとは思わんかったが」

スイが俺の背中の大剣を見て顔に笑みを浮かべる。

三本あつた大剣の内、俺は一番長い物を貰つた。

バーネットさんいわく名前は『五月雨さみだれ』と詠つらしい。

あの人もなかなか趣味が偏つていそうだなと苦笑せざるをえない。

そして俺達はバーネットさんに別れを告げ宿へ戻る最中だ。

町は夕暮れ時を迎えた人々の往来が緩やかになつていてる。

宿へ戻つたら早速モンスターを探して五月雨を振つてみよ。

「カイル、あれは何の人だかりでしょう?」

そんなことを考えているとメールが俺の袖を引っ張ってきた。

メイメールにしては珍しい事だつたので俺は少し面食らつたが、確かに前方に人だかりが見える。

「何の人だかりなんだ?」

俺が人だかりを作つてる人にそう聞くと、少し太り気味のおじさんが俺を見て下品な笑いを浮かべる。

「兄ちゃん剣士かい?自信があるなら喧嘩に参加してみたらどうだ」

「喧嘩?」

「おうよ。今あの兄ちゃん達が喧嘩してんのさ。

その一人が強いのなんの。見てて恐ろしいから俺らはこれ以上近づけねえがな」

つまり冒険者が何かが喧嘩して近づけないということか。

「なるほど、じゃあ止めてみますか」

試し斬りも兼ねてな。

「あんたら、こんな所で喧嘩なんかされると迷惑なんだが?」

俺は一人に挑発的な口調でそう言った。

二人は殴り合いを止めこちらを見る。

片方のヤクザっぽいのは顔が真っ赤になるくらい怒っているがもう片方の青年は困ったような顔でこちらを見ている。

どうやら喧嘩じやなくて絡まれてる感じだな。

「聞こえなかつたか?今すぐ止める。そいつじゃ見逃してやる」

「な……なんだとお! てめえがどつか行きやがれ!」

予想通りヤクザが殴りかかってきた。

俺は軽くよけて五月雨を抜き、そのままヤクザの足を引っ掛け倒れた所に俺は五月雨を突き立てた。

傷付けないようこじつもりだったがヤクザの頬に軽く傷が付いた。

切れ味良すぎて怖いな。

「まだやるか?」

俺は優しく言ったつもりだったがヤクザの顔から血の気がまるまる引いていく。

俺はそれを降参とみて五月雨をサヤに収めた。

周りの人だから歡声が巻き起つ、青年はビックリ氣まずさつて田をそらしてこる。

「相変わらず見事な剣さばきじゃな

スイとメイメールが二つ並んで寄ってきて俺をねぎらひ。

気がつくと人だからを作つてた人達がいつの間にか帰つてしまいその場には俺達しかいなかつた。

「で、何で喧嘩してたんですか？」

メイメールが少年に尋ねる。

「や、それは…」

うーん、青年は何か言えない理由があるようだ。

まあ（多分）青年に罪はないと思つし助け舟をだしてやるか。

「喧嘩の理由なんでもつこつよ。

それよりお前、名前は？」

「あ……レイと叫こめや」

「ルルルか。もう喧嘩するなよ、レイ」

俺はスイとメイメールで帰るルルと叫こめの場を離れようとしたが、レイが引き止めた。

「あの……俺はどこなんですか?..?」

おどおどしながら聞いてくるレイ。

「回りのコーヒーhausだよ。じゃあな

あべの日の朝。

俺達は昨日の疲れのせいか、普段起きる時間になつても寝ている。

休みたい時は無理せず休みを取るべきだしな。

ノンノン

何かを叩く音がする。

まあ向でもこいや、眠いし。

ノンノン

…またが、スイが相手してくれるだろ。

寝よ寝よ。

思惑通りスイガドアを開ける音がした。

何かを話しているのか、なかなか来客は帰らない。

そこで俺の意識は途切れた。

第八話 城下町（後書き）

次は9日

第九話 少年

暖かい光が俺の体に降り注ぐ。

目を開き体を起こすと外はすでに暁前らしく、人々の喧騒が耳に入れる。

昔から暁まで寝坊するのはよくあることだし気にせずスイとメイメールにおはようと挨拶。

「こんにちはと返されたのが少し悲しい。

「……そういう朝誰か来なかつた?」

かすかにそんな記憶がある。

スイは呆れたように息を吐いた。

「起きとるなら人に任せずに出て欲しいものじゃな。

昨日の少年じゃ。

お礼に少しばかり食べ物を貰つたぞい

スイが俺にリンゴを投げる。

キヤッчиした俺は一口かじつて聞き返した。

よく熟成されてるのか甘い果汁が溢れてくる。

「んで、何でそんな朝早くに?」

「レイは今日忙しいらしいの。

お礼を引き伸ばすのは恥だからとわざわざ来たと言つておった」

朝早く来られるのも迷惑なんだがな。

律儀といふか何といふか。

「他には? 何も言つて無かつたのか?」

「ああ、ワシらが何しにリージアに来たのかと聞いてきたの。

王様に用があるとだけ言つておいたぞ」

「そんなの言つて大丈夫かよ。相手は知り合つてまだ一寸だぞ」

心配して尋ねるとスイは大丈夫じゃと返してきた。

「あやつは悪いヤツじゃないと思つぞい。

むしろ助け舟になるやもしれぬ」

スイは軽く笑つて答えた。

どこにそんな自信があるのでうつか。

余計心配だ。

「まあもつ手遅れか。

メイメール、今日いじや王様に会って行くんだよな?「

「え……ええ」

メイメールは緊張している様だ。

初めて他国の王様に会い、しかも同盟の交渉だもんな。
無理はない。

俺達は身支度を整え宿を出た。

リージア城の前に到着した俺達は門番に話しかけた。

今回は國の事なのでメイメールの仕事だ。

俺とスイはでしゃばらないようにならないとな。

「す、すみません!」

若干うわずった声でメイメールが話しかけた。

「何だお嬢さん。迷子か?」

門番はあまり気にしていないうだ。

「私はエスペリア王国第一王女メイメール・フォン・エスペリアです。

リージアとの同盟交渉に参りました。

王様と会わせて頂きたく存じます

門番達が何かを話し合って、どこかに行つたと思つたら向やう偉そりなおじさんがあつてきました。

「始めてまして。あなた方の事は連絡が入つております。

「どうぞ此方へ付いて来て下さること

連絡が入つてるとほびう事だらうか?

俺達は顔を見合はせながらもおじさん对付していくつた。

「此方が王座の間でござります。

どうつか失礼のなつて

おじさんはやつぱつとどこかに行つてしまつた。

武器はお預かりされると思つたが、よほど近衛部隊に自信があるのだらうか?

疑問に思つてみるとメイメールはひとつ深呼吸をして扉に手をかけた。

扉が開く。

玉座の間に二十人ほどの近衛部隊が身動きひとつせず立っている。

正面の玉座に座るのが王様らしい。

田本だとメタボが心配される体型だ。

「Hスペリアの使者とはソチラのことか？」

体もでかけりや態度もでかいな。

「はい。Hスペリアはマドリガから侵攻を恐れています。

リージアはマドリガの同盟交渉に参りました」

軽く一礼するメイメール。

それを黙つて見ていた王様がフンと息を吐いた。

「断る。ワシらが同盟を結ぶメリットがない

「そ……そんな……」

まあそりだよな。

漬れかけの匂と同盟結んでも意味ないって考えるのは当たり前だ。

俺とスイが後ろで静かに見ていると扉が開く音がした。

振り向くとそこにレイがいた。

「レイ? なんでここに?」

俺は思わず口を開く。

「父上。彼女達は人格的にも素晴らしい方です。

どうか一度機会を貰えて下されませんか?」

父上って…お前王子か!?

「ふむ。確かにレイモンドの言うとおり人格は問題ない。

だが戦争では人となりではなく力こそ全て。

もしリージアを騒がしているレジスタンスとやらを退治出来れば同盟を結んでもよい。

力を示してみせよ

レイのおかげでチャンス到来。スイの言つとおり助け舟になってくれた。

その後、玉座の間から出たといひでレイに質問してみた。

「ところで何で王子があんなところに居たんだ?」

「僕は今民の生活を実際に体験していくところなんですね。」

実際に体験するのとしないのとでは雲泥の差ですから」

なるほど。

「じゃあ俺達の事を伝えてくれたのもレイか」

「ええ、助けられた恩を返したかったんで」

レイがニヤリと笑う。

「ところで一つお願いがあるのですが

「ん? 何の?」

「レジスタンス討伐に僕も連れて行ってくれないでしょ? うか?

「これでもレベル2-1のナイトですから足は引っ張りませんので」

レイが頭を下げる。

「うーん…王族一人も連れて行くなんてきつこよなあ…

でもレイはちゃんとしたレベルだから危なくなつたら逃げて貰えればいいか。

「ああ、いいよ。そのかわり絶対無茶しないでくれ」

「ついで四人になつたとや。」

第十話 反旗

王様との同盟交渉が終わり、俺達は宿でダレていた。うちの王様とは違いかなり傲慢そうなやつだったし、あんなのが王様だとこの国も大変だな。

「にしてもレイには助かつたな～」

ベットに横になりながら呟く。

王子様なのに町で暮らしてたりああいつ場面で堂々と入ってきたり、王子とは思えないヤツだ。

「じゃな…ワシリの助けになるとは思ったが予想以上じゃな

狼の姿になつて地面に丸まるスイ。

心なしか声に張りがない。

「…何にせよ王族と面識があるのは大きいですし、良いんじやないでしようか？」

メイメールまでスイを枕に横になる始末。

それだけ緊張感のある面会だったのだ。なんせ国一つの存亡がかかっていたんだから。

「何でレジスタンス討伐に付いて来るんだろうな?」

やはり疑問だ。戦闘を経験するならモンスターと戦うなりでもいい

し、リージアを騒がしてゐるレジスタンスだ。
危険も大きいだろう。

「体験するのとしないのとでは雲泥の差つて言つてましたし人との
実戦を体験したいんじゃないですか？」

うーん、どうもそれだけでは無い気がするんだがなあ…

「考へても分からないし、今日はしつかり休んで明日レイに会つた
時に聞いてみるのが良かろう」

スイの言ひことももつともだ。

考へても答へは出ないし気にするだけ無駄だろ。

「だな、じゃあ何か食べ物買つてくるか。お前ひざじつある？」

結局スイとメイメールは付いて来なかつた。

「さて、何買おうかな？せつかくだしバーネットさんに挨拶してい
くのもいいかな」

独り言を言しながら城下町を歩いていく。

果物をいくつか買ってバーネットさんの店へ行こうかな。

俺が果物を買い終えると誰かが俺の肩を叩いた。

「カイルさん、どうも。少し話があります」

振り向くとそこには昨日と同じ市民風の服を着たレイがいた。

「んでも、俺のところに来たって訳か

バーネットさんが「コービーを俺とレイの前に置く。

」「Jリザバーネットさんの武器屋の中だ。

「ああ、あんたら誰かにばらす心配は無いからな

れつて買つた果物をバーネットさんに渡す。

レイはバーネットさんをつりつりじざに見ている。

「で、話つのは今度のレジスタンス討伐についてか?」

「……ええ、やります」

俺がバーネットさんを気にせず話し始めたので、レイも仕方なくといった感じで話し始めた。

机にはレイが持ってきた地図が広げられている。

「私の私兵の調査によると、レジスタンスの拠点はこの辺りにあります。

敵は30人ほど、リーダーはかなりの強さですね

「それは知ってる。こないだ襲われたからな」

レイは少し眉を動かしたが話を続ける。

「ここからがお願いです。

何とかしてレジスタンスの人を仲間にできないでしょうか?」

想定外のお願いに思わず顔をあげた。

レイは決意のこもった目で俺を見ている。

「仲間にして貰一すんだよ」

「父上…いや、現国王の暗殺を手伝つてもらいます」

「は……？暗殺？実の父を？」

「な、何言つてやがる！」

俺はリージアと同盟を結んでもらつ為にレジスタンス討伐をするんだぞ！

「…大丈夫です。現国王が死んだら次の王は僕ですから。」

エスペリアとの同盟は問題なく結べます

あり得ねえ。確かに嫌な王様だとは思つたけどそこまでするのか？

俺はひとつ深呼吸をして落ち着きを取り戻した。

「…分かった、同盟は問題ないんだな。

だが、なぜそんなことをする？大体戦力が天と地だろ？。どうやって暗殺するんだ？」

「話せば長くなりますので、先に暗殺方法について説明します。

現在玉座の間の衛兵の内、半分は僕の私兵です。
彼らにはその時が来たら裏切るように話しています。

また市民にも約千人ほどのクーデター派を集めました。

市民の生活をしているのはこのためです。

作戦は二つ。

まずレジスタンスの方々に味方になつてもらつのが前提ですが、いつでも外せる手錠をつけて捕らえた振りをして玉座の間に連れて行く。

合図を送つたら手錠を外し、王を私の私兵とレジスタンスの方々で暗殺です」

「なる程な、なら可能かもな。

だがリージアは今マドラーと一触即発の状態だ。そんなことがあれば絶好のチャンスだと思って攻めてくるぞ」

「それも大丈夫です。現国王は誰にも知られていない白龍部隊を用意していますから。彼らはこの作戦に賛成してくれました。

防衛は問題なしです」

おこおい白龍まで居るのかよ。

白龍は飛竜と比べると飛行能力はあるがとにかくタフで三晩攻撃しても倒せないって話があつたりする位だ。

「抜かりないってか。

じゃあ本題を聞かせて貰おう。

何でこんなことをする?」

俺は「一ヒーを少し口に含んだ。

レイも少し口に運び、話を続ける。

「まずカイルさん、あなたは国王を見てどう思いましたか?」

「…傲慢なヤツに見えたな」

「ええ、カイルさんの言うとおり国王はかなり傲慢です。

国民の税金を増やして彼は何をしてくると思います?

皆の建築?軍の強化?違います。

彼は国民の税金を有力貴族に渡して自分の味方をするよう頼んでいるんですよ」

まじかよ。あの国王何やってんだ。最低だな。

まあレイの言うことが正しいといつ場合だけだ。

「それが本当ならひどい話だな。

で、お前はクーデターを起しちゃった訳か

「ええ、こんな無駄な税金で市民が苦しみ続けるのはこれ以上耐えられないんです。

……カイルさん、力を貸してくれませんか？」

レイがすがるような目で俺を見る。

ふーむ。とんでもない話になつたな。

「一日時間をくれ。メイメールやスイに無断では決められない。

三日後の晩、レイも一度来てくれ

俺がそつ抜びるとレイはそれと帰つていった。

「今戻つた

僕は隠れ家の隠し通路を通り中に入る。

中にはクーデター派の主要メンバー5人がイスに座り僕を待つている。

「王子…どうでした！？」

5人の内の一人、カーライルが身を乗り出して聞いてくる。

「そう焦るな。

返事は三日後の昼まで待つて欲しいと言われたよ。

けど、手応えはあると思う

5人からどよめきが起ころ。

「なら返事は期待出来そうですね」

城に仕えているモルダ（カイル達の案内をした人だ）が頷いた。

「ああ。このまま行けば今週中にも現国王の政権は終わりだ。

とうとうこの時がやつてきたな」

「ええ、あの暴君も風前の灯火ですよ
カーライルが不適な笑みを浮かべ、腕を組む。

僕達はその後、作戦の細部の見直しを始めた。

第十一話 相談

レイは帰る前、隠れ家の場所を教えてくれた。

これで俺が隠れ家襲撃とかしたらどうするつもりなんだろうな。

レイが帰った後、バーネットさんはコーヒーを俺のコップに継ぎ呑み込んだ。

彼はレイが座っていたイスに腰をかけ息を吐く。

「とんでもねえ話だな。

国王暗殺なんてよく堂々と言えたもんだ。

で、坊主はどうするんだ？

受けるも良し、受けないも良し。

大体アイツの言つてる事が全て正しいとは限らないしな。

慎重に動くべきだと思つぜ」

バーネットさんはこの話、びつかりに転んでも関係ないようないふて草だ。

こんな人通りの少ない所に店を構える位だから本当にそういう想つてるかもしれない。

俺はややあつて質問に答えた。

「とりあえず保留したのはスイとメイメールに相談するだけじゃなくて、アーヴィングの話の裏を取る時間が欲しかったからさ。

レイの言つてはいるが正しいのなら、手伝つてやつてもいい。」

そう言つてコーヒーを少し口に運ぶ。

机の上から果物が一つ落ちた。

「さうか。なら俺が言つてはもうないな。

坊主、頑張れよ

バーネットさんほんこやかに笑つ。

宿へびづけつて帰つたのかは覚えていない。

ただ果物を持って帰るのを忘れた事は覚えていた。

「……とこう訳だ」

俺は宿に帰り、スイとメイメールにレイがした話を伝えた。

スイとメイメールは俺が話し終えるのを黙つて聞いていた。

「す、」い話になつたもんじやな。

実の息子が父親を殺そりとするなんて、レイは存外野心家じやつた
ところわけじやく

スイがうそうん頷く。スイも歳に年月を生きてきたからひつひつ話
も体験したことがあるのでだらうか？

「確かにす、」い話ですね。マジラとくらみ合つてゐる時にクーデター
なんて

メイメールは相変わらず素直な感想だな。
そこじが良ことじりりでもあるが。

一人の反応を見て俺は話を続ける。

「マジラとくらみ合つてゐるからこそなんだらうな。

主力が居ない間にやつておきと済ませるつもりなんだらう

「で、やつておぬしは裏を取ると言つておつたがどうするのじやへ

「貴族の館に忍び込むか城に忍び込む

「それはまた危ないですね

「ああ、まあスイが注意を引いてる間に壁をくり抜けば侵入は可能
だろ」

「またワシが損な役回りなのか…」

耳をぺたんとさせてスイガうなだれる。
最近わざと可愛く振る舞つてるんじゃないかと疑いたくなるくらい
あざとい。

「じゃあ侵入は私とカイルですね」

メイメールが緊張感のある顔で言つた。

あーいや、

「今日は俺一人で行こうと思つ」

俺としては心配して言つたのだがメイメールが一瞬固まつた。

「何ですか？」

納得いかないといった感じでメイメールはこちらに寄つてきた。

キスをされた時の事を思い出してしまい、少し顔が赤くなつてしまつた。

「そ、そんな危険な事に王女を巻き込むわけにはいかないだろ

顔見られたら終わりだし。

「…王女だからって連れて行かないのは冷たいんじゃない？」

あれ?しゃべり方が…

なぜか冷や汗が流れる。

「カイル、あなたは私のことどう思つてこられるの？」

仲間じゃなくて王女として一緒にいるの？

そんなの嫌だよ。

仲間なら危なくともつこに行くのが当たり前じゃないの？

それに私にとつてカイルは大切な人だから無事を祈つてお留守番なんて耐えられない

メイメールが何かにすがるような目で俺を見ている。

「.....」

メイメールが俺に好意を持っている。

それは分かつてる。

気づかない訳ない。

けどメイメールの言つとおり王女様といつも書き方に一步引いていた。
それも事実だ。

だから…

「ごめん。確かに王女だからって一步引いていた部分は確かにある。

けど俺はメイメールを仲間だとも思つてゐるし、だからこそついて来て
欲しくないんだ。

それに、メイメールの好意に応えられる力も、危ない場面でメイメールを助ける力も俺はない、だから……」

「……分かった。今はまだただの仲間。だけどね、いつかカイルの心、掴んでみせるわ。

だからその先は言わなくてもいい。」

それから一時間。

メイメールは寝てしまい、今は穏やかな顔で静かな寝息を立てている。

「たまには男らしい事も言えるんじやな。

年甲斐も無くドキドキしたぞい」

いつもにだけ顔でからかうスイ。

俺にスイの相手をする気力はもつないので軽く流す。

「ああ、今日は疲れた。

俺もメイメールも疲れてたんだろうな……。

「言つたことは本心だけど、どこかお互いいライライしてたよ」
俺が天井を見ながらスイにそう言つと、スイはどこか懐かしそうな口調でつぶやいた。

「少年と少女はいつの時代も変わらんの。」

見ててあきぬわ

そいつ言つてスイはふつと笑みをもらした。

きつと昔にも俺達みたいなのが居たんだり。そつ思つとスイに少し同情してしまう。

「で、館にはメイメールを連れて行かないのじゃ、ナリツヘ。」

「ああ、もしばれたら大変だからな。」

俺なら見られても夜なら人違いで済む。

五月雨も置いていくよ」

「じゃあメイメールは何をするのじゃ？」

「スイは屋敷に乱入した後メイメール連れてレイの隠れ家に行つてくれ。

話聞いてボロが出たら儲けもんだ」

「その隠れ家ってどこにあるのじゃ？」

スイが不思議そうな顔をしている。

場所はレイに教えて貰つたが少し冗談めいた口調でおどけてみた。

「決まつてるだろ？」

一呼吸空けてスイに立つ。

「血櫻の嗅覚でだ！」

怒られました。

第十一話 レジスタンス

リージアは山の多い地形だ。

あたりには木々が生い茂り、自然の要塞と言つても過言ではない。

そんな山奥に、そのリージアをかき回す組織の根城は存在する。

そう、その組織の名前はレジいたつ！

「何一人でぶつくさ言つてるんだ」

彼はレジスタンスのリーダー、リック。

何でもリージアに恨みがあるとかで一人でこの組織を作り上げた張本人でいてつ！

「だから何をぶつくさ言つてるんだ？」

「言いたいことははつきり言え」

そうやつてすぐに手を出すのやめて欲しい。

大体リーダーは細かいことを気にしそぎなのだ。

大変不満である。

声こぼ出せな「出でるぞ」……？

え、あ、うそん！？

いや！助けてえええ！

しばらくお待ちください

言つて無かつたか、俺の名前は『トント。レジスタンスのサブリーダーだ。

「で、準備の方はどうだ？」

いてて…なんて事するんだこの人。

お仕置きをされて体中が痛むがこれ以上やられたらひとたまりもない。

痛む体にムチを打つて体を起こす。

「武器も防具もまだ足りないっすね。

人数もまだクーデターを起こすには足りないし、もうじばらくは時間かかると思うつす」

毎度思うがこの人も少しは手伝つて欲しい。

地味な作業大嫌いだからなあ…

「そりゃか。だが残された時間は少ないし、商人を襲つて金を集める回数も増やさないとな。

といひで、飲んべえのキーオはどう行つた？」

この根城はレジスタンスの中でも幹部クラスの人しか知らない。

頻繁に出入りしてたらバレるからだ。

そしてキーオもその幹部の一人なんだが、今日は姿が見えない。

キイ バタン

「うへへへそ…」

噂をすればなんとやら、キーオが酒瓶を引つさげて帰つてきた。

「キーオ、どこに行つてたんだ？」

リーダーが聞くとキーオは急にその場に座り込んだ。

「…聞いてくださいよリーダー。

町歩いてたらのこのこと王子様が歩いていてよお…ひつく

痛い目見せてやるわ」と絡んだら…ひつく

バカでかい剣持つ冒険者に返り討ちにあつちまつたんだよお…

キーオはついに泣き出しちゃった。

彼は酒が入ると涙腺が緩くなるのだ。

俺はキーオの背中をさすりながらリーダーを見る。

「リーダー、大剣使いの冒険者ってもしかして…」

俺の言わんとすることをリーダーも察したようだ。

キーオに聞いてみた所、どうやら水色の髪をした美人さんが人混みの中に居たらしい。

間違いなくあの大剣使いの仲間だ。

「アイツ王子とつながっていたのか？」

「いや、多分何も知らずに助けに入つたんだと思いつつよ。

につくとき王子は護衛を連れないので有名つすから」

リーダーが暴れそうな雰囲気を出していたのですぐにフォローを入れる。

「まあ、それもそうだな」

幸いすぐに落ち着きを取り戻してくれたようだ。

状況を見るにレジスタンスに残された時間は少ない。

だからこそケンカなんてしている場合では無いのだ。

「これはこちらから動くべきかもしけんな」

「動くつてどうするんすか?」

「とりあえずあの大剣使いの今後の動きを見て、チャンスがあれば王子を暗殺しよう。」

何人か町に派遣してヤツらを探せ」

「探すと言つてもどうやって探すんすか?」

「大剣持つたり水色の髪してたりするんだからすぐに見つかるだろう?」

「なるほど。それもそうですね」

翌日、大剣使いが有力貴族の館に忍び込む姿が確認された。

翌日の夜、俺達は貴族の館にやつてきた。

流石に警備は厳重でこれ以上は近づけない。

「じゃあスイ、頼んだ」

「合点承知じゃ」

スイは狼の姿で館の門に向かった。

この後スイはメイメールと合流してレイの隠れ家に移動。

ボロが出たら儲けもの作戦敢行だ。

門の方に警備兵達が走つて行くのが見える。

びつやから上手くやつてしまひしー。

「『居合』い切り」

俺はバーネットさんに貰つてきた普通の大きさの剣で壁を切つた。

この剣もかなりの切れ味で壁にはきれいな四角形の穴が空いた。

俺はほふく前進で壁の中に入り、バレにくつよつこくくり抜いた壁を
はめ込んだ。

暗い間はバレないだろ?。

さて、みんながあたふたしてる間に実写版メタル アといきますか

「よし、俺達もあの穴使って侵入するぞ」

「うう」

「あ…あ…」

第十二話 勘違い

カイルサイド

館は結構簡単な作りになつていて、門の前に正面入り口、左手奥に行くと俺が侵入した庭がある。

庭を奥に進むと裏口ひしき場所があるようだ。

事前に行つた下調べによるとこの館に住むのはクラークという貴族で周辺の住民からも怪しい噂がわんさか出た。

ここを選んだのも王様と繋がってる可能性が高いと踏んだためである。

もちろん間取りなども出来るだけ調べてある。

予定通りこの庭にある茂みに隠れながら進む。

すると館の兵士達の会話が聞こえてきた。

「なんで急に狼が現れたんだ？」

「さあな、この館には大した物なんてないし、近くの山から迷つて来たんじゃないかな？」

「ちげえねえ。この館に住む貴族はかなりのゲスだから天罰でも当たつたんだろ」

そんな話をしながら兵士達は門に歩いていった。

なるほど。やせつゝれは王様と繋がつてこむ可能性が高くな。

よし、慎重に茂みを進も…うへ。

「誰だー。」

前を向くと兵士がこいつ見てる。
ヤバくね?

「だ、誰か援軍をぐわつー。」

安心しな、峰打ちだ。

この辺を見つからなによつて茂みに隠してつ。

よし、先こー。

レジスタンスサイド

「やつせんちで行つたんだな?」

「ええ、こだけ草が痛んでるつす」

「コードー……吐きあがり……ひつべ

「飲み過ぎだ馬鹿」

キーオ、いつの時位飲むの止めよう。

少し進むとなぜか兵士が茂みの裏で伸びて居る。

「も……もう無理」

「「あ……」」

キーオが吐いた。

兵士の上に。

.....

「……先、行くぞ」

「……うつす。ほひ、キーオ早く」

「もう帰りた……」

「めん、名も知らない兵士めん。

後田の兵士がじばりく避けられたよつになつたのは別のお話。

カイルサイド

「さて、どうしようかな…」

館に入ることに成功した俺は取りあえず近くの部屋に入つて隠れている。

長テーブルにロウソクが等間隔に置いてある。ここはティナールームかな？

せっかくだから何か使えるものがあるかもしれないと思い、俺は部屋を物色してみた。

5分後

食べかけのシチューを手に入れた！

ナイフとフォークを手に入れた！

臭い靴下を手に入れた！

カイルはやる気を無くした！

ダメだ。まるで役にたたねえ…

こんなところ探しでも意味がない。部屋の外を探そう。

そう思い、ドアに向かうと外で足音が聞こえる。

足音はだんだん近づいてきて、ついに近づいた。

ドアを開けられたら困る。

俺はドアノブを固く握りしめ足音が遠ざかるのを待った。

来るなよ…来るなよ…

そんな俺の願いが通じたのか、足音が遠ざかるのが分かる。

助かった。

そう思い俺はドアを背に座り込んだ。

レジスタンスサイド

「で、結局キーオは帰ったのか？」

リーダーがやれやれといった感じで首を振る。

キーオは後ろから来た兵士の匂に使わせて貰つた。

兵士は飲んべえが紛れ込んだと思ったのか、キーオを館の外に連れて行つてくれた。

まあ狼騒ぎでそれどこのじや無いんだろう。

ここは館の廊下だ。

丁度一人組の兵士が来たので鎧を奪う、もとい借りてきた。

リーダーが強いと何かと便利だ。

「ところで今回は何でリーダー来たんすか？いつもは部下に押しつ…任せるのに」

てつくりまた俺一人かと思つてた。

「ああ…貴族に攻撃できる数少ないチャンスだからな。

それがどうかしたか？」

「い、いや、何でもないっす」

間違いない何かあるな。

あのリーダーがたつたそれだけの理由で来るわけない。

「さて、どうちに行くんすか？」

階段をのぼるか通路を進むか。

「え？ ああ、とつあえず階段を上ってみるか

うーん、やっぱどこか落ち着きがない。

でもこんな場所で考え事はダメだな。

理由は後で聞いただそつ。

俺達は静かに階段を上った。

カイルが同じ手を使ったのは、そのすぐ後だった。

カイルサイド

「この手があつたか

俺は兵士の一人を氣絶させ鎧を借りた。

カブトを深めにかぶり、ダイナールームを出て通路を歩く。

「こののは堂々としていや案外バレない。

じまじく歩くと階段があった。

「大体ボスつて上に面るみな。ドラ Hとかでもそうだもんな

とこうわけで2階へレッジバー。

それで、一階はどつなかつてゐるのかな…

「 「 …… 「

階段を上ると兵士と田があつた。

兵士一人キター！？

これは…いきなり詰んだか…

何やうに兵士達が「onso」話している。

ああ、きっとアソシ満しこよな的な話してゐるや…

階段で立つてゐる兵士達が近づいてきた。

なぜか動きがきこひない。

「よ、よおーお前何してんだ？」

兵士Aが力く力くしながら聞いてきた。
もしかして…バレてない？

なら言い訳を並べるまで…

「あ、俺はクラーク様に報告に行へといひや。

クラーク様ビームを锯るか分かるか?」

ホント下調べしどうして良かつた…

「え?ああ、俺達もクラーク様を探してたんだ。良かつたら一緒に探さないか?」

そう言つてはにかむ兵士A。

良くなーい!それ死亡フラグだから!

絶対最後でバレるパートンだから!いやパートンって何だ!

「あ、おひ。そうじよつ

でも断れない!断つたら廻しまれる!

「ひじて俺はスリル満点な状況に陥った。

レジスタンスサイド

「この部屋はただの物置だな

リーダーが言つとおつこには物置。

せいつぽい。

「リーダー、ここに居たら見つかった時怪しまれるとすよ

狼騒ぎの真つ只中物置にいる兵士一人。

怪しそうだ。

リーダーはそれもそうだな、と納得して部屋の外に歩いていく。

俺もそれに続いて外に出ると

階段から兵士が登ってきたのが見える。

俺とリーダーを見るその兵士。

(ビ、ビツするつすか！？)

捕まつたら今まで積み上げて来たものが水の泡になるかもしない
ところ状況に俺はかなり焦っていた。

(どうするも何も逃げるしか…)

ためらいながら答えたリーダーに反論する。

(黙りますよー怪しまれるだけっす!)

(ふ～む、なら何か言われる前にこいつから話しかけてなんとかし
よ)

なんでそんなに落ち着いてるんすか…

リーダーは落ち着いた口調でさりげなく兵士に近づく。

ダメだ！動きがガチガチすぎでパントマイムみたいになつてゐる！

その後奇跡的に兵士を「まかすこと」に成功したのは何故だろうか…？

第十四話 お姫様

カイルサイド

夜の静まり返った廊下に響く足音。

「こ」はリージアの有力貴族クラークの館。

言つまでもなく不法侵入。

そして隣を歩く兵士二人。

絶体絶命のピンチが続くが幸いクラークの部屋を知っているようだ。
このまま案内してもらおう。

無言で館の一階を歩く俺達。

「ど、どこのでこないだのあれはやばかつたな

一番前を歩く兵士がさつ言ひてこちらを向く。
え？ 急に何の話だ？

「ああ、あれは大変でしたね。後始末が特に大変でした。あんたも
大変でしたでしょ？」

大変？ 後始末？

ああ、そうか。

きつとこれは…

「ああ、みんな倒れて大変だつたよな」
宴会でみんなが酔いつぶれたんだろう。宴会は後始末が大変だから
な。

すると再びコソコソ何か話す兵士一人。

宴会じゃ無かつたのか？

俺が兵士じゃないつてバレた？

焦る俺だが、何故かそれ以降何も聞かれなかつた。

訳が分からん。

しばらく歩くと一番前を歩いていた兵士が止まつた。

どうやらクラークの居る部屋についた：

「……ここ、どこだ？」

え？迷子？

兵士が自分の勤めている館で迷つたらダメだろ。

いやそもそも何であんな自信満々で歩いてたんだ？

(みんなが倒れるって何やつたんすかね?)

後ろの兵士が訝しげにこちらを見ている(『気がする』)。

そもそもリーダーがいきなり話を振るから悪いんだ。

もしijiで判断を誤つたら間違になくバレる。

そうなるとあの大剣使いの目的をつかむことも不可能になる。

(わ、分からん。きっとモンスターと死闘を繰り広げたんじゃない
か?)

リーダーの答えも一理ある。

死闘だと死体の後始末とかしんどいし。

(ていうか何でそんな話したんすか)

(いや、その…後ろからの視線が怖くて…)

(……)

前から思っていたがリーダーはメンタル弱い節がある。

こないだプリン食べたのを怒つたらクッキーも食べたつてあつさり
自白したからな…。

レベル52つていう奇想天外な強さがあるからリーダーなんだね。

だから作戦を考えるのはいつも俺とキーオだ。

(まあ過ぎた事はいいつす。それよりちゃんと道合つてるんすよね
?)

俺が念を押すように聞くとリーダーは急に立ち止った。

ま、まさか…

「…………」「じだ？」

やつぱり迷子になつてゐる…

後ろの兵士もなんで黙つて…

そこで俺は全てを悟つた。

そつか!

こいつ、新米か!

初めから何も言わなかつたのも、後ろからついて來たのも、まだここに来て間もないからなんだ!

そりゃ道が間違つても分からぬのも当然だ。

俺はリーダーに全てを伝えた。

リーダーもそうかーって感じで頷いてくれた。

(「いつなつたら自分達も新米の振りをしてしまかすしかないっすー。」)

カイルサイド

「いやー、実は俺達ここに来て間もないからさ。道つう覚えなんだよ」

一番前を歩いていた兵士がそう言つたのを聞いて、俺はなる程と思つた。

コンコン話していたのは道が分からなかつたからなんだな。

「そうなのか。実は俺も新米なんだ。
仕方ないし手分けして探そーカ。俺はあっち行くからそっちの方の
探索よろしくな」

相手の勘違いには乗るしかない。

これでひとまず離れられるハズだ。

「いや、せつかくだし一緒に探さないか? また迷うかもしけないし」

お、ねー。

どうしていつなふんだ…?

レジスタンスサイド

(せつかく離れてくれそつなどいたのになんでそんな事言つんすか！？)

(相手が新米と分かつた以上顔を見られても怪しまれないだろ？相手は兵士全員の顔を覚えてる訳じゃない)

あ、なる程。そういうことか。

俺達はその後部屋を見て回つた。

なかなかクラークが居る部屋は見つからない。

「疲れたな」

新米兵士がそうつづぶやいて壁にもたれかかる。

カチツ

「「「ん？」」「

これ、何の音だ？

突然の事にうろたえていると

ウウ～ウウ～

警報が鳴りだした。

どうやら兵士が異常を知らせる非常警報魔法のスイッチを入れてしまつたみたいだ。

暗くて見えなかつた。

「や、やべえぞ！」

新米兵士が走り出した。

俺達もそれに続く。

「警報で駆けつけた兵士がくる前にここに入れるぞ！」

新米兵士は走つた先にあつたドアの前で剣を抜きドアに切りかかつた。

見事に穴が空き彼が入る。

どこだ！こっちか！

後ろから兵士の声が聞こえ俺達は急いで部屋の中に入った。

部屋の中には机やベッドがある。

「…………」

そしてベッドの上で一人こちぢりを向く女性。

髪は茶色、端正な顔立ちは貴族にふさわしいものだ。

彼女はゆつくじとした動きで窓を指差した。

「…窓を割つて」

「は？」

なんで？

「いいから早く。割つたらベッドの影に隠れて」

俺は言われるままに窓を割つてベッドの裏にかがんだ。

すると窓の割れる音を聞きつけ何人かの兵士が駆けつけてきた。かなり息が荒い。

「ミーナ様ー！」無事ですか！？」

「…大丈夫、窓から逃げた。今なら追いつけるはず」

ミーナと呼ばれた彼女は窓の外を見てそう言った。

兵士達はすぐに一階に向かい駆け出して行き、部屋は再び静寂につまる。

「あの… なんで助けてくれたんすか？」

俺がそう聞くとミーナさんはこっちを見て軽い笑みを浮かべた。

「リック。久しづりね」

リーダーのお知り合い！？

窓の外からは兵士達の喧騒だけが聞こえた。

第十五話 なんだかんだで

「ちょ、ちょっとリーダー知り合いなんすかーー？」

兵士の片割れが先頭を歩いていた兵士に詰め寄る。

リーダーと呼ばれたヤツはあたふたしながら兵士の片割れと貴族のお嬢さんを見ている。

あの～状況説明してくれないか？

兵士に話しかけようにもとてもじやないが口を挟めそうに無い。

どうもなしし傍観安定。

リーダーさんはじぱらくはあたふたし続けたが、少し時間が経つて落ち着いたようだ。

彼は貴族のお嬢さんに向かい正座。

なぜに正座…。

「ひ、久しぶりだなミーナ。元気してたか？」

リーダーさんは恐る恐るといった感じでそう言つた。
それを見てお嬢さんはブイツと顔を背けた。
顔が整つてゐからかなり様になつてゐる。

「まったく。突然居なくなつたと思つたら変な組織作つて何がした
いの？」

「いや、それはお前を助け出す為にだなあ…」

なんか聞いてる限りヘタレの夫としつかり者の妻つて感じだな。 哀
れだ。

兵士の片割れがそれを聞いてリーダーさんにまた詰め寄つた。

「リーダー。そんな理由でレジスタンス作ったんですか！？」

おいおいちょっと待て。何でそこでレジスタンスが出てくるんだ。

待てよ。レジスタンス、リーダー、…………まさか――

俺は正座してゐるリーダーさんに勢い良く飛びかかりカブトを外した。

母から届いたのよ。

せつぱりアイツだ！

「は?... どうかで会つたつけ?」

いまいち誰か分からぬといつた感じのリーダーさんに俺は反射的に叫んだ。

「あ、俺だよおおおおおおー。」

俺も勢い良くカブトを外す。

「…………」

「…………」

静寂。そして

「「なんでこいつーっ。」

ハモった。

「で、俺の後をつけってきたって駄か

ひとまず落ち着いた俺達はミーナさんの命令によつて武装解除。

武器持つてると喧嘩しそうだと言われた。

まあいいだ斬り合つたしね。

さつき俺が叫んだせいで兵士こぼれるかとヒヤヒヤしたが幸い周辺の捜査に行つたのか近くには誰も居なかつたようだ。

「ああ、お前らの目的が分からんかったからな。ついて行けばそれも分かるだろ?」

あべひをかいているリックが答える。

「私に会こに来たんじゃないのね」

隣にいるリーナさんは少し不満気に会話に入ってきた。

軽く睨まれたリックが目をそらす。

少しうろたえながら

「俺もまさかお前の屋敷だとは思ってなかつたよ。まあそれは置いていた。もし良かつたら王子が何じよつとしてるのか教えてくれないか?」

と返した。

向こうは話題を変えようとしたんだとおもうがこれは好都合。
今回の作戦はレジスタンスに協力してもらわないといけないってところに向こうから聞いてきてくれるとな。

俺は一つ返事で王子の王様暗殺計画を説明した。

俺が話を進めていくにつれ、場に緊張が張りつめしていく。

俺が一通り話し終えるとリーナさんが口を開いた。

「とんでもないわね。確かに税金は高こなさびマドリヒミ合つて
る時にする事じゃない」

「そつすね。俺達に協力してもうつて言つて実はレジスタンスを捕まえる嘘つてこともあるつか。手伝つても信頼できる証拠を取りないとダメっすね」

「だな。偽の手錠が本物でした、じゃひとたまりもない」

「三人の言つとおりの話はまだ裏が取れてない。だからここに来たんだけどな。ミーナさん、クラークは王様とつながつていたりするのか？」

娘なら多少は叩撃してゐるだらつ。やつと思つてミーナさんに尋ねると、彼女からは有力な話を聞けた。

クラークと王様は2年くらい前から仲がいいとかで夜中にコンコン何かを手渡す場面も見たことがあるようだ。

ミーナさんの証言で裏がとれた上に、ミーナさんにもぜひ実行して欲しいと言われ、リックとその部下（お前聞いてねえ）が作戦に手を貸してくれると約束してくれた。

「で、リック」

「は、はい？」

「私をほつたらかしにして帰るなんて事は無いわよね？」

「え？ でもそんなことしたら？」

「無いわよね？」

「はい、ありません」

その後リックはミーナさんを館からかつせりつて行くところを見られまた新聞に載ることに。写真の中でお姫様だつてされているミーナさんは幸せになつぱことい

つた顔をしていたので、どっちが悪者なのかは伺とも言えない。

スイとメイメールは結局兵士から逃げ切れず（俺のアシストをずっとしてくれたんだが）王子の所には行つてなかつた。お礼は今度きつちつも「うづとか言つてたのは忘れよ」。

その翌日、俺達は王子の教えてくれた隠れ家に俺 スイ メイメール リックの四人で向かい、作戦の詳細を聞き、ゆっくり寝るため早めに解散した。

下はその内容

「カイルさん、本当にレジスタンスを説得するなんですね」と「

「いや、説得したというか成り行きでこいつなつたというか…。

そんなことよりさっさと作戦会議といつざ

「そうですね。今回一番大事なことはレジスタンスの人々に王様を殺してもうひとつです」

「…一応理由を聞かしてもらおうか」

「カイルさんやスイさん、僕が王様を殺してしまつとエスペリアは敵扱い、新しい王様は暴君扱いになること。そしてレジスタンスが国民の支持を得ていることです」

「レジスタンスって支持されてるんですか?」

「ええ、商人は襲われているものの税金の額や性格の悪さで嫌われる現国王に真っ向から向かつて行つてますから」

「なるほどのひ」

「じゃあ捕まつたふり作戦で一気にいくか

「ええ、王宮の周りは僕の仲間達で塞いで市民には被害が出ないようになりますんで安心してください」

俺達は手をがつちり組み静かにつなづいた。

明日、歴史に新たな1ページが加わる事になる。

第十六話 結末

「入れ」

王様の許しを得て俺達は王の間に足を踏み入れる。

この前来たときと同じで両脇の兵士達は微動だにしない。

嵐の前の静けさってヤツだらうか。

王の間を静寂が包む。

「こ」の度はレジスタンス討伐、大儀であった

玉座でふんぞり返る王様に一礼。

「では同盟の件は結んでいただけるでしょうか？」

メイメールが王様に問う。

「おお、そうであつたな。エスペリアとの同盟は約束通り結んでや
らひ

「機嫌な王様が大声で笑う。

残念ながらレジスタンスは王の間につれてこれなかつた。

今は王子の私兵が庭先で捕まえてるふりをしている。

間もなくして兵士が一人、息を切らして入ってきた。

「お、王様！レジスタンス達が手錠を外し王宮内で暴れています！」

「な、なんだと…早く兵士を集めて鎮圧しろー…」

「では俺も鎮圧に向かいましょう」

国王側のな。

「お、おお頼む」

何も知らない王様に従うふりをして俺は王の間を飛び出した。

しばらく廊下を歩いていく。

「あ、いたいた」

一人でいる兵士発見。そーっと近づいて……

「ぐあっ……」

振り向く前に頭を殴りつけ氣絶させる。

「…………よし、いくか」

「リーダー！ 敵が多すぎるっす！」

現在敵はこっちの一倍は居るだろう。

レベル差もあるしかなり厳しい。

「何人かでまとまって戦え！

絶対無理するな！」

かくいう俺もこれで10人は相手にしただろうか。
避けきれず喰らつたダメージがジワジワきてきた。

「また増援だ！」

キーオが叫ぶ。

また敵が増えたのか。

他人ごとのようにそう思いながら一人、また一人と斬りつけていく。

「次は俺だ！」

さつききた増援の一人が剣を振るう。

跳ね返そうとするもつばぜり合いになる。

俺と互角に戦えるってもしかして…

「そのまま黙つて話を聞け

やつぱりお前か。

また変装とはこつないやつめ。

「ヨリは俺とスイが引き受けたから先に行け。いいな

ひとつ領き距離をとる。

そして俺は何人かを回収して王宮に走り出した。

「逃げたぞ！追いかける！」

それをみた兵士が叫ぶ。

だが

「おひつー。」

「ぐあつー！何をする貴様ー！」

カイルが行く手を阻んだ。兵士の格好をしてカブトをしてるので誰かはばれていません。

遠くからは狼の遠吠え。スイのものだ。
俺は背中を預け中庭を突き抜けていく。

王子の部下のカーライルには事前に兵士が手薄な場所を教えてもらつてゐる。

ほとんど戦闘もしないうちに王の間の前まで到着。

「来たゾー。」

後はここを突破するだけだ。

「くそ！ キリがねえ」

中庭を引き受けたはいいが敵が無限沸きなのかと疑いたくなるくらい多い。

王の間の方が騒がしい。リックが何とか着いたようだ。

しかしとしても早く加勢に行きたいんだが。

するとスイガ兵士をなぎ倒しながら走ってきた。

「これを使ひんじゃー。」

渡されたものは野球ボール位の黒い塊。

「それはワシがメイメールの魔力を詰めた爆弾じや。魔力を加えて投げれば一気に爆発するよつになつてある」

ああ、なる程これで庭を一掃か。

「オーケーありがたく使わせてもらひうぜ」

爆弾に魔力を少し加えると爆弾からショード音が鳴り始めた。

「くじえええ！」

（この時レジスタンスも巻き添えだつてこと）
（氣づかなかつたのは
秘密）

俺が投げた爆弾は真っ直ぐ前に飛んでいく。

「どーに投げとるんじや ああ！」

明後日の方向。

シュー

「ん？ 何の音だ？」

「リ、リーダー！爆弾っす！全員伏せろおおおー！」

伏せたと同時にとんでもない爆音がなり俺達は吹き飛ばされた。
なんとか起き上ると爆発はとんでもない威力で、敵はほとんど居なくなっていた。

どうやら伏せたのが幸いしたようだ。

「…………」

無言で王の間に入る。

「ま、待て！こんなのは有りな訳が」

うろたえる王様。

あ～、まあ。何だろうな。

とりあえず

「死ね」

俺は王様の首をはねた。

現国王の死はリージア全体に瞬く間に広がっていき、首都ゴートには『祝 レイモンド王』といった旗が沢山並ぶ。

でもこれはレイモンドに対する期待ではない。

前国王の不人気がここまで騒ぎにしているのだ。

そういう意味でレイには大きな期待と責任がつきまとつだろ。

リックとミーナさんはその後めでたく結ばれ、リックはレイの直属の親衛部隊の隊長に任命された。

レジスタンス時代散々暴れ回ったせいで反対意見が多くたが前の親衛隊長を力でねじ伏せたようだ。

ミーナさんが元々有力貴族の娘だったこともあり彼女の一押しも効いたみたいだ。

「ま、俺達も同盟国としてサポートしてやらないとな」

「そうですね。お互いに助け合っていけたら」

メイメールはそう答えた。

ちなみに俺達はスイの上に乗りエスペリアに帰る途中だ。

個人的にはレイの晴れ姿も見たかったが国の指令で来てる以上長居は出来ない。

「こじてもあんなにぱぱっと同盟結べるなんて思わなかつたの」

走りながらスイも話に入る。

「だよな。街で偶然レイと会えたのがでかいよ」

「神様が見ていたんじゃないですか？」

ふふっと笑うメイメール。

うーん、あのヒゲジジイがそんな事するかな…
俺が渋い顔をしているとメイメールがあつと声をあげた。

「やつにいえばツリーの上の店に行つてませんね」

「あ、確かに」

忙しかつたし完全に忘れてた。

ツリーの上…やつ言わると『氣』になるよなあ…

「スイ、今から戻つたりはできねえかな?」

後ろ髪を引かれるのでダメもとで頼んでみる。

「無理じや。それは今度の楽しみに取つておけばよかひつ」

「そうですね。また今度来たときの楽しみにしておきましゅう」

「えー……」

俺達は元気やかに山道を進んでいく。

遠くの空で飛竜が大きな声をあげた。

第十六話 結末（後書き）

2章からは不定期更新になるかもしれません
1話当たりの量を4000字程度まで引き上げる予定なので
てゆうか書き溜めがもつないんです

第一話 王宮での生活

リージアでの騒動からはや1ヶ月。

秋を迎える紅葉がキレイな季節になつた。
この世界に季節があるとは少し意外だったが季節の移り変わりは生活に彩りを加えてくれる。いいものだ。

話は変わるが、リージア新王レイモンドが同盟関係の調印、ならびに親睦会を行う為に3日後エスペリアを訪れるらしい。

城下町も以前の活気を取り戻し商人や旅人が毎日行ったり来たり。
かくいう俺も軍の訓練に参加したり、1ヶ月前に会った子供達に城下町を案内してもらつたりと充実した毎日を送っている。

一ヶ月前はレベル5にも満たない新兵達もなんとかレベル10前後に育つて俺としても鍛えた甲斐があつたと満足感がある。

まあ同盟国の王様に頼りない兵士を見せるわけにはいかないから新兵達にはかなりのハードスケジュールをこなしてもらつた。

脱落者が出来なかつたのが一番の収穫だ。

このように忙しい毎日を過ごす日々

メイメールからお願い事をされたのはそんなある日の事だつた。

「ほらー！そんなんじやリージアの国王に鼻で笑われるぞー。気合い入れて戦え！」

時刻は昼前、時間的には10時前後くらい。

俺は兵士達を連れて付近の山にやつてきた。

最近ここら近辺に住む住民がベアーウルフやゴボルグの被害に悩まされているそうで軽く討伐しに来たのだ。

この世界にはギルドというRPG御用達の組織はあるにはあるのだが戦乱の世であるため特定の国に雇われていたり違う国に出かけていたりと人手がとにかく足りない。

そして彼らを雇うにもそれなりのお金がかかるため一般的な村人達はよほどの事が無い限りは彼らを雇わない。

以上の理由で軍が討伐にやつってきたという訳だ。

国民の軍に対する信頼を得るだけでなく新兵達のレベルアップも兼ねているので一石二鳥。

ただ体を鍛えるだけでも経験値は入るのだが実戦とは雲泥の差があるのも大きい。

「やあっ！」

ラルクが最後のベアーウルフを倒し戦闘は終了した。

「よく頑張ったな。今日は俺に頼らなかつた分昨日より一步前に進んだと胸を張つていいぞ」

戦闘後、村に戻り休憩をとる新兵達にねぎらいの言葉をかける。

ラルクは新兵の中で一番レベルが高い。

12レベルの彼は素振りのしすぎで倒れた事があるくらいの努力家で今日も張り切つて先頭に立つていた。

「あ、はい！ ありがとうございます」

ラルクは俺の言葉を聞いてパツと笑顔を見せた。

生真面目な性格だから隊長には向いてないんだよなあ、と内心苦笑しながらラルクの隣に腰を下ろす。

「で、手応えはどうだ？ 寒戦はまだ3回だしだ慣れないと？」

「ええ、まだまだです。自分の予測していない動きに対応するのは難しいですね」

ラルクは率直にそう言った。

だがその顔には充実感があるのを俺は見逃さない。

「まあお前も俺みたいに国を引っ張つていいって貰わないとな」

ラルクみたいなタイプは目標を高めにしないと伸び悩む傾向があるから満足されちゃ困る、というメッセージだ。
もちろんラルクはそんな意図は知らない訳だが。

「僕もカイルさんみたいな英雄になれるでしょうか？」

「なれるかどうかじゃなくてなれるように努力するのがお前の仕事だよ」

そう言って俺はラルクの背中を叩いた。

王宮に戻った時にはすっかり日も暮れて外は真っ暗になっていた。
新兵達に解散の意向を伝え俺は部屋に戻った。

「あー疲れた」

ベッドに倒れ込み今日の出来事を振り返る。

「大体一いつじに来るまではただの高校生だったヤツに皆期待しそぎ
なんだよ」

その原因を作ったのは俺なんだがな。

ベットの上で寝転がると疲れも手伝つてまぶたが重い。

コンコン

「ん？」

誰だろ？・夕飯にはまだ早いはずなんだが。

開けていきなり刺されるとかは無いと思うので返事をしてドアを開けてみた。

「失礼します」

なんだメイメールか。

こんな時間に来るのは珍しい。スイとケンカでもしたんだろうか？
メイメールはピンク色のドレスを着て頭にはカチューシャ（つて言うんだつけ？よく分からんが）をつけている。香水のいい匂いが俺の眠気を吹き飛ばした。

「おう、どうしたんだ？何かマズい事が起きたか？」
「いえ、そういう事で来たんじゃありません。今日はお願いがあつてきました」

メイメールがお願いとは珍しい。

いつもはスイを使いつぱしりさせるの。」

老体はいたわるものじゃ・・・と嘆いていたのが記憶に新しい。
メイメールにそれを言つてみたら護衛だからねとか言いそうだ。

「カイルは今日も新兵を特訓してましたよね？」

「ん？まあそれが仕事だしな。それがどうかしたのか？」

「.....私にも特訓してくれないでしょつか？」

え？何の？夜の？

⋮「冗談は置いといて

「特訓つて魔法のか？ならスイの方がいいと思つぞ」

魔力とかほほ感覚的にしか使つてないから頼られても困るんだよな。

「いえ、魔力の特訓はスイにしてもらつてますから」

え？じやあ

「剣の特訓か？」

俺がそう聞くとメイメールは「ぐりと頷いた。

なんでも話を要訳するとメイメールはレベルを上げておきたいんだと

いつ話でそのための剣の特訓らしい。

「でもなんで急にそんな?」

「皆さんに守つてもううだけっていうのが耐えられないんです。多少なりと自分の身は自分で守れるようになりたいんですね」

それだけ?もっと何があると思つたんだけど。

まあメイメールの気持ちもよく分かる。ゲームでも助けられっぱなしのお姫様とか多いし。

いやという時に本人が強かつたら有利だしな。

「じゃあ明日の朝、新兵達の訓練が始まる前に来てくれ

俺がそつまつとメイメールはもう一度頷いて部屋を出て行つた。

翌日、新兵達の訓練が始まる約2時間前。

広い中庭へ足を運んだ俺は1人の姿を視界に捉えた。

「あ、カイルさんおはようございます!」

「今日は早いですね」

ラルクだ。

努力家というのは重々承知していたがこんな朝早くに起るとは思わなかつた俺はラルクに

「お前毎日こじんまとじんのか?」

と聞いてみた。

ラルクはさも当たり前といった様子ではいと返事を返した。
そりや新兵一強いわけだ。

「カイルさんは何か用事があるんですか?」

「ん? ああちょっと訓練をお願いされでな」

「へえ、カイルさんが直々に訓練とはお相手はだ…れ…」

ラルクが急に黙る。

振り返るとちよづじメイメールがこっちに歩いてくるのが見えた。

「よ。時間通りだな」

いつものドレス姿とはうつて変わって動きやすそうな膝くらいの丈のスカートをはいていて、そこからスラッシュした足が伸びている。長い髪もまとめられ腰には細いレイピアがあり、本人のやる気が見てとれた。

「カイル、彼は?」

近づくなりメイメールがラルクを見て尋ねる。

「あいつはラルクって言って新兵達の中でも一番の努力家だよ。
レベルも新兵で一番高い」

俺の説明を聞きメイメールはラルクに歩み寄つて

「はじめまして。メイメールです。将来エスペリアを守れる騎士にな

れるよう頑張つて下さいね

「は、はいっ！」

いきなりのメイメール登場に顔を赤らめガチガチである。

「挨拶はそれぐらいにしてさつさと始めよう。時間が惜しい。とりあえずメイメールの実力を知りたいから全力で向かってきてくれ」

そう言つて俺は訓練用の木刀をメイメールに渡し少し離れる。メイメールもレイピアを腰から外し、木刀を両手で持つて構える。

「それじゃあ、行きます！」

メイメールは地面を蹴り下から上に木刀を切り払う。

それを軽く受け流し一步後ろに下がると今度は右手一本で突きが飛び、とつさによる。

メイメールの木刀に俺が斬りかかりにいくとメイメールの左手が淡く光っているのが見えた。

「おつと」

攻撃をやめ大きく距離をとる。

直後。

俺がいた場所の草が切りとられ空を舞う。

風の初步魔法

風刃ウイングカッターだ。

「ずいぶん容赦ないじゃねえか」

剣筋も悪くないし魔法もちゃんと攻撃の流れに乗せて使える。思つた以上にメイメールは強いようだ。

「それほどうむつー。」

再び斬りかかるメイメール。よく見るとこの時も風砲の反動を利用しているらしい。

だが一度は通用しない。

俺は真正面からそれを受けメイメールの勢いを殺す。

間髪入れず片手で木刀を振るいメイメールの木刀をはじいた。

「…予測以上ではあるが攻撃がワンパターンすぎるし魔法ももつと使い道がある。まだまだダメだな。」

「ちょ、ちょっとそれは言い過ぎですって」

焦った様子でラルクがこっちに走ってくるが俺は無視して話続ける。

「実戦で使える魔法はあれで全部か?」

「風魔法はなんとか使えるんですが他はまだ…」

そう言つてうなだれるメイメール。

さすがに言つ過ぎたかな、反省しよう。

「なるほど。ならそれでなんとかしよう」

といつても俺の考てる技はかなり時間がかかりそんなんだが、剣で風魔法つて言つたらあれは外せないだろ。

「カイルさん、そろそろ時間ですよ
「ん、了解」

ステップや剣のさばき方を教えたところで時間切れとなり、その後ラルクも魔法を学びたいと言つてきたので明日からはスイも呼ぶことにした。

「へえー！じゃあ兄ちゃんつてすげー人なんだ！どーりでお金持ちだと思った！」

子ども達の内の1人、タイトが驚く。

夕方、予定していたメニューが早めにこなされてしまったため時間が余り、城下町の子ども達に会いに来た次第だ。

明日からはもう少し量を増やすかな。

子ども達の案内のおかげで大体の場所は1人で行けるようになったが、たまに様子が気になるのでちょくちょく顔を出すようにしている。

今は俺の素性が分からず、子ども達の親にかなり警戒されたのでざつと説明を済ませたところで、一応持ち歩いていたエスペリアのバッジも役に立ち、タイトの家にお邪魔した俺は一瞬で子ども達に囲まれて質問攻めをくらっている。

「じゃあ綺麗なメイメール様つてやつぱり近くで見たらもうと綺麗？」

口を開いたのは一番年下の少女、マリーだ。

初めてこいつらに会った時はタイトの影に隠れていたんだがこいつの間に懐かれたのか、俺に積極的に話しかけてくるようになった。

「ああ綺麗だぞ。今度メイメールからお菓子か何か貰ってきてやるよ」

マリーがぱあっと手を輝かせる。

「ホント！？ 楽しみだなあ。メイメール様つてどんなお菓子作るの？」「こないだはケーキをじ馳走になつたよ。今度はクッキーにしてもらおつかな」

俺の言葉にわあっと沸く子ども達。

クッキーはなかなかの高級品だから気持ちも分かる（エスペリアは森が多く、小麦を商人達の輸入に頼つてるためだ）

「ついでにおこづかいもちょーだい！」

「それは無理」

タイトの頭に軽くチヨップ。

マリーが楽しそうに笑い、釣られてみんなも笑つた。

「ところで兄けやん、最近町でへんなうわさが流れてるんだけど知つてる？」「

「変な噂？なんだそれ」

そんなもの聞いたこと無いんだがよくある都市伝説か何かだろ？

「さ、いきんね、王宮の裏にある森から夜になると不気味な音がするつて話。

なんでもこないだの戦争で死んだ兵士のオンレイだとか」

そつ言つてお化けのポーズをとるマリー。

それはキヨンシーだら。

「……な、なんだ、よくある怪談話じゃないか

ほつと胸をなで下ろした俺だったがタイト母がどんでもない事を言い出した。

「じゃあもしよければ調べてくれませんか？

うちの子が探検に行きたいや行きたいと言つて困つてゐんです

は？

「いや、でもただの噂でしょ？ わざわざ行かなくてても…」

大体なんで俺？

俺には新兵を鍛えるといつ役目があつてだな

「いえ、カイルさんみたいな頼りになる人になら安心して頼めます。ダメでしょうか？」

いや、そうは言つてもだな…

あんた最初俺を警戒してたじやんか。と突っ込みたいのをなんとか我慢。

「…兄ちゃん、もしかして怖いの？」

何を言ひ、マリー

「そんなことあるわけないじゃないか！」

「じゃあお願ひー！」

俺の顔を下からキラキラした田で見るマリー。
いやいや別にロココンとかじゃなくてだな、この観者としてのパラ
イドとか色々あるわけで。

結局任せろと言つてしまつた俺であつた…

子どもに甘いだけとこいつ」とこいつてやつ。

時間も時間なのでタイト達と別れて大通りに向かう。
暗い路地裏に俺の足音だけが静かに響く。

城下町に出る時は腰に一般的な剣を一本つるしているだけなので自
然と警戒しながら歩いてしまう。

決してさつきの話のせいではない。ないんだ！

ガタンッ

ビクッと飛び上がるよう後ろを向き剣に手を運ぶ。

「こちー

「な、なんだ、ただの猫かよ」

脅かしやがつて。

帰ろ帰ろ。

「…………」

「…………」

つたない足取りで俺の後ろをついてくる猫。すりすり。黒猫なのか、暗い路地裏では鋭く光る目だけが見える。

「…………」

「…………」

王宮の廊下にて

「あれ、カイル。その猫どうしたんですか？」

「ああ、汚れてるしお腹すいてそุดから拾つてきた」

あんなかわいそうな猫ほつておけるほど俺は冷たくなかつた。

部屋に戻った俺は非常に葛藤していた。

「今日行くべきか、いや明日でもいいよな……」

無論今日タイトから聞いた怪談話のことだ。

言わなくても分かると思うが俺は重度の怖がりだ。
そんなの行きたく無いに決まってる。

だがこっちに来てから責任感あるポジションに居続けてしまったために一度受けた事は全うすべきだという信念が出来上がりてしまった。

昔はもっとあきらめの早いヤツだったんだけどなあ…
どうしたもんか。

晩飯を済ませ、煮詰まつた俺は結局一つの結論を出した。

「旅は道連れ、みんなで行けば怖くない」

巻き込めるだけ巻き込もう、そうしよう。

結論を出した俺はそのまま体を横にして扉を閉じた

第一話 新兵達をこじ.....鍛えよひ（繪書セ）

こまやらながら活動報告とこつものに附づいた
今度からひょくひょく書いてこゝへよかつたうれしかつて
お願いします

第一話 新兵達をいじ……鍛えよつ

日本時間では12時くらいだらうか。

窓の外から月の光が差し込み、鈴虫のような鳴き声が聞こえる。秋独特的風景を眺めていると昔の人のように俳句を詠みたくなる。

俺は立ち上がり水をひとくち口に含んで窓を見やつた。

「……………」

ね、寝れねえ……

今日は一日中動いてたから疲れてるハズなのに全く眠くならない。
……さつとあの話を聞いたせいだ間違いない。

窓の外を眺めていてもらちがあかない。
寝れないならかなり古典的ではあるが羊でも数えてみよう。多少は効果があるハズだ。

田をつづつて、と

羊が1匹
羊が2匹
羊が3匹

・ · · · ·

・・・・・

羊が100匹
羊が101匹

「眠れねえ！」

ダメだこんなんじゃダメなんだ！
明日も朝早いしヤバいって！
……いや

焦れば焦るほど泥沼化していくだけだ。
一旦落ち着いて…

ガタンッ

「ひづつ！？」

何だ？何の音だ？

ガタンッ

ドアから音がする。
え？死神来た？
森行つてないのに来ちゃった感じ？

ガチャン キイ：

布団にぐるまりガクブルする俺。
ヒタツ ヒタツと歩く音が近づいてきた。
俺のベッドの前で足音が止み、

そして

「一九四一」

え？

布団から顔を出すと俺が拾ってきた黒猫（俺の名前からカイと命名した）

「お前かよ脅かしやがつて」

緊張の糸が切れたのか、なんか急に疲れてきた。
ベッドで横になるとそれまで眠れなかつたのが嘘みたいに俺は夢の
世界に飛び立つた。

俺の眼前には一面晴れやかな草原が広がり吹き通る風が心地いい。

どこかで見たことあるような場所だか思い出せない。

「エリは…夢の中だっけ

そういうや寝たんだった。

「久しぶりだな、カイル」

ん？後ろに誰か居るみたいだ。

振り向こうと試みたがなぜか振り向けない。いや、振り向きたくないのか？よくわからん。

「黙つて話を聞け、これから世界はお前を中心回る。
その時、お前は一つの選択を迫られる。正しい選択をする必要はない。お前の選択が正しい道へ導くだろ？」

ああ、誰かと思ったら師匠か。最近夢によく出るねホント。
でも何で振り向けないんだ？

夢だからか？

一人でうなつていると師匠が俺の背中に手を伸ばした。

「あのカイルがまさかこんな事に巻き込まれるとはな

どりでもいいけど俺の夢なのに何で俺に権限がないの？
勝手にしゃべらないでほしい。

「なんで？それはお前が居るのはお前の夢の中じゃないからだ」

読心術でも使えるのかアンタ…

じゃあこじるよ？

「こじるがどこか、いずれ分かるときが来るさ。……時間が来たようだ。また今度会おう。

最後に一つ、人の好意を自覚しろよ」

後ろから人が遠ざかる気配。

振り向いた時には一面に広がる草原に人影はなかった。

「こやー

耳元でカイが鳴いている。

腹が減つたと言いたいのか、俺の腹に鎮座してしつぽをぱたぱたさせている。

「んあ…」

体を起こすとカイが俺の体から降りた。
目をこすりながら背伸びをすると昨日見た夢の内容がフラッシュバックした。

『お前の選択が正しい道へ導くだらう』

「選択つて何の事だ？」

なんか世界がどーたらーたら言つてたのも気になる。

「いやー…」

「おつと、早く準備しないと遅れちまう

夢は夢。正夢とは限らないしな。

そしてメイメール特訓2日目

「今日は魔法と剣の連携を確認しよう。風魔法は昨日使った2つしか使えないのか？」

「他には風壁ウインドウォールと火玉火玉くらいですね」

「魔法の結合は？」

「できません」

魔法には基本的な属性が、風 水 火 電気 光 間の6つ存在し、高度な魔法になると上位互換である嵐や炎になる。

高度な魔法に限らず、初步的な魔法で嵐や炎と同等の威力を作り出すことも可能で、それを俗に属性魔法の結合と言つ。水と火を混ぜると水蒸気になつたりといった具合だ。結合魔法は消費MPが少なくて済むがその分習得が難しい。

「ならワシが今度教えてやるかの」

スイさん久しぶりの登場。
メイメールに付きっきりだつたらしく満足に散歩も出来んのじゅ と
グチつていた。

年をとっても散歩したくなるのは狼の習性なのか、はたまたそういう趣味があるだけなのか。

「じゃあ結合魔法は任せるよ。風壁が使えるならそれを使ってみるか。風壁の特徴はこちちら側からの攻撃は通すところだからな。戦闘中に使いりや便利だる」

「えへっと、実は風壁は両手使わないと使えないんですよ」

じゃあ意味ねえじゃん…

「ふいー」

メイメールの特訓2日目が終わりホットミルクをすする。
ホットマーヒーはないのかと聞いたらマーヒーとは何かと聞き返された。
無いと恋しいな、マーヒー…

「何涙目になつたるんじや？故郷の風景でも見えたのかの」

「そくへスイがやつてきた。

今日はラルクに付きつきついたハズだ。

「あ、いや昔居た世界にあつた飲み物が恋しくてさ」

スイには俺の事情を説明してあるからな。

相談できるただ一人、いやただ一匹の仲間。仲間つて大事だようん。

「ほつ、どんな飲み物なんじや？」

「あれはな、黒くて…」

「ほう、黒い飲み物とは興味深いの」

結局コーヒーについて新兵達が揃つまで語り続け、新兵達は聞き慣れない単語に首をかしげていた。

カイルとの朝の特訓を終えた後、王の間にて

「お父様、レイモンドは結局いつ参るんですか？毎日毎日まだ決まつてないとしか言わないんじや準備のしようがありません」

レイモンドが来ると話されて早くもう3日が過ぎた。

リージアから全く連絡が来ないらしいが王様自ら同盟国に行くなんて重大な事連絡が来ない事がおかしい。

非難がまじて田でお父様を睨むとお父様がうろたえた。

一国の王としてどうなのかしらね、まったく。

(実は「ひやつてメイメール様がしつかり者に育つたんだがそんなこと本人が自覚しているはずもないよな)

(まあひづの王は優秀だけど気が弱いってことで有名だからな)

あれ?

今何か聞こえたような…。気のせいかしら。

心なしか親衛隊の居る方から聞こえた気がする。

でも親衛隊の人達はいつもと変わらない雰囲気だし…

そんなことを考えてるひづにお父様が恐る恐る口を開いた。

「メイメール、ワシも伝書鳩を出さうとしたがリージアは飛竜のテリトリーじゃ。確認しようにも方法がなかり」

「お父様、リージアから来た小飛竜に手紙を持たせれば良かつたじやないですか!? なんで何も持たせずに帰すんですか!」

私はつい怒鳴つてしまい無表情を貫く親衛隊達も一瞬たじろいた。

「いや、まさかこんな事になるとは思わんかったんじゃ」

「ほんな事? 何か私に隠してる? ことがあるんですか?」

するとお父様はあからさまにしまつたという顔をした。
ここに引いてなるものか。

「やはりそつなんですね。今なら許してあげます。説明して下さい」

(「これではどうちが王様か分かつたもんじゃないな（まあ将来頼りになりそつだしいいじゃないか）

む、今度は間違いなく聞こえたわ。

親衛隊も暇なかしらね。

私はお父様をじっと見て返事を待つた。

そしてお父様が話したのはとんでもない内容だった。

その日、私は訓練終わりのカイルを捕まえてスイと共に私の部屋に戻った。

ここなら誰かに聞かれる心配も無いと思つたためだ。

「これから話すことは絶対漏らさないでください」

カイルとスイが頷く。

「レイモンドが我が国に来ることは知っていますね？結論から言つとそれは延期になりますうなんです」

「なんでなんだ？まさか本格的にマドラとの戦争が始まつたのか？」

「いえ、戦争が始まつた訳じやありません」

カイルの言葉に私は首を振り答えた。

カイルはじれつたく感じているのか、無言で私の言葉を待っている。

「じつはレイモンドから連絡があつて『エスペリアにスパイが忍び込んでいる』みたいなんです」

「スパイ？ また急な話じゃな。 なんでスパイがあるとわかるのじや？」

「実はリージアにもスパイが紛れていたみたいでついこないだそれが宝物庫に侵入した時に捕まつたらしいんです。 その捕まつた人がエスペリアにもスパイが忍び込んでいる と」

「そんなのウソかもしけねえじやん」

「ウソかもしけんと言つても王を危険にさらす訳にはいかぬからのう。 延期するのも当然じや」

「ええ、だから私達でそのスパイを探さないといけません。 だからカイルとスイに頼もうと思つたんです」

カイルもスイも一いつ返事で引き受けてくれた。

スパイについての情報がほとんど無いのが現状だ。

とりあえず怪しい行動をしている人をピックアップするしかないだろ。

カイルは心当たりがあるのか、何かぶつぶつ言いながら部屋を出て行つた。

メイメールから聞いたスパイの話。

タイト達から聞いた怪談話。

つながりがあるかどうかは分からぬが早めに確かめるべきだろ。 問題はメンバーだ。

あまり大勢で行けばスパイに気づかれ逃げられる可能性がある。

逆に少人数だと敵の数によつては危険を伴う。

スイは確定として他に1、2人は欲しい。

メイメールは論外。お姫様を危険にさらすのはアウトだから。

となると…

「アーツを誘うか」

久しぶりに会いに行こうと心中で決め、ベッドに横になった。

朝起きると隣でカイが丸くなっていた。

どうやらここが気に入つたらしい。

カイは時間感覚がかなり正確らしく、メイメールとの特訓30分前に起こしてくれる良いヤツだ。

拾つた恩をしつかり返す律儀な猫である。

メイメールとの特訓はいつも通り終わり、俺は中庭の正規兵が集まり訓練している場所に向かった。

たくさん人が居たが労する事なく目的の人物を見つけ、話しかけた。

「よ、久しぶりだな、メイル」

(メイル。作者が適当に名付けたためメイメールと混ざりやこじくなつてしまつた人物。作者の予定では一度と出さない予定だつたが話の都合上再登場した。

クトラ族特有の緑髪を持つ。)

「何よいきなり。あれつきり来ないから忘れられたと思ってたんだけど」

メイルは皮肉めいた口調でそう言つた。

いや～俺も完全に忘れてたよはっはっは。

「何言つてんだ。俺はそんな薄情な人間じやないぜ」

「どーだか。で、要件は何?」

「ああ、実はかくかくしかじかでぞ」「で私について来て貰おつひとつとかしら?・ずいぶん都合のいいこと

不機嫌だなあ。」

何とかしてついて来てもらわないと。

「大体そんなのアンタ一人で行けば良いじやない。何で私を誘うのよ

「え? だつて怖いじやん」

俺がそう言つとメイルのツボに入つたのか急に笑い始めた。

「ア、アンタもしかしてビビりな訳?」

「だつたらなんだよ」

「じゃ、じゃあついて行つたら面白そうね。いいわ、ついて行つて

あげふつ

「話してゐる時に笑うのは止めてくれよ」

まあメイルの勧誘は成功したしいいか。

「.....」

「ん?」

.....

「..... 気のせいいか」

「どうしたの?」

「いや、今誰か居たような気がしただけだ。多分気のせいだから氣にすんな」

まさかスパイか?
氣をつけないとな。

「カイルさんつ... もつこつす...」

ラルクがうめき声をあげ助けを求める。

「いや～俺は嬉しいぜ。旦に日に成長してくれて」

それを微笑ましく見る俺。

(こんな日にあつなり手を抜けばよかつた…)

(バカ、聞こえるぞ)

「ほい、お前ら追加

「ぐあああああ

聞こえてないとでも?

「な、何をしとるんじや お主…」

声の主はメイメールの専属護衛さん。

「おう、スイカ。たくましい新兵達に特別メニューを施してるとだけ
だぞ」

決していじめではない。

「いや…これはただの拷問なのでは…」

スイがかなり顔をひきつらせている。

視線の先には新兵達。

俺の師匠直伝、地獄吊りだ。

地獄吊りとは足をロープで縛り付け王宮の裏にある崖に吊したものだ。

重石をつけてあるのでかなり厳しいと血食している。

「こんな事平氣でするとはお主悪魔か」

「いや、これを考へた師匠に言つてくれ。俺は師匠の教えに従つてるだけだからな」

「「「あ、悪魔あああー.」」」

なんとも言つがいい。俺も一度同じ道を通つたのだ。

「どうひでこんなとこに何か用か?」

「おお、そうじやつた。ラルクに頼まれとつた魔力石を埋め込んだ剣ができる。後で渡してやってくれぬか?」

そつ言つて腰に巻いてある剣を差し出した。

「魔力石?どうこうことだ?」

「この魔力石は持ち主の魔力を剣に伝えるためのものじゃ。アヤツなかなか筋がいいぞい」

へ~そんな使い方もあるのか。

「じゃあメイメールの分もお願ひできなか? アイツも剣と魔力を混ぜれば戦いやさしいだろ?」

メイメールもきつと喜ぶだろ?」

俺がそつとスイは少しにやけた。

相変わらず噂好きのおばちゃんみたいなヤツだ。

メイメールの分もすぐでき次第持つてきてくれる約束してスイは王宮に戻つていった。

みんな前に進んでるんだ。俺も頑張らんとな。

「よしやこまで！一人ずつ上げるから動くなよー。」

その前にコイツらの相手が先か。
早く強くなってくれよ。

自分の事に手が回らねえからな。

「遅かったな」
「ええ、少し取り込んでましたか？」
「王宮内の様子はどうだ？」
「…何も変わりはありません。」そのままいけば我々の目的も果たせるでしょう
「そうか、ならばいい」
「おや？どちらへ？」
「ただ喉がかわいただけさ。飯もまだだしな」

「では私はこれで

「ああ、くれぐれもボロを出さなこよつけな

「…行つたか

第一話 新兵達をこじ.....鍛えよつ（後書き）

週一更新は守りたい

第三話 城下町で

1週間がたつた。

秋の季節も中頃。落ち葉の量が増える一方で城下町の方も冬に向かって動きが活発化している。

秋の終わりが近づくのと時を同じくしてメイメールとの訓練も終わりに近づいてきた。

メイメールは日に日に動きが鋭くなっている。

レベル差がなければ危ない相手だらう。成長の速いやつだとカイルは苦笑する。

そしてもう一つ。

タイト達に頼まれた幽霊話の確認もまだしていない。もうじき新兵達が正規兵に仲間入りする予定なのでそれが終わったら行くつもりだ。

決して物怖じしてる訳では無いんだ…と自分に言い聞かせる。

予定ではスイ 僕 メイルの3人で向かうことにしている。

そして今日は新兵の昇格試験の日

「よ～し、全員揃つたな。今日は知つての通り昇格試験の日だ。俺の地獄メニューをこなしてきたお前らならきっと合格できると信じてるぞ」

新兵達から引きつったような笑い声が起こる。

まあ分からんでもないよ、うん。カイルもその苦しみを知っているためか、つられて笑う。

「じゃあ試験の内容を説明する。今回は数人一組で実戦を行つてもらつ。

いつも組んでるメンバーだから名前は呼ばないぞ。
呼ばれた組から順に実際に王宮にきていく被害届から好きなヤツを選んで行つてこい。

期限は明日の夕刻までできちんと依頼をクリアできたかは実際に村を訪れ確認する。

確認をとれたものから順次正規兵の鎧や武器を渡す。

以上だが何か質問はあるか？

……無いようだな。じゃあ1班から順に行つてこい

1班のリーダーが前に出てゴブリン退治の依頼を取る。

続けて2班 3班と依頼を受け取り、数分後には中庭から全員が消えた。

「さて、アイシングの中で一番に帰つて来るのはどの組かな」「ホントはもう分かつてゐるんでしょ？？」

振り返るとメイメールが後ろ手を組んで立っていた。
気配も消せるようになるとはいよいよヤバいかな。
だがまだそんな事を思えるくらいメイメールの気配は読み取れた。

「びっくりするからそういうのは止めろ
「別に良いじゃないですか。首を取らうって訳じや無いんですから。
それに気づいてたんですけど？」
「…………何でそう思ひ？？」
「だつてホントに驚いたなり奇声を発するハズですか？」

……ピンポーン

「お前の気配くらこ読めないと面田丸つぶれだからな。何か用か？」

するとメイメールは俺の前に回り込み両手を前に出す。

「はい、どうぞ」
「…クッキーか」
「ええ。今度子ども達に持つて行く約束したんでしょう？」
「久しぶりに行つてきたらどうですか？」
いたずらっぽい笑みを浮かべるメイメール。

「どうですかって行つてこいつことだらへーのクッキー」

そんな遠まわしに言つ必要も無いだらう。」

「あら、そんなこと無いですよ。行かないならスイに食べてもらい
ますから」

「俺にはくれねえのかよ！」

せっかくのクールキャラが台無しになつてしまつが突つ込みを我慢
出来なかつた。そこ、クールじゃないとか言わない！

仕方ない。行つてくるか。
カイルは右を向いて城門へ歩いていった。

昼頃に城下町に出るのは久しぶりだ。

夕方とは人通りも雲泥の差で歩くのもままならない。

ドンッ

「いたつ！」

「おつと、大丈夫か？」

小さい子が走ってきてカイルにぶつかった。飴を手に持っていたらしく粉々になつた飴を泣き出しそうな顔で見ている。

仕方ないか。そう思いカイルはぶつかってきた少女の右手に銅貨を2枚手に握らせた。

「ほら、これで飴買つてきな

頭をなでてやると少女は不思議そうに首を傾げた。

「おにーさん、だれ？」

「ただの優しい戦士だよ。ほら、お父さんとお母さんが呼んでるぜ。早く行つてこい」

「うん！ ありがと、やさしいせんしさん！」

人混みの先から駆け寄つて来た父と母に向かい走り出す。

父母の間に入り手を握るその少女を見て、カイルは母の姿を見た。

母さん元気してるかな？ 僕が居なくなつて沢山泣いたろうな……。

俺は近くの焼き鳥を売つてる店で一本焼き鳥を買った。

この時間でも路地裏は閑散としている。だから路地裏なんだけどな、と自分で突っ込む。

「おや？」

歩いていくとタイトとマリーが何やら口づんかしている場面に出来くわした。

2人はカイルに氣づき言い争いを止めた。

「よ、何ケンカしてんだ？」

カイルが聞くとあからさまに嫌な態度を出し、互いに指を指して

「マリーが悪い」
「タイトが悪い」

同時にそう言った。2人を見ていると少し微笑ましい。
昔の自分もこんな感じだったなあ、と懐かしむ。

俺は袋からクッキー一枚取り出しづざと音を立ててかじった。
2人がこっちを振り向いたところでもう一枚取り出し見せびらかす。

「ほら、ケンカするヤツにはクッキーやらねえぞ」
「え！？」
「まだケンカするか？」
「しないからー。」「

泣き出しそうな顔で謝るタイトとマリー。

カイルも昔はこうやってお菓子抜きにするつて聞いた時は必死に謝

つた記憶がある。

お菓子無しは子供も達にとって死活問題だから。

「じゅあタイトの家にみんな集めてクッキー食べよ」が

やつぱりタイトママーが走り出した。

「じゃあ（ポリポリ）、まだお化けの話は（ポリポリ）、まだなん
だね（ポリポリ）」

マリーがクッキーをかじりながら話に入ってくれる。

食べながらしゃべるなど聞いてみたがどうやらクッキーを食べるの
は初めてらしい、全くやめる気はないようだ。

喜んでいたとメイメールに伝えないとな。

必死にクッキーの取り合ひをしてくる姿を見ていると頬わざ笑って
しまう。

カイルはタイトの後ろに座るタイト母に話を振った。

「ヒロで最近何が変なことありましたか？」

「いえ、特にね」

「そうですか。それは良かった」

怪しいヤツの噂とかは無いか。
さすがはスパイと言つておいつ。

城下町は噂がすぐ広がる。怪しいヤツが居ればタイト母の耳に届かない訳がないし、やはり王宮内の誰かだらうか?

思案しているとマコーが指を舐めながらカイルを見上げた。

「なんかカイルお兄ちゃんってぜんぜん強そうに見えないよね
「なんで?」

「だつて強い人つてせーかく悪い人多いもん。お兄ちゃんはずいぶん優しいし戦つてるところも見たことないから」

「いーんだよ、平和なのが一番なんだからさ」

子供らしく発言にそつ答えて背中の大剣『五月雨』を横田で見る。
それにこっちに来る前は普通の高校生だつたしな。
立ち振る舞いに威厳が無いのも当然だつ。
自分で自分を納得させテーブルを見やるといつの間にかクッキーが
なくなつていた。

「なんだ、もう食つたのか」

「だ、だつてうまいんだもん」

「そうか、じゃあメイメールに作つてもうつよ。また今度な
少し照れ氣味のタイトの頭をなでて俺は立ち上がつた。
外はまだ明るい。今日はゆっくり休めそうだな。
さつと帰ろ。」

日頃の疲れ取るためカイルは家をあとにした。

じぱりく歩き、門へつべと王宮でカイが待っていた。

「二七一

尻尾を振つてアピールしているカイの背中を簾でてやるやると尻尾をもう一度振つた。

「わやわや出迎えか?

良くてきた猫だ。

だがカイはなぜか俺のズボンのすそを王宮と逆の方向に引っ張る。
城下町に何かあるんだろうか。

「二七一

ついでここと言わんばかりに歩き始めるカイ。
カイルは意味も分からぬままそれについて行つた。

カイは迷いなく城下町を突き抜けていく。

カイの体は夕日に照らされ闇に染まっているみたいだ。

そして、いよいよ城下町も終わり入り口の門が見えてきた。

「おい、どこに行きたいんだよ」

「ここや～」

カイルが口を開いたのと同時に、カイが突然足を止め道のレンガを尻尾でパタパタ叩きはじめた。

もちろんこの世界には下水道も完備されておらず地下室もよほど金持ちでも無い限り無いはずなんだが、とカイルは訝しがる。

「ここに何かあるのか？」

「ここや～」

びつやうやうやうらじい。言葉は分かるわ道案内もするわ賢い猫だ。

とりあえずカイが指すレンガに手をかける。

するとレンガの下にはもう一つレンガがあった。

確かにこの城下町の道はレンガを一重にしているなんて事はなかつたハズだ。

二層目のレンガも取り出した。

下にあつたのは

「か、隠し通路？」

スパイのアジトだろうか？
カイがなぜこんな事を…？

疑問は後回しにしてカイルは地面に座りこっちをじっと見るカイを肩に乗せ、中に進んでいった。

「暗いな」

通路の中はひんやりとした空気が流れ、俺の足音（極力抑えてはいるが）が中に響く。

カイルは左手をかけ
「ライト」
と唱えた。

RPGでは定番の明かりを灯す魔法である。MP消費も少なめ。

よく見ると通路はそんなに長い訳ではなく田をこじらすとかすかに扉があるのがわかる。

(パタパタ)

「もうだな、さつさと行くか

カイがじれったそうに尻尾で俺の頭を叩いた。

もしかしたらカイはある程度の知能を持つたペット型モンスターの一種なのかもしれない。

この世界ではほとんどのモンスターが戦闘型モンスターに分類されペットになんかとてもじゃないが出来ない。

だが小さいモンスターにはペット型モンスターが結構いるので女性プレイヤーはリストとか子犬をよく連れていた。

(でも黒猫なんて居なかつたよな)

そこが引っかかるところだ。普段の行動を見るに間違いなく知能はある。でも黒猫を連れてる人なんて居なかつたし Wikipedia にも載つていなかつた。

(おつと、もう扉か)

扉の前に到着。

中から聞こえる音を聞くにどうやらすでに準備万端のようだ。なら隠れても無駄かな?

カイルはスキル居合いで扉を破り中に入り込んだ。

中にはフードをかぶったヤツが一人。
その他が三人だ。

「な、何者だ！」

こつちのセリフですよ。

躊躇なく五月雨で雑魚Aを斬りつける。
もちろん峰打ちだけだね。

あつという間に雑魚3人を片付けフードをかぶったヤツに向き直る。

「誰だ？ 何が目的で」

そこまで言つたところでフードのヤツが急に叫んだ。

「あ、あーーお前、カイルか！」

え？ なんで俺のこと知ってるんだ？

狼狽するカイルをよそにフードを被った敵が笑う。

「いや～久しぶりだよなあ。 元気してたか？」

腰に左手を当て右手で頭をかくしげさを見てカイルは相手が誰なのかを察した。

「まさか、シンシア？」

「何言つてんだよ」の顔忘れたのか？…ってフードしてたんだっけ。わりーわりー」

あははつと笑いながらフードを取つて謝るシンシア。

シンシア、賢者レーヴ67でカイルとパーティーを組んでいた。見た目はきやしゃで名前も女っぽいがれつきとした男。パーティの迷惑を考えず攻撃魔法をぶつ放す、パーティー内での愛称は『笑う破壊兵器』。

「久しぶりだな、破壊兵器さん」

「おじおい再開していきなりそれかよぶつ放すぞ」

右手を構えるシンシアを冗談だと言つてなだめる。こんな至近距離で魔法を使われたらひとたまりもない。シンシアは火気厳禁なのだ。

シンシアになぜここに居るのかという質問をしてみると、いつのセリフだと返された。

「俺の家に勝手に上がり込んでそれはないだろ？」

「い、家？ここがか？」

「おひ、ひんやりして気持ちいいんだぜ？」

そういうやコイツ結構変な趣味あつたな。

クモ好きで女の好みが『がつちりしたヤツ』とか言ってたつけ。

気にもしようがない。カイルはシンシアだからな、と納得して近くにあつたイスに腰かけた。

「んで、なんでお前この世界に居るんだ？」

「それはこっちのセリフだつづーの。気づいたらいこの世界にいたんだ。ログアウトもできねえし参ったぜ」

「あれ？じゃあ神様には会ってないのか？」

「誰だソイツ？知らねえぞ」

おかしいな。俺の時は神様に呼ばれてシンシアの時は何も知りせず
にこの世界に飛ばしたのか。

俺には干渉してくるくせになんで？

「あ、そうか。メイメールがいたからか？」

「メイメール？つてこの国の王女様の？」

「ああ、神様にメイメールを助けてやつてほしうつて言われてこっち
に来たんだよ」

「ふーん、で今お前はどこで寝泊まりしてるんだ？」

「もちろん王宮に決まってるだろ。メイメールもいるし」

「死ねええええええええええ！」

「え？ おいやめろ！」

その日ルインで大きな地震が起きた。

第四話 仲間が増えた

「げほつ…げほつ…」、殺す氣かてめえ！」

「ついカツとなつちまつたぜ。まあ許してくれ」「誰が許すか！謝る氣ねえだろ！」

「うにゃー！」

部屋の中にあつたイスとテーブルは丸焦げで原型を留めていない。なんとか間一髪でよけはしたものとの衝撃はかなりのものだった。

「てかなんでこの壁壊れねえんだ。堅すぎだろ！」

「ふつふつふ、こんな事もあろつかと壁に魔力耐性をつけていたの

だ」

「やる気満々かい！」

何も変わつてないと思つたら悪化してやがる。

シンシアは服についたススをはらにつけ俺の前に歩いてきて俺の肩に手を置いた。

「な、なんだよ」

「いや～俺が地下でひもじい生活をしてるとこにお前は正面で優雅に暮らしてたとはなあ～」

「い、いや俺も結構苦労したんだぞ？」「ほつづんな？」「エスペリアを攻めてきたマドラを撃退したりリージジアの王様暗殺したり

そつ答えるとシンシアが急に小刻みに震えだした。

「う、嘘はいけんな嘘は

「いや嘘じやねえから。新聞にも載つてただろ?」

「新聞買つ金などない!」

「自信満々に言ひとじやねえだろ。」

本格的なホームレスになりつつあるシンシアの行くさきが心配だ。

「まあ心配するなーなんとかアテが出来たからなー!」

「そのアテつてまさか…」

「おう!紹介頼むぞ!」

やつぱりやつなるんだな。自分で何とかしようとこつ氣は無いらし
い。

ため息混じりに横を見るとカイが不機嫌そうに尻尾を振っていた。

「ナヒコやその後りでノビてるのは誰だ?」

「ああ、ここつらは借金の取り立てに来てたヤツらさ。おかげで助
かつたよ」

「…………はあ

「どうわけで連れてきました

「う、うむ」

所変わって王の間。

王宮に連れてきたはいいが俺が説明すると王様は難色を示した。（

ちなみにシンシアは別室待機だ）

あいつが居たらいつ王宮が破壊されてもおかしくないからな。冗談

抜きで。

「どうしますか？」

「カイル。おぬしはどうすればいいと思つ?」

やはりかなり迷つてゐるようだ。あいつの対処法なんて数えるほど
しかないので王様に

「そうですね、とりあえず離宮に住んでもらつか、軍の仕事で遠征
させるか、魔法耐性のある壁で作った部屋を用意するか、ですかね
？」

と提案した。

「うむ。」→67の賢者となれば是が非でも引き入れたいところじ
やが…そんな危険人物だとは…」

うんうんうなる王様。個人的にはシンシアに居てもうえると（性格
はあれだけ）助かるんだよな。俺前衛だし。

しばらくうなつていた王様もついに決心したらしい。

「…じゃが、今世は一人でも切り札になりうる者が欲しい。このまま別の国に行かれる位なら多少のリスクは覚悟するとしよう」
と言つてのけた。

「分かりました。本人に伝えておきましょう」

「いや、ここに連れてきてくれ。一目見ておきたい」

「分かりました」

俺は立ち上がりシンシアのもとへ向かづべく歩きだした。

「あ、王様良かつたらアイツの借金の肩代わり頼みます。結構借りてたみたいなんで」

「…………ひむ」

王の間全体に深いため息が流れた。

俺はカイルに案内されついに王宮入りを果たした。

王宮ですよ王宮！ゲーム時代はLV150以上用のクエストでしか入れなかつた場所なのにこんなあつさり入れていーんでしょうか！もうね、ジメジメした地下生活に飽き飽きしてただけにね。地獄が一転天国入りですよはい。

庭ではもう暗いと言つて廊下には真っ赤なカーペット。
テンションはじあがるわ～。

俺は衛兵さんの1人に離宮の一室にて案内されしばらくここで待つよう言われた。

「待つって言つたって落ちつかねえなあ」

こんな場所で待たされるとか初めてだし。
とりあえず暇つぶしに部屋の中調べてみるか。小さなメダルとか薬草があつたら面白いし。

「つて何もねえじやん」

あるいはソファーとテーブルにうそく台だけ。
来客用の部屋にタンスとかベッドがある訳ない。
人の家だからタンスがあるのでよ。

「もういいや、寝よ

ソファーに横になり目を閉じる。

地下室の地べたに布団をしいて寝ていた俺にとってソファーの柔らかな弾力は強烈な睡眠作用を持つていた。

「ううだな

衛兵から聞いた話ではこの部屋にシンシアが居るらしい。コンコンとノックをしたが返事がない。

「まさか逃げ出したか?」

アイツの性格を考えると可能性は高い。俺は扉の中に入り、シンシアが寝ているのを見て安堵した。考えうる限り最良の状況だ。

「おー、起きる」

シンシアの頭を軽く叩く。彼はすぐに目を覚まし大きく背伸びした。相変わらず女っぽい仕草だ。

「あーよく寝た。でどうだった?」

結果次第ではお前ホームレス決定なのにその余裕はどうから来るのか教えて欲しいものだ。

「ああ。結果から言えばエスペリアの魔導軍に所属になった。」

一応この部屋がお前の部屋になるから後でタンスとベッドを用意する。それ以外は勝手に買つなり何なりしてくれ

俺がそう告げるとシンシアはうつひょーー!と呟んだ。
彼がどれだけ辛い生活をしていたのか考えると少し同情してもいいだろう。

「給与は月の基本月給に仕事内容が加味される。

たくさん討伐なり護衛なりすれば給与は増えるし『物を壊したり人にケガさせたりしたら』給与は減る」

「そ、そんなに強調して言わなくともいいんじゃねえか?」

「お前は信用ならん

「ひつじー!」

事実だからしようがない。

「でだ。早速任務に来てもらいたいんだがいいか?」

「…? 今からか?」

「ああそうだ。 内容は……………とこう任務だ」

俺は今日の夜に裏の森の幽霊騒ぎの真相をつかむべく向かう。
その旨を王様に伝えると民からの依頼だから給与を出そうと言つてくれた。つまり任務扱いである。

シンシアが居るのと居ないとでは大違いなだけあって今回誘つことにしたのだ。

幸いシンシアも久々にカイルとパーティー組むのもいいなと言つてくれた。

また後で迎えに行くと言つて俺はその場を後にした。

時は少し前にさかのぼるコージアでの出来事

私達は馬で山道を走り抜ける。

このまま進めばリージアの王都「ポート」の裏手に出るであろう。
そのためにわざわざこのあたりを調べ通りやすい道をえらんでおいたのだ。

王宮が遠くに見えた。私は馬を止め、仲間達もそれにならつ。
私は仲間達の顔を一通り見て口を開いた。

「ここから先は予定通り二手に分かれ行動します。

Aチームは王都内でリージア兵を引きつけること。Bチームは私についてきなさい」

Aチームのリーダーが部下に命令をおくり王宮へ駆けていった。

彼らの姿が見えなくなるのを確認し私達も馬を走らせた。

しばらく走ったところにそれはある。

普段は兵士が常に見張りをしていて異常事態があればすぐに援軍が来るようになっている。

それだけリージア、いやこの世界にとって重要な場所なのだ。

私達は馬を森の中、いつでも逃げ、馬に乗れるような場所で地に降りた。

足音を殺し様子をつかがうとやまつこの間よりは警備が薄い。

「行きましょう。目的のために」

私達は駆け出した

「なつ！ 敵襲！？」

いち早く私達を視認した兵士の一人が叫び全員が武器を構える。オタオタしない辺りは流石にこを守るだけあるということか。

だが

「ぐつー。」

絶対的に私に劣る。経験、奇襲による精神的安定、何よりも実力で。私はまるでただの殺戮マシーンのように敵を切り刻んだ。

最初の1人は首だけになつた。

2人目と3人目は心臓が壊れた。

最後の1人はこの場所の事を吐く、だけ吐いてミンチになった。

全てが終わった時、私は横たわる死人の山をすでに人として認識していなかつた。

「ここか」

私達は中に入り奥に進んだ。なぜか返り血が増えたような気がするが私が斬つたのは人ではない。ただの敵だ。だから気にしない。私は悪くない。

それよりも目の前のことだ。

この場所はいわばスイッチ。世界の力を目覚めさせる、私達にとって最初の出発点になる場所。

スイッチの入れ方は簡単だ。ただ魔力を注ぎ込むだけ。

「さあみんな、台座に手をあてて」

目覚めさせましょう。世界を、この大地を、そして醜い争いを続ける4つの大国を。

しばらく魔力を注ぎ込むと大きな音とともに台座が輝き始めた。

スイッチが入ったのだろう。

私はその光に魅入られさらに魔力を込める。

さらに輝きを増していき最後には神殿全体に作られた溝に光の波が

脈をうちはじめた。

これでもう大丈夫だろ？

「長居は無用です。帰りましょう」

魔力を使いすぎたのか、体がふらつく。私は壁に手をつきながら森に向かつた。

第四話 仲間が増えて…（後書き）

もう少しすれば設定やあらすじをまとめたヤツを出せると想います
設定ややこしいよとか 誰だっけ?ってなった人用ですねw
次回は明日の夜7時掲載です

第五話 二段深林

「王様、盗賊達の内2人を捕まえました」

リックが王の間に入つてきてそう報告した。

「そうか、この夜分大規模に暴れまわるとは何か目的が有りそうだな。縛つてここに連れてこい」

そう命じるとはと返事をしてリックが部屋を出る。ただでさえ政権交代して間もなく忙しいと言つのに余計な事をするものだ。

心の中で軽く毒づく。

「カーライル、お前はどう思う?」

隣にいる宰相カーライルに尋ねてみる。正直気を落ち着かせるためだけに聞いたのだがカーライルからはしつかりとした答えが返ってきた。

「狙いといえばあそこしか無いでしょう。賊達には全く益の無い行動である以上狙いは…」

「封印の祭壇か。だがあそこにはよりすぐりの兵士を配備しているし第一あそここの封印を解くには膨大な魔力が必要になる。そんな魔力持っているのはエスペリアの第一王女メイメールくらいだろう?」

「いえ、メイメール殿のような魔力を持っている者が一人とは限らない。となればその可能性も考慮するのは当然でしょう」

カーライルの言つとももつともだが正直その予想だけは当たつて欲しくないものだ。

「王様、連れて参りました」

リックが2人の賊を縄で縛り付け連れてきた。2人の賊を玉座の前に座らせる。

「では詳しい事を教えてもらおつか」

僕がそう言つと賊の1人が口をニヤリと曲げた。歯並びの悪い歯が悪者面を一層引き立てる。

「クツクツ、俺が知つてゐ事なら何でも答えてやるぜ?」

「なんだ、やけに素直だな」

「当たり前さ。俺達が今更しゃべつたといひでもう手遅れなんだからな」

「なんだと?」

「封印の祭壇の封印を解いた。お前に再び封印し直すのは不可能だろ?だから必死に守つていたに違いないからな」

「なつ..!おい、誰か祭壇の確認をするんだ!」

焦る僕を見て賊の1人が下品な高笑いを浮かべる。

だがそんなことはどうでもいい。あそこの封印が解かれたなんてマズいことになつた。いやこいつの出任せかもしけない。そうであつて欲しい。

「もういい。こいつらを牢獄に入れる。明日緊急会議を行つ

「はっ!」

焦る気持ちを必死に抑えリックに命じる。

しばらくすると見張りの兵士が駆け込んで賊の言ったことは全て本当のことだと知らされた。

しなければいけない事は沢山あるがとにかく同盟国であるエスペリアに連絡しないと。

僕は小飛竜に急いで筆を走らせた手紙を持たせエスペリアに向かい放つた。

夜も深くなり、王宮も寝静まつた頃、俺、メイル、スイは中庭に集まつた。

「シンシア以外は揃つたな。アイツやつぱり来なかつたか」

まあ分かつていたけどね。

とにかくラチがあかないので早速起こしに行こうとしたが

「別に居なくともいいんじゃない？」

メイルが不機嫌そうに拒否した。何かあつたんだろうか？

「いや、 少数で行動する以上高レベルの賢者は居た方がいいだろ?」

「スイが居るじゃない」

「ワシも魔法使える者が居るなら居た方がいいと思つぞ!」

「うう…」

スイにそう言われメイルはしぶしぶ引き下がったがさらに不機嫌度が増したような気がする。

「わりー！遅れちまつた」

何か声をかけるべきか迷つているとシンシアが歩いてきた。
自分からやつてくるとは明日は雨だな。

「いやあ時計が俺の部屋なくてさ。 時間が分からなかつたんだ」

この世界の時計、標準時について

アザーワールドでは4時間ずつに区切つた時間表示が一般的。これは正確な時間を計るのが困難なためであり、2セット（つまり8時間）で朝晩が区切られている。

それぞれの時間表示は以下の通り

朝

3時～7時…水の刻

7時～11時…火の刻

昼

11時～15時…風の刻

15時～19時…地の刻

夜

19時～23時…光の刻

23時～3時…闇の刻

それぞれ時間帯によつて魔法が強くなつたり弱くなつたりする。
水の時なら水魔法が強く火魔法が弱いといった具合だ）

ちなみに魔法の優劣は水　火　風　地　水

光と闇は優劣が存在せずセの強い魔法や特徴的な魔法が多い。代表的な魔法に光は辺りを明るく照らすライト、闇は辺りを暗くするディップなどがある。

俺のフレイムソードなどスキルの属性もこれにならう。

時計、標準時の説明終了

「シンシア、お前ただでさえ時間にルーズなんだから早めに買つと
けよ」

「へいへい」

「何よあんた。待たせといて謝罪のひとつも無いなんて失礼なヤツ

ね

全く悪びれる様子がないシンシアにメイルがくつてかかる。シンシア自身もその指摘に異存は無いよう軽く頭を下げた。そして顔を上げ

「じゃあ行くぜ！久々のクエストだからな！」

この有り様だ。

メイルの不機嫌オーラが収まるわけも無く俺達はギスギスした空気の中森に向かつた。

闇の刻に入つて間もないだろう。夜風に吹かれ薄氣味悪く葉が揺れる。

先頭はやる気満々のシンシア、次いで俺、メイル、スイと一列になり森の奥へと進む。

歩くたびに地面に落ちた枯れ木がパキッ、パキッと鳴るのも不気味感を助長していく正直帰りたい。

「いやあ、なんか不気味だな〜」

「全く緊張感の無いヤツね。カイル、こんなのが先頭で良いわけ？心配なんだけど」

「お、おう。別に問題ないだろ。道はスイが分かるから迷う心配はないし」

若干声がうわずつてるのが自分でも分かる。最後尾のスイがクスクス笑つてるのがいい証拠だ。

ガザツ

「！？」

びっくりして音が鳴つた方を見やる。

茂みから見える暗闇の中に鈍く光る球体が2つ。だが俺は安堵した。なぜなら

「…」や～

その球体の持ち主はとても小さく、俺が拾ってきたものだからだ。

カイルはカイを抱え上げ首をかしげた。
大方なぜここに居るのか？と思つてゐるに違ひない。
正直私も不思議に思つた。けどそれよりもムカつきの方が大きい。
さつきからずつと思う。

(なんであの女ばっかりひいきすんのよー。)

シンシアといつ名前、そして仕草などみると口調は男っぽいが間違いない女だ。

確かにカイルの話だと昔パーティーを組んでいた仲間らしいし昔話にふけるのも分からぬでもない。

でももつと許せないのは彼の私に対する態度だ。

私がなんで怒ってるか分かつてない。

大体私がカイルを好きなのは周りから見ても私の態度で分かると言われた事もあるのになんで当の本人が全く気付いてないのかはなはだ疑問だ。

(むー)

カリカリしてもしょうがないのは分かつてる。

でも人は簡単に自分の心をコントロールできないもので、私は楽し

そつに歩くシンシアを睨みながら足を動かした。

よくわからないがカイはいつの間にか私達の後をついてきていたらしく、カイルの肩に乗って目を光らせてくる。

「ん?なんかあつちの方に誰か居るみたいだぜ。静かに近づいひ」

先頭を歩くシンシアが言つとおりよく見るとかすかに人影が動いてるのが分かる。普通この距離で分かる人なんて居ないんだけど、カイルはこれを見越してシンシアを先頭にしていたのだろうか?

私の中で少しだけシンシアの評価を上げて忍び足で人影に近寄る。

茂みにしゃがみこみ耳をすまると会話がわずかだが聞き取れた。

「おかしいわねえ。封印を解いたのになかなか見つからないわ」

女性の声だ。

年齢は20代半ばから後半かな？

周囲には4、5人の部下らしき人がいる。

隣で息を潜めるカイルにこいつぞり見つからないように話しかける。

(封印を解いたって何のことかしら？森から聞こえる音と関係ありそうね)

(ああ、とりあえず話を聞いてみよう。ヒントがあるかもしれない)

「町の人のウワサだとここにあると思つんですけどね」

「そうね。これじゃわざわざワージアから飛ばして来た意味がないわ。あと調べてないのはどの辺り？」

「えー……あとは奥の方ですね。闇の刻の間に全て済ませたいですし早く生れましょ」

そこで会話を終え謎の集団は森の奥へ消えていった。

少し間をとり警戒する。……どうやら行つたみたいね。

私達は茂みから出て木陰に隠れながら作戦会議を始めた。

「リージアの封印を解いたと言つておつたな」

スイが木にもたれながら腕を組んで言つた。

「もしかしたらあいつらが例のスパイなのかもな」

「カイルの言うとおりその可能性は高いわね」

「スパイって何の話?」

「そうか、シンシアは知らないんだつたな。実はリージアの新しい王様が本来ならエスペリアに同盟の締結に来るハズだつたんだがエスペリアにスパイが紛れ込んだという話が出て中止になつたんだ」「なるへそ、でアイツらがそのスパイじやないか? って話か

「そういうことじや。闇の刻の間に終わらせようと言つておつたところをみるとあのリーダーらしき女は闇魔法の使い手のよづじや。シンシアよ、闇の刻は光魔法の力が弱まる。気をつけのじや」「分かつてゐるつて。闇は弱点魔法が無いからな、俺の得意魔法で -

「それは止めてくれ。命がいくつあっても足りない

「え、いいじやんよ~」

「ダメだお前の魔法は無差別すぎる」

「いや、でも相手が強かつたら - -

「喧嘩しないで早く追いかけましょ?」

メイルに俺とシンシアの足を踏みつけながら怒られた。

俺達は一時休戦してヤツらが消えていった方向の奥へと足を踏み入れていった。

王宮の裏にある森は正式な名前は無いが通称『三段深林』と呼ばれている。

森は王宮から見て奥に行けば行くほど深くなり飛竜に乗つて上からこの森を眺めた人が茂り方が三段になつてゐるよう見えるという事でこの名前を付けたのが始まりらしく、俺が新兵達を鍛えたりしていいたのは一段目と呼ばれる場所である。

そして俺達は一段目にあたる場所に足を踏み入れた。

一段目は森の中からでも空がよく見えるが一段目に差し掛かるところどころ空が葉で覆われ暗くなつてゐる場所がある。

とメイメールが言つていたが初めて一段目に来た上に闇の刻でビームも暗いので今ここが一段目のどの辺りなのかは分からない。

道が分からないのでスイガ鼻を頼りにスペイ達を追つてゐるのを信じついていくだけしか出来ない俺達。

だが結論から言えばついていく必要なんてなかつた。

なぜなら

「おっ？さつきからコソコソついてきていたウジ虫どもはっけん。ねえ君達はどうやって死にたい？気が向いたら聞いてあげるぜ～」

敵が待ち伏せていたからだ。

木の上でサルのような座り方で見下ろすソイツは右目が赤く輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9101v/>

元一般人の勇者は世界を救う

2011年11月17日19時14分発行